

# 俗物語

楓麟

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

青春に、つきものなのは「当たり前」。

怪異の専門家、オーソリテイ。年齢不詳、アロハ野郎の忍野メメ。もう帰って来るとは、そう信じて疑わなかった阿良々木暦だったが――。

忍野メメが捉われた、蟹とも猿とも、猫とも違う、それでも“願いを叶える”怪異とは――？

これは、忘れ去られるべき物語。ありきたりが溢れる、“俗”な物語。

※化物語の二次創作、偽物語上と下の間の話です。また、副音声のネタが主ですので、ネタバレにはご注意ください。

※処女作です。いろいろ読み苦しいところが多いと思いますが、よろしくお願ひします。

※また、拙作は「猫物語（黒）」発売前に書いたものです。本編との矛盾はないようにしたつもりですが、ネタが被っていたりしております。ご了承ください。

※拙作はピクシヴさまにも投稿させてもらっております。

# 目次

めめホース

其の壹

其の貳

其の参

其の肆

其の伍

其の陸

其の漆

其の捌

其の玖

其の拾

其の拾壹

1

4

12

19

33

43

60

76

86

107

125

其の拾貳

其の拾参

其の拾肆

其の拾伍

其の拾陸

其の拾漆

其の拾捌

あとがき

140

156

173

188

199

219

238

257

## めめホース

## 其の壹

001

おしの  
忍野メメのことについて、今更語ることも何もないと思つていただけけれど、ふいに、思い出したことがあつた。

そう、思い出した。

面倒だったから語らなかつたとか、そんなわけはなく、今の今まで、忘れていたことだ。本当に、どうしてだろうと思ひ返してみると、どうして今まで忘れていたのかということまで思い出した。それはもう、いとも簡単に。それは、時系列を無視した形で本当に申し訳ないのだけれど、八月に入つて間もない頃のことだった。言い換えれば、僕の妹、阿良々木火憐あらかぎかれんの云々がひとまず解決したあと。もう一人の妹、阿良々木月火あらかぎつきひの云々にまだ気付く前。そんな頃の、出来事。

だから、また忘れてしまわないうちに語つておこうと思う。

忍野メメ。

怪異関係のエキスパート。

専門家、オーソリテイ。

年齢不詳の、アロハ野郎。

定住地を持たず、旅から旅への駄目大人。

俗か反俗かと問われれば、誰しもためらわず反俗と答えるだろう。

そんな彼に、僕は救われた。春休み、吸血鬼に襲われ、吸血鬼と化した僕を人間に戻

してくれた。

猫に魅せられた羽川翼。はねかわつばさ

蟹に行き遭った戦場ヶ原ひたぎ。せんじょう

蝸牛に迷った八九寺真宵。はちくじまよい

猿に願った神原駿河。かんばるするが

蛇に巻き憑かれた千石撫子。せんごくなでこ

みんな、彼から助けてもらった。

ただ、忍野は「助ける」などという言い方を嫌い、いつもこう言った——「勝手に

助かるだけ」。

軽薄で、皮肉屋で、悪趣味で、意地悪で、不遜で、お調子者で、性悪で、不真面目で、子芝居好きで、気まぐれで、わがままで、嘘つきで、不正直な彼だが、とても、お人よしなのだ。

彼はかつて、住宅地から少し離れた位置の、四階建ての学習塾、というよりは廃墟に住んでいた。

そう、かつて。

かつて彼は春休みから六月半ばまでの数ヶ月をその廃墟で過ごししていた。不法占拠も甚だしい。

それでも、彼の仕事——怪異譚の蒐集と調査を終えた彼は、町を去った。

決して、別れの言葉を言わない男だった。

そんな彼が、またこの町に戻ってくるはずなどない。

なかったはずなのに。

どうしてまた、僕は鈍感なんだろう。

少なからず僕は夢見ていたのだろう。彼が再び、この町に戻ってくるなんてことを。心の片隅で、思っていたのだろう。

実際、振り返ってみれば夢のような出来事だったと思う。

この物語は、俗に言う「続編」でもあり「番外篇」だ。反俗の欠片もない。そんな、ありきたりな物語。ありふれて、溢れている物語。

## 其の貳

002

「つまりね、これはこういうことなのよ」

僕は、耳を疑った。

朝、起きてみると九時。もし今日学校があつたら大遅刻である。

そこで、おや、と僕は首を捻る——いつも僕を叩き起こしに来てくれる妹達がいらない。夏休みだろうと何だろうと年中無休で起こしに来てくれる彼女達がいらないというのは変だ……そしてその時、声が聞こえたのだ。

羽川翼の声だった。

急いで妹達の部屋へ行くと、そこには僕の妹火憐と月火、そして羽川の姿があつた。

僕は目を疑った。

羽川翼が、あの羽川翼が、阿良々木家にいる——！

「あ、兄ちゃん」

「あ、お兄ちゃん」

「あ、阿良々木くん」



三人同時にこちらを向く。すげえ画だ。

「兄ちゃん、遅いぞ。もうあたしらご飯とつくの昔に済ませたからな」

「お兄ちゃん、やつぱり私達が起こさないと駄目なんだね」

「阿良々木くん、いくら夏休みだからと言って寝坊はいけないよ。火憐ちゃんと月火ちゃんを見習わないと」

「……………」

うわー。朝から羽川さんに会うなんて。というか家にいるなんて。いつそのこと起こしに来てくれればよかったのに！ もちろん羽川が！

……でも、妹を見習えって言われてしまった…。絶対見習いたくねえよ。つうか誰が見習うか。

「…………羽川、どうして妹の部屋に、つーか僕の家にいるんだ？」

そこ訊いとかないと。夢オチだったらショックだけど。いや、もうすでに夢のようなんだけど。

「え？ 知らなかったの？」

そこでは、と笑う羽川。

「今日は阿良々木くんの家で、火憐ちゃんと月火ちゃんとお勉強」

羽川翼。

委員長の中の委員長。

究極の優等生。

同級生、クラスメイトで、もちろん委員長を務めている。そして僕は副委員長だ（と、胸を張って言えるほどの仕事を、僕はしていないのだが）。

彼女とは春休みに知り合ってから現在進行形で世話になりっぱなしだ。

そんな新生羽川さんが、朝っぱらから僕の家にいるのだから、びつくりどころの話ではない。

そりやもう、空から天使が舞い降りたに等しい。

「おいおい、火憐ちゃん月火ちゃん——」

あ。うっかり言っちゃった。羽川の前で嘘はつけないらしい。

「お前達は毎日毎日、僕を起こしに来てくれたじゃないか。どうしてよりによって今日、起こしてくれなかったんだよ」

「いや、兄ちゃんもそろそろ自立する頃だと思ってさー」

答える火憐。腕を後ろに回してすましていやがる。

「それよりお兄ちゃん、朝ご飯食べたら？ 今日だってお勉強休みなわけじゃないんで

しょっ。」

「……………」

こういう時にうまく逃げようとすうのが月火だ。畜生、羽川の前だといつものように怒れない……………!

そこまで羽川の前ではいい子でいたいのか、僕!

それにしても、シヨツクだ。もつと早起きしていたら……………心の中で嘆く。

「ああ、なんてことだ……………羽川に、『早く起きないと遅刻しちゃうぞ』つて起こしてもらえたかもしれないのに」

「誰よ、それ……………。あと、そういうのは声に出して言わない。ていうかそもそも思つてほしくもない」

朝から厳しい言葉を頂戴した。

ていうか本当に勉強してたん……………。

机の上を見ると、中学生の教材が見える。そういえば、羽川の奴、僕には「家庭教師」つて言うのに妹達には「お勉強」つて言つてたな……………。

「いやー、翼先生は本当にすごいぜ、兄ちゃん。もうどんな問題でもなんつても簡単に解いちやうんだ。どんなもんだい、つてな感じだな」

そんなくだらない駄洒落はどうにかならぬのか。それでも僕の妹かよ。

「おかげで夏休みの宿題もはかどるよ」

続いて月火が言う。

羽川を利用するな。そんな中学生の問題なんて、羽川にかかれば数秒で解いてしまうんだ。というか脳味噌の無駄使いだ。

もしかしたら問題を讀んだ瞬間にもう答を出しているのかもしれない。

「ううん、阿良々木くん。火憐ちゃんも月火ちゃんも、自分達の力でちゃんと解いてるんだよ。私は分からないところのヒントを出してるだけ。二人とも、とっても賢いから私が教えることなんてないくらいだよ」

「翼先生……」「羽川先生……」

まったく、こいつらの信頼関係はかなりのものになっているようだ。

相手が羽川だしな。

火憐も月火も、こないだの事件以来すっかりなついちゃってるし……火憐はまあともかくとして、月火は羽川の影に隠れて、ただのいい子にしか見えない。

ずるいなあ。

あいつはそんな単純な奴じゃないんだけどなあ。中身が外見を裏切るってのは恐ろしい。

「じゃあ、僕は用無しなんだな。じゃあお前達の相手は後でだ。僕はご飯食べたら、勉強しに行くよ」

「うん、今日の当番は戦場ヶ原さんだからね。早めに行った方が戦場ヶ原さん喜ぶと思

うよ」

……そうか？

「……ときに、阿良々木くん」

部屋を出ようとした僕を、羽川が止めた。

「私は一日中ここにお邪魔するけど、」

「一日中つて。……夜もっ!？」

「……いま何を考えたのかな？」

しまった。口が滑っちゃった。

ジト目の羽川さん。

「もちろん、夕方には帰るから、阿良々木くんもそれまでには帰っ

てきてね」

「なんだ、そうなのか……」

「兄ちゃんが化けの皮を剥いだぞ！ 翼さん、これが兄ちゃんの正体だぞ！」

黙れでつかいの。と、言いたくても言えないっ……。

く……。帰ったら覚えてろよ。調子乗りやがって。

「阿良々木くんは、そんな人じゃないよ。阿良々木くんは、強いて言うなら、もつと……」

言葉を濁す羽川。

何も言わない。

意味ありげな顔をするだけ。

何も身に覚えはアリマセン。

やっぱり、彼女は変わったなあ。

特徴的だった眼鏡も三つ編みもやめ、今はコンタクトでシヨート。まあその原因は僕にあるといつても過言ではない。

「まあとにかく、帰ってきたら話があるから。それまで勉強頑張つてね」  
話？

何だ、すげえ気になるな。

勉強もはかどりそうだ。

「お留守番は任せてよ。私達三人がいれば、どんな敵も尻尾をまいて逃げ出すよ」

と、月火。お前らどんだけ敵がいるんだよ。続いて火憐が、

「フェザー&ファイヤーシスターズがいる限り、阿良々木家は安泰なのさ！」

どんと胸を叩く。

だからその通り名やめろつて。何もうまいこと言えてねえんだよ。

呆れて物も言えねえ。

「やれやれ、じゃあお前らもしっかり勉強するんだぞ、羽川に面倒かけんな、そんなこと

したら僕が許さないからな」

偉そうだなあ、と口を尖らせる二人。

構うもんか。

「ああ、あと、阿良々木くん」

今度こそ部屋を出ようとした僕を、再び止める羽川。

羽川はにっこりと笑って。

僕に指摘する。

「阿良々木くんは、いつも寝起きはそんな髪型なのかな？」

## 其の参

003

急いで朝食を済まし、着替えを済ませ、髪の毛を整えた僕は、玄関で妹達に出くわした。

いや、つうか、僕の家だから当たり前つちやあ当たり前なんだけど。

「……お前ら、羽川との勉強はどうした」

「なんだよー、兄ちゃんを見送りにきてやったんじゃねーか」

火憐が頬を膨らませる。続いてばつちり浴衣でキメている月火が、

「それともお兄ちゃんは、私達が起こさなかつた事、まだ怒ってるの?」

怒ってるよ。怒ってますよ! もっと早く起きていれば、もっと羽川と話ができたの

に……!

いや。

とはいっても、羽川さん奇数日担当だから、この間、七月三十一日と八月一日で連続二日間お世話になったから別にそこまで感じてじゃないけどさ。

朝起きたら家で羽川の声がするんだよ?



朝起きたら家に羽川がいるんだよ？

気付かず寝ていた僕も悪いけど、やっぱり起こして欲しかった！

そしてできれば羽川に！

「羽川さんも、お兄ちゃんを送ってきなさいって言ってたし」

はにかむ月火。その笑顔は何だ。

……月火つてば今日は羽川が来てるから、「勝負和服」なんだろうなあ。

まあ妹が何を着ようと僕にはもうどうでもよくなってきたんだだけ。

今日ははだけずしつかりと着ているから、よしとしよう。別に残念なわけじゃない。

「つかお前達、羽川がいるからって調子乗りやがって。僕のイメージが台無しになつたらどうしてくれる」

「兄ちゃんのイメージなんて、とうの昔に台無しだと思っただけだな」

「台無しというか、台がなくなって底無しになっちゃったって感じだよ」

なんだと！ 支持率はまだ、結構……いやもうないかな。

「だって翼さんを見てる兄ちゃんの顔、凄いもん」

「……」

今までどんな顔してたんだ。

「あれは変態の域だな」

「DMのお前に言われたかねえよ！」

怒鳴らないよう注意して突っ込みを入れる。

羽川さんが降りてきたら大変だ。

やっぱし兄妹こうでない。

羽川がいるとやりにくい。

「どんな顔してんだ、僕は……」

「安心して、お兄ちゃん。私達の部屋には、監視カメラが設置されてるからその顔確認で

きるよ」

「恐怖っ！」

何？ 監視カメラ？ んなもんなんで設置してんだよ！

余計安心できねえ。

「いつ何時敵が来るか分からないからな。防犯ブザーなんかあたらしらにとっちゃただの

ガラクタだ。監視カメラと盗聴器が仕掛けてあるのさ」

「さらに恐怖っ！」

なんつー妹だ。

露骨に部屋に入れねえよ。いや、入らないけれども。

「見る？」

「見ねえよー！」

ほんとつぼく言うんじゃねえ！

信じる勢いだよ！

「そう。残念だなあ。お兄ちゃんのあの顔、本当に確認しなくていいの？」

「おいちよつと待て。月火ちゃん、僕の顔は本当に深刻にヤバかったのか？」

無言の月火。

垂れ目が怖い。絶対何か含んでるみたいに見えるつて。

「ああ、そういえば兄ちゃん。顔といえば、見たか？」

「こないだ、『化物語 ひたぎクラブ ブルーレイ』をみんなで見たんだけどな——」

「おいおいおいおい！」

なんだそれは！

僕たち映像化!?

発売されちやつてるの!?

つうかそういうことここで言っちゃ駄目！ 禁句！

「いやあ、あの時の翼さんを見てる兄ちゃんの顔も、なかなか——」

「ヤバかったの!?!」

いや、カメラ的にはあの時僕映ってなかったよね!?

あ、しまった言っちゃった！

僕たちの日常はDVD化なんてされてません。

「副音声版でも聞いたけど、翼さん兄ちゃんに呆れてたぞ」

「副音声なんてのもあるの!?!」

「うん。翼さんと、もうひとり誰かが副音声を入れてたぜ。お陰で私達の次回予告が全

然聞こえ——」

「もうこの話はするな!」

あとで!

そして羽川さんにも確認だ。副音声なんて、知らないぞ!

それにお前達が次回予告担当ってのも初耳だよ!

とにかく。

「もうそろそろ行かないと。遅れたら僕ただじゃ済まされないといか、殺されちゃう

かもしれないから」

「はにや? 兄ちゃん、早く行かないと殺されるのか? そりや大変だな、一体どんな奴

を敵に回したんだ。なんならあたしも付き合うぜ」

「喧嘩じゃねえよ」

勉強つつただだろうが! 聞けよ!

頭いいって設定じゃなかったか？

そしていい顔してんなあ、そんなに暴力沙汰が好きか。

喧嘩と聞いて輝く妹の顔。そういう喧嘩はあたしの花とか火憐ちゃん言ったもん  
な……。

僕よりもお前らのほうが危ないだろ。

「そーいや兄ちゃん、馬鹿って何で馬と鹿なんだろうな？ 馬と鹿は馬鹿なのかな？」

「お前よりは賢いだろうよ！」

そんな考えを持つてる時点でお前は馬鹿だ。

「じゃあ僕はもう行くぞ。僕の羽川に迷惑かけんじゃねーぞ」

「いつから翼さんは兄ちゃんのものになったんだよ」

「羽川さんに言っちゃうよ」

う…それは勘弁。

それでも羽川に怒られるっていうのも悪くないと考えてる自分が怖い。

怒るなら全身震わせて怒ってほしい。

「まあいいさ、うちのこととはあたしらに任せな」

「まあいいや、いってらっしやい」

二人に見送られ、僕は外に出て、ママチャリに跨った。

時刻は九時半。いつもより早めの出発。

うまくいけば、お昼は戦場ヶ原の家で食べられるかもしれない。

……いや、それは期待しすぎか。

戦場ヶ原の家に行くのは、あくまで受験勉強の為なのだ。  
そして。

朝から夢のような光景を見てしまった僕は。

実際に、それが夢のように忘れ去られることになるなんて。

思いもしなかったのである。

## 其の肆

004

春休みのある出来事の結果……いや名残で、僕の神経代謝は著しく上昇している。

例えば、怪我の回復が早い。

視力にいたっても同じ。

今の僕は、とても目がいい。

実感はないんだけど。

その目がふいに誰かの姿を捉えた。

だから、僕はペダルを漕いでいた足を止めた。

数十メートル先を、大きなリュックサックを背負った少女が歩いていった。

歩きたびにびよこびよこ揺れるツインテイル。

誰だ、あの子。

いや、本当に見覚えのないんだけど。

この町の子じゃあ、ないよなあ？

だって僕は町内の女の子の顔なんて全て把握済み……いや、みんな仲良しなだけ

ど、このリュックでツインテイルの少女は一体誰だ？

うーん、見たところ困っているように見えなくもない。きよろきよろしてるし。

ここは紳士として、「やあ。何か困っていることでもあるのかい？」と声を掛けてやるべきだろう。人畜無害な男とは、僕のことだからな。

それでこそ男だ！

自転車を道の端に止める。音もなく。

いや、これは単なる配慮であり、別に気付かれたらまずいとかそんなことは全然考えてない。びつくりさせちゃまずいから、チャリはしばらく停めておこう。別に両手が塞がってるとまずいとかそんなことは全然考えてない。ママチャリの前かごに乗っければ、誘拐されると勘違いされちゃまずいからな。

そんなこと普通考えないだろうが。子供は想像力豊かなのだ。僕はよく知ってる。

あれ？

何かこの子、見覚えはない？

いや、気のせいかな。

彼女はまだ僕に気付いてないようだ。相変わらず周囲を見回して、落ち着きがない。

うん。

ここは僕が行くべきだろう。



前振り終わり。

「はちくじいいいいいいいいいいいいいいいい！！」

猛ダツシユで彼女目がけて走る。

いやゴメン僕彼女のこと知ってるんだ。

そりやもう大の友達。

忘れるわけないだろうが！

「会いたかつたぞ、この野郎——って、あれ——！！？」

僕の声や足音が聞こえなかつたのか、僕が彼女の元に駆け寄る前に、というか抱きつく直前で、八九寺は角を曲がってしまったのだ。

結果。

勢い余つて僕は電柱にぶつかった。

頭からだつたら危なかつた。きつと割れてた。

もの凄い音がして。

僕は仰向けに、大の字に倒れた。

「あ……おろろ木さん」

この状況でも嘯むか。

気付けば、八九寺が僕を見下ろしていた。申し訳なさそうな表情。

「人をいつもおろおろと落ち着きがない、どうしていいか困ってる奴みたいと呼ぶな。僕の名前は阿良々木だ……」

こうして的確な突っ込みを入れられる僕もどうかと思うが。

それに、おろろ木って、阿良々木と全然違うけど、ア段を才段に変えただけなんだよな……。

「失礼。噛みました」

「違う。わざとだ……」

「噛みまみた」

「わざとじゃないっ!？」

「まみまみた」

「さらに噛んでるぞ!」

何て言いたかったんだよ、意味分かんねえぞ!

仰向けのままいつものパターン。

いやあ、それほどの仲とおこう。

立ち上がる僕。

あまりの衝撃（体にも心にも）を受けて起き上がれないかと思っただけど、僕の体はそんなヤワじゃないようだ。

というかこれ、つい最近戦場ヶ原が僕にやったことと似てたんだよなあ……。  
シヨックも二倍。

あれ？

そういうえば、八九寺って後姿を見かけること、多くない？

正面から会ったこと、あつたっけ？

？

色々謎だ。

「仕方ないじゃないですか。阿良々木さんがおろおろしているので、わたしまで動揺しちゃったんです」

「そうなのか……」

置いてきた自転車を取りにいき（それまで八九寺はその場に突っ立ったままだった）、再び合流。

戦場ヶ原家の方角を向いて、歩く。

「あれはないと思いますね」

「何だ？ あれって」

「先程の阿良々木さんのモノログです」

「聞こえたのか!？」

みんな僕の司会進行ちゃんと聞いてるんだ！

前神原もそんなこと言ってたよな！

悲しげな表情をする八九寺。

「ええ。阿良々木さんが、わたしのことを忘れてしまっていたなんて…もうショックのあまり、泣きそうになって無意識に角を曲がってしまいました……」

「じゃああのモノローグがなかったら、お前は角を曲がらなかったんだな！」

何てことだ！

あの馬鹿馬鹿しいモノローグのせいで、僕は八九寺を抱けなかった！

八九寺真宵。

小学五年生の少女。

母の日に出会ったのが最初。

「なんなら、やり直しも可能ですよ。電源をお切りください」

「ゲームじゃねえよ！」

……って、やり直せるの？

「ふう。阿良々木さんは本当にそういうことには敏感ですよ。ええ、可能ですよ」

「やり直し……をか」

八九寺は一瞬、下を向いた。

そして、次の瞬間。

「がうっ！」

「うあっ！」

いきなり嘯み付いてきやがった！

違う、僕が求めているのはこつからじゃない！

もうちよつと前からだ！

「がうっ！ がうっ！ がうがうっ！」

野生化モード八九寺。

「落ち着け、僕だ、僕だぞ！」

嘯み付いてくる八九寺を（しかも容赦ない）、必死で止める僕。

くそう。やっぱりやり直せないじゃねえか。

「ふしゃーっ！ ふしゃーっ！」

「僕だ、阿良々木だ！」

八九寺は立てていた爪をしまう。目も落ち着きを取り戻す。

だからこいつは何のモンスターだよ。怖いな。

「あ……阿良々木さん」

「そこは嘯まないんだな！」

「え？ 何をおっしゃるんです、早く突っ込んでください」

「……………」

「ほら、早く突っ込まないと話が進展しませんよ」

「いや、ちよつと待てよ八九寺、僕はどう突っ込めばいいんだ？」

「やれやれ。突っ込みのプロが突っ込みが出来ないなんて。」

わたしが求めている台詞は、『人を変態でロリで頭の悪い奴みたいに言うな。僕の名前はおろろ木だ』——」

「僕おろろ木だったの!？」

おろおろの僕。

でも今の八九寺の台詞を聞くと、彼女から見れば僕は変態でロリで頭の悪い奴なんだ。

傷つくなあ。

「それはともかく阿良々木さん」

話を変える八九寺。

このスピードには追いつけない。

つうか噛んどいてまたすぐに阿良々木と呼びなおすのはどうなんだ？

「今日はどこかへお出かけですか？」

「ああ。今日は戦場ヶ原の家で、受験勉強だ」

「そうでした。阿良々木さんは受験勉強で忙しいんですね。——小学校の」

「どんだけ馬鹿なんだよ！」

「本当に、何年浪人すれば気が済むんでしょう、なんならわたしが教えてあげますよ？」

「小学校はとつくに卒業してるわ！」

戦場ヶ原も戦場ヶ原で大変じゃねえか！

自分は大学受験の勉強で、僕には小学受験の勉強を教えるんだぞ。

頭こんがらがらるつての。

「阿良々木さんはロリコンですからねえ。浪人して小学校に入れば、即阿良々木ハーレ

ムが築けるんですよ？」

「嫌な事を言うな！」

「ところで、受験勉強といえませんが」

話を戻す八九寺。

ここからへん好き勝手だ。

権限を持っているのがずるい。さすが八九寺というべきか。

「やはり、阿良々木さんお参りとか行くんですかね？」

「はっ。」

「ほら、合格祈願ですよ。戦場ヶ原さんと神社に行ったり、しないんですか？ お正月とか」

「お参りね……」

ガハラさんはそういうの信じない人だからなあ。

「行かないんじゃないか？ 受験って何はともあれ実力だろ？」

「いいことを言いますねー、阿良々木さんの癖に、生意気です」

確かに。

今まで勉強してなかった奴が言う台詞じゃないな。

でもこの夏休み、僕は成長したと思えるくらい成績が伸びている。

これも、学年トップとトップクラスに教えてもらっているお陰だ。

「わたしは受験のとき、絶対行くと思えますけどねっ」

「ふうん……」

そうなんだ。

そういえば八九寺の頭の良さは未だに掴めていない。

馬鹿なのか、頭いいのか、未だに分からない。

「はい。多分、絵馬に書くと思いますよ」

「ほう、『絶対合格！』とかか」



「いえ、『絶体絶命!』と」

「書くなよ!」

書く暇あるなら勉強しろ!

やっぱりこいつ馬鹿なのか?

「まあ、油断は逸物ということです」

「それだと油断していいみたいになるぞ!」

正しくは、油断は禁物。

「どうせ阿良々木さんは、絵馬なんて女の子の名前だと思ってたんでしょ?」

「さすがにそうは思わねえよ!」

どんな勘違いだ。

「わたしだったら、読んでもらう為にアピールをしますかね」

「アピール?」

「かの有名なピカソのような絵を添えて書くのです」

「確かに目には止まるだろうが、あのスペースにそんな絵描ききるのか!」

無理無理無理。

ピカソさん自身も無理じゃねえ?

「でも絵馬って、書いてどうするんでしょうね」

「根本から否定しやがった……」

「だって、あんな量の絵馬、誰が読むんですか」

まあ。

神様も全部に目は通せなさそうだよな。

手は千本あつても、目は千個もないだろう。

全部読んだとしても、それが叶うわけでもないし。

「いわゆる決意表明みたいなもんですね。あるいは、自己満足」

「いや、そこまで言うことはないだろう」

途中までいいこと言ってると思ってたのに！

自己満足で終わらないように、実際に頑張つて叶えるもんだろう。

夢つてのは。

そんなもんだ。

「まあ、阿良々木さんは馬鹿ですけれど、最終的には大学、受かりそうですもんね」

「ちやつかり馬鹿って言つたな」

そしてひどい！

「でもまあ、そう思ってくれるのは嬉しいよ……」

僕も頑張れるつもんだ。やる気が出てくる。

「いひひ」

突然笑い出す八九寺。

何なんだよ急に。

「阿良々木さん、ご存知ですか？」

「何だよ」

「わたしの登場するシーンが、本作で一番長いということに、です」

「ご存知なわけわけねえよ！」

まだ半分も到達してねえだろうがよ。

そこで出るか八九寺P！

「まあ、わたしの手にかかれば私の登場シーンを一番長くすることも容易いのです。ああ、でもそろそろ章を変えたほうがいいですかね」

「どんな権限を持つてるんだよ、お前は……」

「読者の方も飽きると困りますから。ほら、携帯で読まれている方なんて、ひとつの章でも長すぎるといっちゃ『次へ』を選択しなければならぬですよ。私は読者の配慮もきちんとできるヒロインなのです」

というわけで。

彼女の言う通り、章変え。

どうやらまだ八九寺は話し足りないらしい。  
僕も付き合おうとしよう。

運がいいことに。

時間はまだ、あるのだから。

## 其の伍

005

本当に章変えしやがった。

「そういえばデュララ木さん」

「僕のことを東京の池袋でキレた奴らが繰り広げる物語のような名前で呼ぶな。僕の名前は阿良々木だ」

「失礼。 噛みまみた」

「飛ばした!」

面倒なのか!?

面倒だったらやめてもいいんだぜ!?

はつきりしろよ!

「何ならデュララ!!さんと呼んだ方がよろしかったですかね? その方が語呂もいいですし」

「いやいや、よくねえよ」

「何なら折原臨也さんとお呼びしましょうか」

「それ分かる奴にしか分からないネタだな！」

「デュラララ関係だけれども。」

「何はともあれ、折原さん」

「違う、僕の名前は阿良々木だ！」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ……」

「噛みまみた」

「わざとじゃないっ!？」

「借りました?」

「何をだよ!」

「それはもちろん、『化物語 まよいマイマイ ブルーレイ』ですよ」

「またそれか!」

「しかもまたブルーレイ!」

「そんなにいいのだろうか。」

「というか道理で「借りました?」なんて普通の言葉にしたわけだ。」

「借りました? 借りましたっ?」

どうしてみんなこの話をしたがるんだろう。

まあ僕も映像化嬉しいけど。

仕方ない。話に乗ってやろう。

「いや。……借りてない」

「さすが阿良々木さん。借りるだけでは物足りず、買っちゃったんですねっ？」

「いや。八九寺。悪いけど……」

見てもない。

いや、あれトラウマでもあるし。

だって結構危ないシーン収録されてんだぜ？

「そんな……」

一瞬でひまわりが咲いたような八九寺の笑顔が消える。

マジでへこんでいた。

申し訳ない。

「まさかロリコンな阿良々木さんが、わたしの映像を見ていないなんて……」

「ロリコンとさりげなく台詞に混ぜるのはどうかと思うが」

「ということは、わたしと羽川さんの副音声もご覧になってないということですね？」

「何!？」

八九寺と羽川のコンビで!?

またまた聞いてないよ羽川さん!

「はい。まあご覧も何も、副音声なので映像はありませんから、お聞きになっていないと訂正しましょう。ハッチーとバサ姉のコンビでお送りしていました」

ばさねえー!

見てー!

聞きてー!

「それに映像特典付です。わたしのビデオを買った方はご存知でしょうが、もれなく羽川さんと阿良々木さんが揉み合うビデオが収録されています」

「何だそれは!？」

全く身に覚えがない!

あつても肩だけ!

「ディスクの裏面を読み込めば、見れるはずですよ」

「嘘つけ!」

「それも本編と同じく、たつぷり一時間半あります」

「長っ!」

それはきついだろ!



見る方もやる方も。あと撮る方も。

「まあそれはともかくとして、わたし的にはあのオープニング映像をご覧になってないというのとはとても残念です」

「オープニング……?」

「わたしが歌ってます、キュートでプリティーなポップミュージックです!」

知らない!

知らねえぞそんなの!

どうして僕はこんなに無知なんだ!

「何です、鞭ですか? 阿良々木さんはどんな趣味をお持ちなんでしょう」

「黙れ。勝手に変な解釈をするな」

どちらかといえば無恥か。

恥を知らない。

「でもまあ、一度は見ることをお勧めします」

「ああ。言われずとも見るよ」

本当に残念だけど、僕ひたぎクラブしか見てないんだ。

いや、あれ見るのも結構ヤバイと思うよ?

だってガハラさんのあんなシーンやこんなシーンがあるんだもん。

でも副音声は聞いてない。

次回予告も飛ばしてた。

これ以上この話をしたらボロが出そうなので、この辺で終わり。

「ところで、あたた木さん」

「人をさも痛そうな人呼ばわりするな。僕の名前は阿良々木だ」

「失礼。噛みました」

「違う、わざとだ」

「噛みまみた」

「わざとじゃないっ!？」

「蟹は滋賀」

「いや、北海道だ!」

滋賀にもいるかもだけど!

僕の中では北海道。

戦場ヶ原さん、約束、忘れてません。

「先程から疑問に思ってたのですが、ここは何処なんでしょう?」

「は?」

何だ。

ギャグパート終了なのか？

怪しい空気だ。

「いえ、何だかわたし達、ここは知っている場所のはずなのに、違う気がしません？」

「……………」

「具体的に申しますと、ギャラも貰えないのに強制出勤させられて、挙句の果てにいつものように馬鹿な掛け合いをさせられているとしか思えないのです」

「何言ってるんだお前!？」

八九寺P!?

そんなことはありませんよ!?

別にネットで二次創作として登場させられてるわけないじゃないか!

気のせいだよ、気のせい。

……………いやでも(どこどこ)?

「わたしは出演したくないって断ったのですが…聞いてもらえず、というか逆に一番出番が多くなってしまおうというこの仕打ち……………」

「八九寺プロデューサー大丈夫か」

「猿も筆の誤りとはこのことです……………」

「弘法も筆の誤りだろ!」

混じっちゃってる混じっちゃってる。

猿は間違えても仕方ないよ！

書道とか無理だろ。

「あるいは、河童の島流しもいいところですよ……」

「何をしたんだ、河童……」

何をしたら追放になるんだろう。

キュウリの食べすぎだろうか。

「ところで阿良々木さん、その、八九寺Pと呼ぶのはやめていただけませんか？」

「え？」

何でだ。

「いえ、その、Pって何か禁句みたいで嫌じゃありません？」

「そんなことないぞ?!」

お前そんなこと考えてたのか！

お前が言うことによつて逆にみんな気にしちゃうだろ！

「八九寺。Pってのはプロデューサーだけでなく、パーフェクトとかプロフェッションとかポライトとか、いい略語としても取れるじゃないか。ポジティブにプラスに考えようぜ」

「では、これからは八九寺プラスと名乗りましょう」

「それはよく分からない！」

「いやでも阿良々木さん。プラスと記号で表記したら、なんだかキラキラしている様に見えるかもしれないでしょう？」

八九寺十。

見えなくもない。

か？

高校生の僕からすると、何だか化学のイオン式っぽい。

K<sup>+</sup>、Na<sup>+</sup>、八九寺十。

いや、八九寺プラスってむしろゲームっぽい？

「わたしが言いたかったのは、そんなことではなく」

「何だ、違うのか」

いちいちまどろっこしいな。

「えーつとですね、阿良々木さん。わたし、この間ある方をお見かけしたのです」

「ん」

「その方は、アロハを着ていらつしやいました」

「……冗談はよそうぜ、真宵ちゃん。そういうの僕好きじゃないんだよ」

「いえ、別に阿良々木さんではありませんよ」

「分かってるわ！」

八九寺は真面目な顔をしてゆっくりと言葉を紡ぐ。

「忍野さんを、お見かけしたのです」

「……忍野。忍野、メメか」

「はい」

八九寺は頷いて。

そして言った。

「忍野さんが、再びこの町に来ているんですよ——！」

## 其の陸

006

「やっぱり、駄目だわ」

戦場ヶ原ひたぎは、ため息をついてシャープペンシルから手を離した。

シャープペンシルはノートの上に落ち、そのまま転がって僕の足元に落ちる。

「ちよつと待てよ戦場ヶ原。そうやって憂鬱そうにため息をついてるけど、今日で何回目だよ。何が一体全体駄目なんだ？」

「私がため息をつく理由なんていくらでもあるわ。駄目なのは、もちろん阿良々木くんの頭の悪さ」

「傷つくことをさらりと言うなあ！」

戦場ヶ原家。只今勉強中である。

「まったく……あなたが目の前にいるせいで、勉強ができないじゃない」

「いや、僕は勉強を教えてもらいに来たんですが」

「勉強？ そんなことも分からないの。勉強っていうのはね……」

「いやいや！　そういう意味じゃないぞ！」

「少なくとも！」

「勉強が何かは分かっている！　……多分。」

「教えてもらいに来たとしても、家に入れた覚えはないわ」

「あるだろ！」

「冗談よ、と戦場ヶ原は言う。どこから冗談ですか。」

「駄目っていうのは、阿良々木くんの頭じゃないわ」

「あーあー、どうせ存在とか言うんだろ」

「そんなことは、ない、けれども」

「嘘つけ！」

「明らかに言おうとしてただろ！　もう大体分かるんだよ！」

「む。これは心外ね。私の言おうとしていることが分かるですって……？　私はそれほど

分かりやすい、面白みのない人間になってしまったということかしら」

ふう、と再びため息をついて戦場ヶ原はシャープペンシルを拾う。同時に僕の足をつ

ねった。地味に痛いんだよ。

「ねえ、ガハラさん。ため息をつくたびに幸せが逃げていくって話、誰かがしてなかった

か？」



「え？ なあに、それ。とても感慨深いことを言う人が世の中にはいるのね。阿良々木くんとは大違いだわ。どこの誰かしら、一度会ってみたいわね。きつと素晴らしく清く賢く美しい人なのでしょうね」

「さりげなく自分を褒めてないか!？」

「さりげなくじゃないわよ。堂々とよ」

そんな胸張って言われても！

まったく、相変わらず面白いなあ！

今日は偶数日。

つまり、今日の家庭教師の担当は戦場ヶ原ひたぎというわけだ。

家庭教師といってもうちでは妹達がうるさいから、彼女の家で、勉強である。

……。

うーん。

なんか今日の戦場ヶ原さん、いつもと違くない？

機嫌がいい……とも少し違う。

学校では下ろした髪を、家では結っている戦場ヶ原の今日の髪型は、ポニーテイル。彼女はそれを前に垂らして、さらにそれを指でくるくる巻いたりしている。

……どうしたんだろう？

彼女のこうした些細な違いに気付けるのって、やっぱり僕と、強いて言うなら戦場ヶ原父と神原くらいなんだよな。

「ああ。やっぱり駄目だわ」

またペンを置く戦場ヶ原。

僕も鉛筆を置いた。

「じゃあ、休憩とかどうだ？」

「ええ、そうね」

あっさり同意する。

やはりいつもと違う。毒舌のキレも悪いような気がするし。

何かあったのだろうか。

「あら。阿良々木くん、水分補給？」

「ん？ ああ。喉渴いたからな」

夏だし。

暑いし。

突っ込み担当には辛い時期だ。

「そう。ねえ阿良々木くん。夏の暑さと私達のアツさはどっちがあついと思う？」

「ん。また難しい振りを……」

水を飲もうとした手が止まる。

「まあ、どちらがあついにせよ、阿良々木くんは厚いわけじゃなくて、薄くて弱いんだもんね」

「それをそこで持つてくるか！」

しかも羽川に言われた言葉だ！

あれは大いに傷ついた。

でもまあ、事実だよな。

休憩ということなので、回想シーンを挟んでもいいだろう。

以下、八九寺と別れるまでの回想シーン。

「忍野メメ、か」

「はい。間違いありません。あれは阿良々木ハーレムの第一期メンバー、忍野メメさんです」

「そういう言い方はないんじゃないの!？」

だからなんで三十過ぎのおっさんがメンバー扱いされてんだよ！

「私は直接お会いしたことはありませんでしたが、アロハ服を着ていらつしやっただので、もしやと思ひまして」

「それは、」

サイケデリックなものだったか、とか。

煙草に火を付けずに啜えてなかったか、とか。

見透かしたような態度をとっていたか、とか。

そんなことを聞こうとして、やめた。

聞くまでもないことのような気がしたのだ。

かつて忍野忍が逃げたときも、八九寺の情報は正しかった。

だから、というわけではないが。

忍野を見たと言うなら、それは嘘ではないのだろう。そして、きつと。

「分かった。ありがとな、八九寺」

後で、あの廃ビルに向かう必要がある。

確認のためだ。

忍野のような流離人が住めるような所といったら、この町ではあの廃ビルくらいのも  
のだろうか。

「もうすぐ戦場ヶ原の家だから、そろそろお別れだな」

寂しいけど。

「そうですね。これでわたしの出番もようやく終わるわけです」

「嘘っ!？」

悲しすぎる！

もっとお喋りしようよ。

冗談ですよ、と八九寺ははにかんで。

「まあ、また会えますよ。それでは蟋蟀さん、お元気で」

「ちよつとそれにはどう突っ込んでいいか分からないがとにかく言わせてもらおう。

八九寺、蟋蟀というのが僕の名前とはもう分からないくらいだからもしかしたら聞き間違いだったかもしれないけれど、僕の名前のつもりで呼んだと仮定して言わせてもらう、お前は僕のことを何だと思ってるんだ!? それに別れ間際に嘔むんじゃねえよ、まだ話が続くみたいじゃねえか！」

しかもコオロギさんって。

最後しか合ってないよ。

「もっとお喋りしたいとおっしゃるからです。

私がおの気になればこの話で戦場ヶ原さんと阿良々木さんが勉強を始めるシーンを最終章まで持ち越すことも可能なのです」

「怖いー！」

最終章に伏線全て持ち越しかよ！

一気に解決しなくちゃなのか!?

どんなハードな小説だよ。これはラノベだぞ。

「ああ、可能を不可能にする男、がキャッチフレーズの阿良々木さんにはちよつと酷でしたかねえ」

「どんな男だよー！」

「口癖は、『元氣百分の一倍！ 阿良々木暦』でしたっけ」

「元氣ねえー！」

そうじゃなくて。

もう別れるんだって。

なんか後ろの方でガハラさんやら羽川さんやら首を長くして待っているような気がするのだが……。

「じゃ、というわけで」

「はい、それでは」

背を向けて歩き出す八九寺。

これでこのまま逃がしてしまつていいのか……とか考えている自分がいたけど、話が振り出しに戻るの嫌だから、仕方なく諦める。

これでもう八九寺の出番は終わつてしまうのだろうか。

とか。

考えながら、僕は再びペダルを漕ぎ始めたのだった。

回想終わり。

いやはや、回想まで含め、連続三話出演する八九寺真宵は恐ろしい。

思い出したところで、再び戦場ヶ原の問題を考える。

嘆息。

「なあ、戦場ヶ原——」

「そういえば、阿良々木くん。この間見たひたぎクラブの感想、結局聞いてないんだけど」

話を遮る戦場ヶ原。

しかもまたブルーレイの話。

みんな好きだな。

あーもういいや。ばらしちゃえ。

実はこのあいだ、学校の視聴覚室にガハラさんに連れ込まれ、何かと思つたらDVD観賞だった。

期待した僕が馬鹿だったってのもあるけど。

それに視聴覚室って。

自分の家にテレビがないからって、それはないんじゃないの戦場ヶ原さん。

「あのあと、先生に見つかっちゃいそうになって、結局聞けずじまいだったのだけれど」  
「そうなのだ。」

あれは間一髪といった感じだった。見つかっていたら多分、メタなことをするなとか叱られてたと思う（というのは冗談）。

「いや、その……」

「何。はつきり言ったらどうなの」

「よかつたんじゃないか？ 絵も綺麗だったし」

「面白くも何ともない答えね」

「僕の感想に面白さを求めてたのか」

「まったく、阿良々木くんは本当に語彙がないのね——語彙が豊作な私としては、呆れるしかないわ」

「豊作って何だよ！」

「豊富だろ！」

「失礼。噛みました」

「違う。わざとだ……って八九寺語を引っ張り出すな」

「神は下」

「何様のつもりだよ！」



本当に流行るなあ、八九寺語。

「語彙が豊作な私の村は、語彙の貧しい阿良々木町に語彙を分け与えているのよ」  
「囁んだ言葉を何でまた使うかなあ！」

こいつもこいつで意地っ張りだな。

「こいつ呼ばわりは頂けないわ」

「何だ、またそれか……でも様付けは嫌だぞ」

「そう。なら、せんちゃんですら許してあげる。私のことはそう呼んで」

「何でそんな可愛らしいニックネームで呼ばれたいんだ！」

お前のニックネームはガハラさんだ！

ていうか。

せんちゃんって、昔の千石のニックネームだよな。

昔というか、僕が昔呼んでた。

「そういうえば、阿良々木くんにはニックネームが無いわよね」

「あー」

なんか前もそんな話したよなあ。

神原とか。

千石とか。

ああ、あと忍野ともしたっけ。

「どうかしら。いつそのこと、阿良々木くんにもつけてあげましょうか」

「まあ、」

ガハラさんって呼び始めたのは僕だし。

拒否するつもりはない。

「そう。なら、これからは阿良々木くんのこと、こよみんって呼んでもいいかしら」

「とんだ嫌がらせだな！」

最低だ！

らぎ子ちゃんよりも上があったんだ！

「こよみんってば、照れ屋さんなんだから」

「やめろ！　どうかやめてくれ！」

甘い口調で言われても。

僕としてはどうリアクションすればいいか分からない。

「失礼。噛みました」

「違う。わざとだ……ってまたそれかよ！」

照れ隠しのつもりなのだろうか。

「髪、明日」

「髪って——ん？」

髪？

明日？

何のことだ。

「おおっと」

口が滑った、という風な顔をする戦場ヶ原。

最近では表情も豊かになってきたよな。

羽川の矯正プログラムのお陰でもあるだろうが。

矯正というか、強制って感じだ。

「まあ、気にしないで頂戴。明日になれば、分かると思うわ」

「そうか」

「はじめを、つけるつもりだから」

戦場ヶ原ひたぎ。

蟹に行き遭った少女。

自称ツンデレ。

クラスメイトで、そして、恋人である。

最近では手料理も振る舞ってくれるようになったし、彼氏彼女っぽくなったかなあ、と

思っている。

まあ。

独特な味付けだけど。

けじめをつける。

彼女はそう言った。

きつと、この間の出来事が、戦場ヶ原を変えつつあるのだろう。

詐欺師、貝木泥舟との出会いをきっかけに。

でも、それは貝木のお陰などで決してない。

戦場ヶ原自身が決めたことだ。

「ねえ、ガハラさん。そろそろ聞いてもいいかな——」

「何。私のオープンニングの素晴らしさの話？」

「違えよ！」

「いいわよ。言わなくても。素晴らしいことくらい、自分で分かっているから」

いやでも。

あの巨大ひたぎさんはさすがに恐怖だったなあ。

「豆知識。あのオープンニング映像に出てくる建物は、実際に存在するのよ」

「ああ、実写だったな、確か……」

「ちなみにその中のひとつ、鉄塔の名前は柿ノ木鉄塔……って言うんだって。

柿ノ木Ⅱ猿蟹合戦。つまり私と神原ということね」

「へえ……」

またそんな豆知識を……。

でもそういうロケ地には行って見たいと思うな。

「お前は何でも知ってるな」

「何でもは知らないわよ。あなたより知ってるだけ」

「羽川の名言が台無しだ！」

「羽川さま……いえ、羽川さまの名言を、さすがにそのまま使うことは私にはできなくて」

「訂正し切れてない！」

お前本当に羽川にいじめられたりとかしてないよな！

心配になってくる。

「戦場ヶ原、僕が聞きたいのは、そんなことじゃなくて」

「そんなことって。羽川さんのことをそんなことって言うの、阿良々木くんは」

「いや……そんなつもりはないけど……っていうかそうやって話を逸らすな。何かあったのかって聞いてんだ」

「何も。別に何も」

即答の戦場ヶ原。

「ただ、」

「ただ？」

「夢を見たのよ」

夢？

それが、ため息の原因？

「私としたことが……魔されてよく眠れなかったのよ」

「ふうん……」

「それだけのこと」

ちなみに、どんな夢だったんだ、と訊くと。

彼女は、しばらく間を置いて、答えた。

「あの人の夢」

「あの人って」

「忍野さんよ」

苛々した口調。

自分でも言いたくないというのが伝わってくる。

「忍野さんが、私の夢に出てきたのよ……これは、どういふことなのかしらね。

……いえ、私の所為と言ってもいいのかしら」

それは。

どういふことなのだろう。

「まあでも、あの詐欺師の夢ではなかっただけ、よしとしましょう」

そう言った戦場ヶ原だったが、やはり勉強に戻ろうとはしなかった。

一体どんな夢を見たのだろう。

そしてそれは。

八九寺の話と、関係があるのだろうか……？

## 其の漆

007

結局、それから戦場ヶ原はすっかり勉強する気はなくなったらしく、僕に宿題を出して帰ってほしいと告げた。

結局、夢のことは詳しく聞けなかった。

大丈夫だろうか。

自転車に跨り、腕時計を見る。時刻は十二時半。

このまま帰ったら妹達に笑われる。

羽川にも怒られる。

ううん、勉強したいけどなあ。図書館で一人で勉強つてのも嫌だし。

でも仕方ない。一人で勉強だ。

そうしてペダルを漕いでいると。

「……あ。暦お兄ちゃん」

声がした。

見れば。



千石撫子が、僕の方へ駆け寄ってくるところだった。

ちよつと前までは、長い前髪を垂らしていたが、今の千石は前髪をカチューシャで掻き揚げていて、額が臆面も無くさらされている。

最近ではその姿で外を歩けるようになったらしい。

みんな変わったなあ。

「暦お兄ちゃん。待ってたよ」

待たれていた。

とうか待ってたのか。

こんな道中で。

そういえば千石の奴、暦お兄ちゃんと呼ぶのはやめるとか何とかという話をしておきながら、結局変わってない。

たまに、「あなた」を使う程度。

まあ僕としても嬉しいし。

指摘するほどのことでもない。

でも、あなたと呼ぶ度に顔を真っ赤にするのは、一体どういふことなんだろう……？

僕は自転車を降りる。

千石は少し息を切らしながら、僕を見上げてにつこりと笑った。

意外と表情豊かな奴だ。

千石は、お気に入りなのかポーチを身に付けていた。でも、今まで被っていた帽子は、今日は被っていない。これも変化だ。

そして気のせいかかなり露出の高い服装だ……僕は紳士だから、そんなことは気にしない。

夏だから薄着も仕方ない。

……でも、ブラつけてないんじゃないか？

千石もまだまだ子供だなあ。

でも指摘はしない。

「暦お兄ちゃん。今、時間ある？」

「え？ あ、まあ」

ないとは言えない。

ううん、図書館で勉強は延期。

あとで宿題もする。

「受験勉強で、大変じゃないかな、と思って」

ここらへん心配してくれる千石はとっても優しいと思う。

八九寺なんて気にせず一方的に話し続けるもんなあ。

「いや、さつき勉強したから大丈夫だよ」

「そうなんだ」

よかった、と呟く千石。何だ、用があるのか？ と訊くと、

「ううん、撫子は、ただ、あ、あなたに、会いたかっただけだから」

「ふうん……」

千石は顔を真つ赤ققかにして、僕を見上げる。

「勉強頑張ってるんだね。撫子、今日はゲームしかしてないや」

そういや、千石の奴結構マイナーなゲーム機持ってたよなあ。

古いのばっかだし。新しいの持ってるのかな。

新しいといえよ。

「なあ千石、DSでさ」

「？」

「いや、DSっていっぱいソフトあんじゃん。」

あの中に、受験勉強とかのソフトもあるんだよなあ。あれ、僕一度やってみたいと思  
うんだよ。ゲームしながら勉強できるんだぜ？」

「うん、一石二鳥だよな」

節目がちに言う千石。

何か迷っているようだ。

「あのね、曆お兄ちゃん」

「ん？」

「撫子、貸してもいいよ」

「貸す？」

うん、と彼女は頷いた。

「撫子、DS持つてる……」

「え？」

そうなのか？

こないだ遊びに行ったとき見せてもらったのが全部って言うてなかったか？

「明日、貸してあげる」

「そうか、そりゃ助かるよ」

千石はまた俯いてしまう。

気のせいかな、本当は持ってないんだけど……と思っっているような気がする。

曆お兄ちゃんがやってみたいって言うから……と思っっているような。

いや、千石に嘘はつけないだろう。

こないだ、千石の家に行った時全てのゲーム機を見せてもらったのだが。やっぱりそ

の中にDSは無かったよなあ。

忘れてたのだろうか。

「撫子、このあと用事があるから実はちよつと忙しいんだ」

え？

そうなのか？

じゃあ僕なんか待ってなくてもよかつたのに……。

でも、さつきまでそんな忙しそうじゃなかつたよな。

なんだか、買い物に行きたがっているような、そんな気がする。

「用事というよりは、撫子仕事があるの」

「仕事？」

「うん、副音声の収録に行くんだ。なでこスネイクの」

「副音声!？」

またその話かよ！

繰り返しギャグは三度までつて知らないのか！

……ああ、相手は千石だった。繰り返しギャグも知らないんだから、そこらへんは

突っ込まないでおくべきだろうか。

「あれ、暦お兄ちゃん、撫子の話、見てないの……？」

悲しそうな顔をする。

みんなして何でかな。

ごめん千石。

オンエアも時間が分からなくて、見てないんだ。

なんて、口が裂けても言えない。

「何なら、今見る？」

そうして取り出したのは i p h o n e 。

最新バージョン持ってんのか。

「いや、千石。お前忙しいんだろ？」

収録があるなら早く行ったほうがいいんじゃないのか？」

というか収録って。

ここら辺にスタジオなんてないよなあ？

電車とかに乗って行くのだろうか。

「ううん、撫子は大丈夫だよ。

いつでも好きなきときに行っていいいことになってるし、スタッフの皆さんもとても優し

いんだよ」

「お前、副音声未経験者だよな！」

なんでそんなプロ級の扱いを受けてんだ！

「オープニング映像だけでもいいから」

「……………」

どうしてみんなそれにこだわるんだろう。

自分の歌って、そんなに嬉しいのかな。

僕はオフアアが来なかったから、分からないや。

千石があまりにも勧めるので。

観賞。

で。

「ど、どう？ 曆お兄ちゃん……………」

おどおどと聞いてくる千石。

僕は彼女をじつと見つめる。

「千石、お前……………」

びし、と指差して。

「お前、ラッパだったのか!？」

「え、……………え？」

しどろもどろの千石。

あれ、滑ったかな。

だってラップ上手かったし。

可愛かったし。

よし！

今日からお前のニックネーム、DJ・NADEKOな！

「え、えっと」

ちよつと困り気味の千石。

「暦お兄ちゃんが、そう呼びたいのなら、撫子は別に、構わないよ」

あれあれ。

なんかまた滑つちやつた感じがするな。

なんか微妙な空気。

何か話を振らないと……！ 千石はこういう時黙りっぱなしになってしまうのだから。

「なあ、千——」

「そ、そういえば、暦お兄ちゃん。最近テレビ見た？」

相手から振ってきた。

「ここは正直に、見てないと答える。」



妹達のチャネル争いなら見てた。

「ららちやん達、元気だね」

「元気すぎんだよ。千石みたいにもっと大人しかつたら、まだ可愛げがあるのにな」  
で。何でテレビの話？

「うん、こないだのドラえもん面白かったから」

「たとえテレビを見てたとしても、そいつは見ないな！」

よりによつてドラえもんって。

ちよつとしょんぼりする千石。

しまった、言い過ぎたかな。

って、いちいちこうして心配してる僕の方が、臆病っぽくて小動物っぽくない？

「撫子、まだ子供だから……」

「いやいや、そういう意味で言ったんじゃないよ」

「いやいやいや？　そういう意味で言ったんじゃないよ？」

「いやいや、そういう意味で言ったんじゃないよ！」

どんな聞き間違いだ！

「いやいやいやしたいっていうのなら、その、撫子でよかつたら……」

「違う違う違う！」

子供だからって言っという何だ、それは。

「そうじゃなくて。僕も中学生の頃は、四次元ポケットとかタイムマシンとか、そういうのがあつたらいいな、って思ってたよ。だから別に恥ずかしがることじゃないよ」

そう言いたかつたんだ。

それだけの為に何行費やしたよ。

「うん、撫子も憧れる……」

それからしばらく僕たちはドラえもんの話で（なんと）盛り上がってしまった。

童心に帰るといふか。

そういや、タイムマシンで思い出したけど。

千石の押入れ……クローゼット、あれは結局分らずじまいだった。

別に知りたいわけじゃないんだけど、あの中身はファンタジー言うとかタイムマシンと  
いうよりパンドラの箱っぽかった。伝説の魔物が封印されているような。そんな空気を  
感じた——考え過ぎか。たかがクローゼットだ。壮大な伏線になんて、なるわけがな  
いのだ。

で、結局。

千石との会話は、しずかちゃんの話で途切れてしまった。

いや、原作ではしずちゃんと呼ばれているよな、的な会話までは良かったのだが、千

石が、「暦お兄ちゃんはずかちゃんの入浴シーンについてどう思う？」と振ってきたためどう答えればよいか迷ってしまったのだった。

うーん。

正直に答えればよかったかなあ。

「僕はもう大人だから、いやらしい気持ちにはなったりしないのさ」

なんて、言うんじゃないかなあ。

気取っていったのがまた恥ずかしい。まだ「あれは規制があるよな」とかの方がよかったかも。

「のう、お前様よ」

急に足元で声があった。

驚いて声を上げそうになったが我慢する。

千石にはこいつの声が聞こえないのだ。

声は僕の陰からする。

声の主は忍野忍。元吸血鬼、今は人間もどき、吸血鬼の絞りかす。

僕を吸血鬼にした張本人。

まあ、人じゃないんだけど。

「入浴と聞くと、僕との入浴シーンを嫌でも思い出すの？」

こいつ……!」

僕の考えていることが分かるからってそれを言うことはないだろう。

ていうか夜型のお前が何で真昼間に起きてるんだよ。

突っ込みを声に出すと千石がびっくりするだろうから、ここは我慢。

言わなくても、相手には通じるらしい。忍は答えた。

「お前様が腹が減っているのが伝わってくるのでな。」

言ったと思うが、僕の腹が減ってなくとも、お前様が空腹を感じれば僕も感じるのじゃよ。気分が悪い。早く何か食せる物を」

そう。

僕は珍しく空腹を感じていた。

というのも、今朝起きて適当に食べてきただけだし、というかあれは食べてないも当然だ。羽川さんがいらつしやると思うと落ち着けなかった。

食べ物といつてもなあ。

千石は観賞用だし（いや、これは失言）。

「さ、暦お兄ちゃん?」

長い間下を向いて黙っていたからだだろう。千石が心配そうにこちらを見ていた。

僕は顔を上げて笑う。

「いや、ごめん千石。」

僕、まだ昼食べてないんだよ。だから何ていうかな、もうそろそろ——」  
「そうなの？」

だったら暦お兄ちゃん、うちで食べる？ 撫子もご飯、まだだったし」

あれ？

そうなのか？

いや、仕事が忙しいとか何とか言っても、まだ昼食べてなかったんだ。

そして僕を家に誘う時間もあるんだ……。

でもまあここはお言葉に甘えるべきだろう。

忍は満足したのか、もう何も言っただけだった。

「でも千石、収録はいいのか？」

一応訊いておいた。

「いいよ。時間はたっぷりあるし……」

「そういや、お前一人で行けるのか？ 何なら僕が付き合ってもいいんだぜ？」

「つ、付き合うって、は、あわわ、撫子と、お、おお付き、合いをっ、？」

あれ？

何でそんなに動揺するんだろう。

僕の考えはついでに収録現場にまで行こうってやつだったんだが……。

「ううん、だ、大丈夫だよ」

真っ赤な千石。

「そ、それに、副音声は一人でするんじゃないの。もう一人、強力な助っ人さんがいるんだよ」

「へえ。そりゃ誰だ？」

「忍野さん」

忍野。

忍野！

いやその前にあいつそんな副音声とかに出るキャラじゃねえだろ……。

「忍野、か……」

「？」

首を傾げる千石。

僕は慌てて言う。

「いや、何でもない。じゃあ、行こうか、DJ撫子」

茶化しておいてなんだけど。

やっぱり、忍野のことが頭から離れない。

昼ご飯を食べたらやはり行かなくては。  
僕はそう決意したのだった。

## 其の捌

008

「神原駿河だ」

千石との昼食を終え（とても美味しかった。千石の手作りだそうだが、あまりにも上手なので母親が作ったものなのではないかと疑ったくらいだ）、別れてから（千石からうちに泊まっていくかと誘いを受けた。親が今日は帰ってこないそうで、兄的ポジションの僕としてはちよつと心配だったが断っておいた）、携帯電話を取り出した。

最終確認だ。

これだけ情報があるから、そのまま塾に向かってもいいのだが、念の為。

そして、できれば人手がほしい。

そうして電話に出たのは、あの神原駿河。

いつも通り、フルネームで名乗ってきた。

「神原駿河。職業は阿良々木先輩の××だ」

「おいしいiiiiiiii!!」

今凄いこと言ったよね!?



もうやばいこと言ったよね!?

「ん。その声と突っ込みは阿良々木先輩だな」

「いや、まだ突っ込んでないし!」

突っ込ませて!

声を出して突っ込ませて!

「ていうかお前、自主規制したんじゃないのかよ……」

あーあ。

言っちゃったよ。

いやでも放送禁止用語レベルだったから、きっと皆さんには分からないだろう。

ご想像にお任せ。

いや、想像しないで……。

「今の電話僕じゃなかったら、大変なことになってたぞ」

「ん? ああ、そうだろうな」

神原駿河。

同じ高校、直江津高校の二年生。

バスケットボール部のエースだった。

もう引退してしまっただが、未だファンの熱気は冷めない。

「きつと豚箱行きだろうな」

「古い！」

表現が古いよ。

本当に豚箱行きな発言だったかはさておき。

「だから阿良々木先輩、どうか私のことを『この卑しいメス豚が！』とは言ってくれないだろうか」

「言わねえよ！」

神原駿河。

とんでもないマゾ野郎なのである。

とてつもなくエロい。

そして百合。

どんな後輩だよ。

もうこんな短い文では説明しきれない。

「戦場ヶ原先輩も頑なに拒否するし……どうして誰も理解してくれないのだ。豚の耳に念仏とはこのことだなあ」

「馬の耳だろ！」

まあ、誰も理解してくれないと思うよ。

あの戦場ヶ原が拒否るんだから。

「王様のみが、馬の耳」

「色々間違ってる！」

確かに王様オンリーだけど、それは驢馬の耳だ。

王様の耳は、驢馬の耳。

「まあ、王様の話かつ童話シリーズでいくと裸の王様が好きなのだがな」

「やっぱそうきたか……」

「何はともあれ阿良々木先輩。私のことを、この卑しい——」

「言わねえからな！」

前は『卑しいペットが！』と言ってくれと要求するわ…本当、妹よりMな奴がいるなんて思いもしなかった。

ああでも戦場ヶ原、こないだ神原のことを「神原猿河」って噛んでたな……。

これを言うと神原の奴喜ぶかもだから、黙っておく。

「卑しいといえば、阿良々木先輩」

「そこから話を展開させるな」

「いや、最近また勘違いをしてしまったのだが」

「あ？」

「こないだ友達が、『あの子本当に彼と付き合おうの嫌らしいよ』と言ってきてな、『いやらしい』と勘違いして一人で興奮してしまったのだ」

「知るかよ!」

「ああ、思い出したぞ。あと昔こんなこともあったな。友達が『痴漢だ!』と叫んだとき、『股間だ!』と——」

「もういい分かったやめろ!」

ロクな結果に終わらなかつた!

いきなり飛ばしすぎだぞ神原後輩!

「……で。神原。今暇か? 何してた」

「ああ、今日は珍しく、忙しくてな。いや何、阿良々木先輩の為ならばどんなに忙しくてもいやらしくても駆けつけよう」

付け加える必要性は皆無だったよな……。

「それで、私が何をしていたかというのだな……」

「いや神原いいよ。これ以上お前の評判が下がったら困るから言わなくていい」

「なんと。阿良々木先輩には私なぞの言う事は安易に予想できるということなのだな」

感嘆する神原。

いや安易というか。

たいていエロいことしか考えてないだろ。

「しかし阿良々木先輩。私が何をしていたか言わせてもらえないと、話が進まない」  
「そうなの!？」

「うむ。聞かないのならば、私はいつものように阿良々木先輩とエロい話をしよう、最終章まで」

「いつものようにって言うてるけど、いつものことじゃないし、別に僕は好きでお前のエロい話に付き合ってるんじゃない」

「これはまたご冗談を。いつもいつも事の発端は阿良々木先輩ではないか。阿良々木先輩が話し掛けてこなければ、私は貝のように口をつぐみ、本性を隠し、ただのスポーツ少女でいられるのに」

「僕が悪いみたいに言うんじゃないぞ」

それにその台詞を聞いてると、お前は本性を隠しているスポーツ少女みたいに聞こえるぞ。

初期はそうだったっけ。

「じゃあ、聞いてやるよ。何してたんだ」

「うむ。阿良々木先輩と忍野さんとの絡み——」

「あーそういえば神原——」

大声を上げて阻止。

今のは辛味の話だな。

ごめん、僕辛党じゃないんだ。

「その忍野の話なんだけど。あのさ、」

「おお、阿良々木先輩も話に乗ってくれるのか。

実は電話の直前、私はもちろん妄想をしていたのだが——」

「妄想の話じゃねえぞ！」

「——卵を突っ込むところで、ちょうど電話が鳴ったのだ」

卵？

突っ込むって、口だよな。

「何を仰るか。卵は口に突っ込むのではなく、もう一つの——」

「ごめん神原そこまで付き合うつもりはない！」

もう終わろうか！

十分楽しんだろ！

なあ。

神原支持率ってどうなってるの？

僕の方が彼女より低いつていうなら抗議する。

いや実際そうなんだけど。

……何で？

「私のことを本当はエロくないのではないかという輩が後を絶たんと言っただろう？」

だから、私の出番がある時はなるたけこういう類の話をしようと思ってるな」

「まだそれ気にしてたのか！」

気にすんなよ！

お前が気にするところは別にあるだろうよ！

「しかし阿良々木先輩、今日は清々しい日ではないか？」

「ん？」

急に何だ。

「社会の窓を開けて、外を見てみよう。ほら、素晴らしい景色が広がっているだろう？」

「だから無理にエロキャラぶらなくていいんだよ！」

なんか無理に言ってるようにしか聞こえない！ ていうか下ネタすぎる。

「で。忍野の話だけど。最近、忍野を見かけなかったか？」

「忍野、さん？」

ぼかんとしているようだ。

「いや。忍野さんも、忍ちゃんも、私は見ていない」

「あ、そうなんだ」

忍は意図して会わせないようにしてるんだけど。

そうか。

見てないんだ。

でも忍野との絡み……いや、辛味は妄想してたんだな。

時計を見る。

夕方までまだ時間がある。

「なあ神原。ちよつと、頼みがあるんだけど、いいか」

「なんと。阿良々木先輩が私に頼み事だど。それはもう一石を争う事態に違いない」

「なんか戦国時代みたいな展開に聞こえるぞ！」

一刻だろ。

器用なミスだな。

「阿良々木先輩が緊急事態とあらば、私は本編も伏線も放棄して、すぐさま阿良々木先輩の下に駆けつけよう」

「いや、本編も伏線も無視しないで……」

僕の為に放棄っていつても、物語事態放棄されちゃ僕も放棄されるようなもんじゃないか。



「阿良々木先輩が私を必要としている……全力で走らせてもらう」

「ああ……助かるな」

急いで来てほしい時には本当に助かるけど。

あいつが本気で走ったらコンクリートの道路も割れるんじゃないの？

「私は阿良々木先輩の為に走るだけだ。信号以外誰も私を止められないだろう」  
うん。

交通安全第一な感じで、いいよ。

でもカッコいい台詞がちよつと残念な結果に終わってしまった感が否めない。

「では、失礼する」

という言葉最後に、神原は電話を切った。

神原の奴、僕が何を頼みたいかとか、その前にどこにいるかも聞かずに切っちゃった

よ……。格好いいけど、大丈夫なのか。

忠誠心ありまくりだろ。

でも、本当に助かる。

人は多いほうがいい。

もし僕一人で忍野に会ったとしても、僕はきつと自分の目を疑うだろうから。

そうして僕は、忍野メメが住んでいた廃墟目指して自転車を走らせた。

## 其の玖

009

「待ちくたびれたよ阿良々木くん。久しぶりだね、元気してた？」

忍野メメ。

ある人は尊敬し。

ある人は見透かしたようなその性格を嫌い。

ある人は関わりづらく苦手とし。

ある人は感謝し。

ある人は話したことすらない。

僕だって、春休みの出来事が無ければ彼のような人とは関わろうとしなかつただろう。

関わりたくも無い。

春休み。

僕は吸血鬼に襲われた。

血を絞りつくされ、僕は吸血鬼になった。

地獄のような出来事だった。何回死んだか分からない。

そんな僕を地獄の淵から引つ張りあげてくれたのが、忍野メメだった。

普通、ヴァンパイアハンターとか、とある宗教の特務部隊とか、あるいは吸血鬼でありながら同属を狩る吸血鬼殺しの吸血鬼だったり、助けてくれるのがつき物なのだが、僕は、小汚い、趣味の悪いアロハ服のチャライおっさんに助けられた。

でも、彼のお陰で、今の僕がある。

今の忍がある。

今僕は、もう吸血鬼ではないけれど、吸血鬼もどきつて感じた。

今忍は、もう吸血鬼ではないけれど、人間もどきつて感じた。

吸血鬼もどきの人間と。

人間もどきの吸血鬼。

僕たちをそのような存在にしたのが、彼。

きつと借りをつくるのが嫌いなのだろう。

僕の問題を解決するのに五百万払えと言っていたくせに、チャラにしてくれた。

そして何も言わず、何も残さずこの町を後にした。

それなのに。

どうしてまた、戻ってきた——！

廃ビルに着くか着かないかのところで、僕は神原と合流した。

たつ、たつ、たつ、たつ、と規則的な足音が聞こえてきたから振り向けば、僕のすぐ後ろを、神原が走っていた。

「すまない阿良々木先輩、遅くなっちゃった」

あれえ!?

いや、ちよつと待て、神原と電話してたのは三十分前だぞ!?

確か、神原の家から塾までは一時間かかる距離じゃなかったっけ!?

電話を切つて、それでここまで走ってきたのか……。

「いや、少し着替えに時間がかかってしまつてな」

走りながら神原は喋る。

息を切らさず普通に話すのはどういふことだ?

「今日は走りやすさを重視してみたのだ」

なるほど。

確かに短パンだしな。

動きやすさは大事だろう。

ということとは着替えの時間も含めると、神原は家を飛び出してすぐに僕に追いついた  
ということになるのだが……。

それも僕のいるところに真つ直ぐ来れたということになるのだが……。

「それで、私は脱げばいいのだろうか？」

「せつかく着替えてきたのになんでまた脱がせるんだよ！」

脱ぎたい理由も分からなくもないけどさあ。

あ、これは暑さとは無関係。

僕はペダルに力を込め、スピードを上げた。しかし神原はそれについて来る。

これで僕がメガホンを持っていたら、なんだか昔の鬼コーチみた

いだなあ。

しかし神原は本当に足が速いな……。

原付くらいだったら余裕で追い越せそう。

「……あの塾に行こうと思ってるさ」

「なるほど。思い出の場所だな」

「まあな」

「そこで私と行為を——」

「及ばねえぞ！」

びつくりだよ。

どうしてそつちに行くかな。

「いやしかし阿良々木先輩。私はこの身をもって阿良々木先輩に謝罪がしたくて——」  
「お前の思いつく謝罪は全部犯罪じみてるんだよ！」

謝ろうとして逆に怒らせちゃう感じ。

というか、謝罪って何の？

「いや、何かと問われれば、阿良々木先輩、まさか覚えていないのだろうか」

「何を」

「こないだ私と戦場ヶ原先輩で謝罪しただろう。私は裸で土下座をしたはずだ」

「してねえ！」

勝手に捏造すんなや！

「いやだから、何に對して謝りたかったんだよ」

全てに對して謝って欲しいんだけど。

「まあ、それは『化物語　するがモンキー　ブルーレイ』を見てくれれば分かるだろう。

私と阿良々木先輩とのバトルが、戦場ヶ原先輩にバレてしまったのだ。それも細部に至るまで」

「ああっ!?!」

バレちゃったの？

あー、あれをもう一度見る気にはなれないけどなあ……。

でも彼女、見ちゃったんだ……。

ガハラさん、シヨックだったろうな。

ていうかよく映像化したよな、あれ……。

「では阿良々木先輩。あの塾で私と何もしないというのならば、一体私をそこに連れ込むのはどういうわけだ？」

「連れ込むこと前提なんだな」

「当たり前だ、いや、そういえば忍野さん……とか言っていたな」

「やつと気付いたか」

「うむ。忍野さんと及ぶつもりらしいな」

「まとも空振り！」

ちやんと球見ろ球！

「いやあ、阿良々木先輩と忍野さんとのそれを、見物させて頂けるなんて光栄だなあ」

「違うから！」

「ああ、これまたブルーレイの話なのだが。阿良々木先輩、ブルーレイとは何の略か知っているか？」

「はあ？」

ブルーレイって略語なんだ？

あー、でもそれっぽいよな。

「いや、知らない」

「綴りを思い浮かべて欲しい。B、L……u——」

「いや、知らない！」

もう元気澆刺じゃなくて元気爆発だよ神原さん！

「忍野が、またこの町に来てるって噂なんだよ」

「ほう」

「違う………ってことはないと思う。でも、一緒に行って、確かめてほしいんだよ。『本物』かどうか」

「まあ……偽者と及ぶわけにはいかんからな」

「だから違う！」

そっち絡みの話をするな！

「まあ……アロハ服を着ていればもうほとんどの確率で忍野さんと言っても過言ではないのではないか？」

「そうだよなあ……」

だから、八九寺の話だけでももう十分可能性大なのだ。

でも、だからこそ、僕は怖い。



本当の本当に、彼が帰ってきているということに。

塾は相変わらずだった。

私有地、立ち入り禁止。

そんな看板を無視して入って行く。

こないだ戦場ヶ原に監禁された時と、何も変わっていない。

真つ暗な中、僕たちは歩く。

いつぞやと違って、あるいは、いつぞやのように神原は僕と手を繋ぎ、僕の腕にしがみ付いていた。

密着、の方が正しいかも。

「こうして阿良々木先輩と歩くのは何年ぶりだろう」

「いや、そんなに経ってない」

「そうして私達は二人きりの人生を歩み始めたのであった」

「何故お前がモノローグを語る!?!」

「ん? 今まで私が司会進行だったではないか」

「仕事を奪うな!」

僕は突っ込み担当だけじゃないんだから!

それにお前と二人きりの人生は歩まない!

歩んだら色々危ない。

「そういや、お前は何も言わないんだな」

「何のことだ？」

「いや、お前だけはオープニングの話しないんだなあ、と思って」  
前まで頑なに拒否してたけど、自分から振っちゃった。

ああ……、と頷く神原。

そして腕に力を入れて来た。

「まあ、私の歌などどうでもよいのだ」

そうか……神原は妙に自分に厳しいところがあるからな。

自分に自信が無い、とまでは言わないが。

自分の大きさを理解してない、とでも言おうか。

「しかし阿良々木先輩はご存知か」

「何が？」

「私の歌は、他の四人の歌と違って、一番と二番のサビは歌詞が違うのだ」

「そうなんだ……」

どう反応すればいいんだよ。

「いやでもまあ、上手だったと思うよ、歌」

ううん。

ひたぎクラブしか見てないとは言ったけど。

実はこないだ神原の部屋の片付けを終えてから、オープニングまでは見たんです。

「おお、阿良々木先輩からお褒めの言葉を……光栄の至りだ」

「いやいや、そこまで言うことはないだろう」

「いやいやいや、そこまで言うことはないだろう？」

「違えよ！」

犯人はお前か！

千石に何てことを教えてるんだ！

「私達を自然災害に例えて阿良々木町を襲う、的な会話を戦場ヶ原先輩としたのだがな、」

「何だその意味不明な会話は！」

「戦場ヶ原先輩は地震なのだ」

「阿良々木町は即崩壊だな！」

「いやいや、私や羽川先輩、それに忍野さんもいるのだからその程度で崩壊されては困るな」

「何だそのバイオハザードの嵐は?!」

「私が言いたかったのは、阿良々木先輩を自然に例えるならもうこれは太陽のようなお方だなあと、そういうことを言いたかったのだ」

「……そうか」

眩しすぎんだろ。

「それで忍ちゃんは何月」

「なるほど」

聞いてたら喜ぶかもな。

僕が太陽でなくても、彼女は例えるなら絶対月だろう。

「私も自然に例えるとするなら地球を襲う流れ星がいいな」

「危険な隕石が接近してきた！」

「あるいは流れ星となった地球だ」

「スケールでけえ！」

「そうなるって戦場ヶ原先輩はなんだろう、天の川とか」

「ああ……」

そうなるって羽川はもう宇宙だな。

全ての母だ。

「天の川は別名ミルクィウェイ、つまりは乳の環……」

「変なことを考えんなよ」

「その川の流れに身を委ねたい、とだけ言わせてもらおう」

流れが速そうだなあ。その川。

戦場ヶ原といえば。

オープニングにおいて最後ガハラさんが神原をばつさり切っちゃうのはどうかと思っただ。

神原的には嬉しいんだろうな。

背景百合だったし。

「そういうアブノーマルさが私らしいといえ、私らしいな」

「……良かったな」

「これで私も箱庭学園で十三組に入れるというものだ」

「やっぱりその話か！」

アブノーマルって単語が出た時点で怪しいと思ってたよ！

めだかボックス。

原作者一緒だからってき……。

「主人公の黒神めだかは好みなのだ」

「あつそ……」

「あのルックスも、古風な喋り方も、ツンデレ具合も、全てにおいて好きだな」  
あの制服は犯罪だと思っけどなあ。

それに、古風な喋り方が好きなのか。

忍とは関わらせないという思いが強くなった。

「私はポジシヨン的には黒神真黒がいいと思う」

「あー」

なるほどね。

エロいし。

というか変態だし。

「めだかちゃんを愛せるからな」

「言うと思った!」

スポーツ系の登場人物はいっぱいいるのに、なんで真黒かと思えば…。

シスコンだからか。

「これで阿良々木先輩とお揃いだな」

「……誰から聞いたか知らないけど、僕はシスコンじゃないからな!」

母の日に恥ずかしい告白をさせられた。

ただそれだけだ。

事実とは限らない。

「黒神真黒は私の後輩という話は置いといて、」

「後輩なのか!？」

真黒は十八歳じゃないの!？」

「なんだ、阿良々木先輩。随分と驚くではないか。

マリー・アントワネットが戦場ヶ原先輩の弟子であるように、黒神真黒は私の後輩なのだ」

「時系列!」

いやでも、めだかボックスは化物語より後か。

「ああ、副音声の収録は楽しかったなあ」

「そこでなぜ副音声の話にな戻る」

「いや、自然災害シリーズは副音声で話した事なのだ」

「何!？」

「他の人がどんな災害になったかは、副音声を聞いて頂ければ分かるだろう」

思い出しているのだろうか、笑顔の神原。

いいなあ。

僕はオファーが来なかったから、羨ましいや。

「ん、阿良々木先輩、まさか知らないのか？」

「え？」

何を？

副音声の話？

「いや……やっぱり言わない方がいいだろうな。そういうのは直接聞いてこそ嬉しいの  
だろうし」

何の話だろう。

ちよつとドキドキする。

「まあ、第三巻は戦場ヶ原先輩と、つまりヴァルハラコンビ再結成でお送りしたから、是非聞いていただきたい」

「そうなのか……」

やっぱり、全巻見なきゃなのかなあ。

僕、遅れすぎかも。

「じゃあ、戦場ヶ原がいたなら、ちゃんとした副音声ができてるだろうな」

「ん、ん……」

意味ありげな顔をする。

あれ？



できてないの?」

「いや、戦場ヶ原先輩がスタジオの機材を壊すのではないかと思った……あれがバレてしまったから」

「あれ?」

「いや、何でもない」

何かまずいことあったつけ。

あのバトル以外に。

閑話休題。

「ん? 何? もんぜつびやくじ 悶絶躰地?」

「何だその聞き慣れない四字熟語は!」

「ああ、何だ。閑話休題か。びっくりした」

「こつちがびっくりだわ!」

「いやいや、閑が悶に見えたものでな」

「そんな目を持つてるのはお前だけだ!」

神原先生の仰ることは。

悶絶躰地。苦しみ悶え転げ回ること。

だそうだ。

閑話休題つつつたのにまた雑談かよ。

「……うん、このくらい、かな」

「は？」

「いや、本編で一番登場シーンが長くなるように会話をしていたのだ」

「ああっ!？」

お前もか！

いや確かにこの章長いと思ったよ！

もしかしたら八九寺を超えたかもな！

今度こそ。

閑話休題。

階段を上り、四階に辿り着く。

三つ教室があるのだが、そのうちの一つのドアに手をつけた。

一番右の教室。

そしてドアが開くのと同時。

僕は、声を聞いた。

「お……忍野」

そこに、忍野の姿があったのだ。

積み上げられた机の上で。

胡坐をかいた一人の男が、こちらを見下ろしていた。  
にやつきながら。

「なんだい、随分と驚いているようじゃないか。僕がここにいるのがそんなに珍しいのかい？」

「……………」

言葉が出なかった。

言いたいことは色々ある。

文句がたくさん……それに、感謝の言葉だつて。

しかし、言葉は出なかった。

「ああ、それに百合っ子ちゃんも久しぶり。元気してた？」

暢気なもんだ。

神原もまた、声が出ないらしい。

何も、言わなかった。

「ここに來たつてことは、何か用があるつてことじゃないの？」

それとも、何も用はなかったのかな」

用は、無い。

怪異に関する問題は何も無い。

問題は、忍野のことだ。

どうして。

どうして戻ってきた……！

「どうしてかって？」

鼻先で笑う忍野。

「相変わらず元氣いいなあ、阿良々木くんは。何かいいことでもあったのかい？」

忍野に再会したことは、とてもいいこととは言えないだろうが。

驚きの方が大きい。

僕も、たまには考えることがあった。忍野が戻ってくることを。火憐が蜂にやられた

ときもそうだった。

忍野だったら、忍野がいたら——

でもまさか、本当に彼がいるなんて。

忍野は「よつと」と机の山から飛び降りた。バランスを崩さず、膝を曲げず、軽やかに下りる。

その時、僕は異変に気付いた。

忍野の影。

何かが、違った。

「僕はここでやり残した事があってね——」

やり残した事？

怪異譚の蒐集？

怪異の調査？

どれも当てはまらない気がした。

「それで、阿良々木くんには何も問題はないってことだね。忍ちゃんも元気そうだし」

こちらを見、そして僕の影を見ている忍野の目つきは性悪のものだが、それでもやはり何かが違った。

何かが、いる。

少なくとも、僕はそう思った。

「百合っ子ちゃんもそうだ。左手は相変わらずみただけど何も問題はなさそうだね」

続いて神原を見る。

神原はもう僕から離れていた。

忍野は神原の左腕を見る。

包帯でぐるぐるに巻かれている腕を。

同じ箇所にも重にも巻いていて、不自然だと感じなくも無い。その中身、生きた怪異を見透かすように、忍野はじつと見て。そして僕は彼を見ていた。

僕は、気付いてしまった。

忍野メメ自身に、問題があるということに。

## 其の拾

010

「夢喰い馬」

忍は言った。

忍野と話をして（たいした話はしていない。怪異の話は、それから全くしなかった。もちろん火憐のことも話してない）、塾を後にして神原の意見を訊いた。

「忍野さんには何かあると思う」

彼女は答えた。

やはり、怪異を身に宿しているだけのことはある。彼女も何かを感じ取ったのだろう。

人ならざるものの存在。

小さな、異変。

「だいたい、何故ここに戻ってきたのか、結局ぼかして何も言わなかったではないか」  
結局何故帰ってきたのか、分からずじまいだった。

忍野が帰ってきていたということが分かったただけだ。

「しかし驚きだったな」

「ああ、まさか忍野が本当にいたとはな……」

「いや、私の妄想が実現したことだ、阿良々木先輩」

「僕はお前の思考回路に驚くよ!」

とまあ、雑談を交えた後。

僕は神原と別れてから、人気のない公園を見つけ、そこで忍を呼んだ。

別に神原も一緒でよかつたんだけど、彼女には礼を言つて帰つてもらつた。

めだかの話を聞いてしまった僕には、神原に忍の紹介はできなかつた。

ロリの上に古風な口調。

絶対神原の好みだろ。

忍はまだおねむのようで、目を擦りながらの登場だった。

「なんじゃ。儂の眠りを妨げるのはどこのどいつじゃ」

「どつかの魔人みたいな台詞だな……」

「ああ、お前様か」

忍の為に、日陰のベンチを選んでいたので、太陽の心配はない。

もう彼女は吸血鬼ではないにせよ、やはり怖いのだ。

忍野に会っている間、忍も影にいたものの起きていたらしい。



何故なら。

彼女もまた、忍野の異変に気付いたからだ。

そして、その忍野のように。

彼女は怪異の名前を言ったのだった。

『ゆめくいうま』、『ゆめくいま』とも言うから、夢喰い魔と書く事もあるの。あるいは、夢喰いを『むくい』と読み、報いと取ることもしばしば。まあ、名前の通りの怪異じゃよ。そして決して強い怪異ではない」

「それで、それは」

忍野に憑いているのか？

「憑いているというか、あの軽薄な小僧に捉われていると言うか、の」  
「捉われて」

そうじゃ、と忍は頷く。

「夢喰い馬は説明するまでも無いじゃろうが、夢をとつて喰う怪異じゃ。儂がたやすくエナジードレインできるように、そやつも夢を喰うことは簡単な事なのじゃ。食事と言う所かの」

そして彼女は訊いてきた。

「お前様も、夢喰い馬くらいは知っておろう？ 吸血鬼ほどではないが、有名な怪異じゃ

ぞ」

「有名って……」

そんな名前、訊いたことも無い。

いや。

名前は無くても、そんな怪異は知っている。

獺だ。

バク。

ウマ目バク科に属する哺乳類。

あるいは、夢を取って喰らう怪異。

「そう。夢喰い馬はそう呼ばれてもおるそうじゃ。体は熊、鼻は象、目は犀、尾は牛、脚は虎：しかしまあ、この場合は姿は関係ないかの」

忍野も昔そんなことを言っていた。

名前は姿でなく本質を表す。

名前と姿が異なっているのは、名前を考えた人と姿を考えた人が別の場合がほとんどだから。

そして夢喰い馬は、その名が本質を表している。

本質は、夢を喰うということ。

「害は及ぼさない怪異じゃと訊いていた気がするが……お前様も知っておろう。疾病や悪気を避けるといわれ……日本では悪夢を食べるともいわれたそうじゃの。非常に縁起が良い怪異」

でも、それなら。

なぜそれは忍野に。

「夢喰いは『むくい』とも取れる……じゃろ?」

報い。

報いには幾つかの意味がある。

よく使うのは、果報。あることをした結果、身に受けるもの。

他にも報酬という意味や、報復……仕返しという意味もある。

つまりは、捉われた人間の行動によって、その結果対象者は報いを受ける。

つまりは、怪異から報酬を得る。

つまりは、仕返しをされる。

この三つの全てが、今回忍野には満たされている。

怪異のオーソリティ。人にアドバイスをし、報酬を得ている。

そして報いを受け、怪異から仕返しを受けているのだ……。

夢を喰って。

むさぼり喰って、夢喰い馬は大きくなる、そうだ。つまり、力を増すのだ。

「その馬が強くなったら、どうなるんだ？」

「対象者はひとたまりもないじやろうな」

忍は肩をすくめた。

「決して強い怪異ではないとは言ったが、決して強くなれない怪異とは言っておらん。したがって、夢喰い馬は強く、強大な力を持つこともできるのじやよ」

「だったら……」

忍野だって、ひとたまりもないだろう。

今まで散々怪異に関わってきた男だ。

そして儲けてきた男だ。

仕返しされて、当たり前……なのかもしれない。

「絵馬」

と。

忍は言った。

「馬は神の乗り物といわれ、神社や寺院では神馬しんめが奉納されておった。それがいつしか土や木でつくった馬を奉納するようになり、やがて木板に書くような現在に至ったのじや」

「へえ……」

「夢喰い馬は神馬から派生したもののじゃ。願いを叶える怪異ともされる。が、悪い方へ派生した結果じゃの……」

「どういう意味だ？」

「絵馬は願いを書くだけでなく、願いが叶った時にも書くものなのじゃ。だがいつしか人間は願いを一方的に書くだけで、お礼の言葉も何も言わず、何も奉納しなくなった。夢喰い馬は神から外された神なのじゃよ」

お前様よ、と忍は続ける。

「お前様よ、絵馬の数え方は知っているかの」

「絵馬は……」

一枚、二枚……じゃないのか？

忍はどつちつかず、といった顔をした。

「一体、二体……とも数える。神仏を数える『体』を用いるのじゃ。何故分かるか？」

「絵馬は……夢喰い馬は、神だったから」

そうじゃ、と忍は頷き、続けてふわあ、と欠伸をした。

とても眠そうだ。

「お前様よ、儂はとても眠い。我があるじ様の命令には逆らえんからこうして出てきた

が……あとは夜でよいか」

「あ、ああ……」

そうか……無理して起きてたんだな。

「儂はな、あのアロハ小僧のことなぞ、どうでもよいのじゃ。お前様は、また助けようとかくだらんことを考えているかもしれんがの」

「……」

くだらないことかもしれない。

でも、僕は忍野に救われた。

助けられたと思うのだ。

だから、恩は返したい。

「悪かったよ、忍。じゃあ夜にでも、もう一度話をしてくれるか」

「うむ」

そう言つて忍は。

そのまま突つ立つたままだった。

どうしたんだろう、としばらく考えていると。

忍は頭を少し下げてきた。

ああ、そうか。

忍の頭を撫でてやると、彼女は満足したように影へ潜っていった。頭を撫でる。

それは吸血鬼の絶対服従を誓う儀式だ。

しばらく影を見下ろしてから。

僕は立ち上がった。

夕日が沈みかけていた。もう家に帰る時間だ。

羽川が待っている。

忍野は、まだしばらくここにいて、と言っていた。

何故かは分からない。

でも、これは僕にとってはいいことだ。

明日、またあの塾へ行つて、忍野に訊かなければならない。

怪異——夢喰い馬について。

自転車をとぼしながら、僕は忍の話の思い返していた。

夢喰い馬。

縁起の良い怪異。

願いを叶える。

だが、報いを受けた忍野。

ここで、矛盾に気付く——願いを叶えた？

一体これのどこが、願いを叶えた事になる？

忍野は、ここに戻ってきたかかったのだろうか。

願いを叶えると同時に、報いを受ける？

それに、何か大事なことを忘れている気がする。

「お兄ちゃん、お疲れー」

帰ってくるなり、月火が言った。

月火はリビングでテレビを見ていた。

「羽川は？」

「二階。私達の部屋」

「火憐ちゃんは？」

「外で走ってんじゃない？」

「で、お前は？」

「お兄ちゃんの帰りを待ってたの」

「僕が帰ってきてから一回もテレビから目を離さなかった奴が何言ってるんだ！」

全く。

迎える気ゼロだな。



行きはよいよい、帰りはこわい。

「勉強とか言つてサボつて遊んでた人を迎える気なんて、ありませんん？」

「ぐ……………」

凶星だった。

いや、遊んでたわけじゃあ…。

あれ？ といった顔をする月火。やつとこつちを向いた。

「突つ込みがない……………」ということは！

急に目付きが変わつたかと思うと、どつからそんな声が出るやら、大声で言った。

「羽川さーん、お兄ちゃんはお勉強をサボ——」

「サボテンを觀賞しながらしてたんだけ！」

打ち消し。

サボテンを觀賞しながら受験勉強に勤しむ高校生がいた。

二階からは何の反応もない。

聞こえなかつたようだ。

僕は胸を撫で下ろす。

「驚くなあ、何てデマを言うんだよ」

「これくらいで許してやつてるんだから、感謝の言葉があつてもいいくらいだよ！」

サボったことは確定なんだな。  
あれ。

何か月火怒ってない？

「ところでお兄ちゃん。胸を撫で下ろすって表現、面白いよね。何なら本当に胸を削ぎ落としちゃおうか」

「何故そんな猟奇的な発想に至る!？」

「今なら羽川さんにチクるだけで許してあげるから、さつさと吐いちゃいなよ」  
「何のこことだ!？」

怖いよ。

僕、何かしましたか!？」

「お兄ちゃん、昨日私達の部屋に勝手に侵入したでしょ」

「……………」

何だろう、汗が止まらない。

暑いのかな。

クーラーガンガンだけど。

千石に怒られるなー。

いや、その前に月火に殺される。

「言ったよね、監視カメラがあるんだよ」

「当たり前のように言われましても……って！」

「やばい！」

「よりによって！」

「す、すみませんでした……」

「ぺこり。」

「妹に頭を下げて謝る兄。」

「何に誤ってるのかな」

「いや、まず字が誤ってるぞ！」

「兄としてここはフォロー。」

「月火は黙ってソファから起き上がり、テレビの音量を上げる。」

「キレてもテレビの音で羽川には聞こえないだろう。」

「なんつー配慮だ。」

「えっ、と。つ、月火ちゃんの、わ、和服を、」

「千石並みにしどろもどろだった。」

「和服を？」

「き、ききき着ちやいました……」

「……………」

ごめん。

言い訳タイム。

昨日忍が、和服を着てみたいの、と言いつ出したのだ。

もちろんそれは我が家の和服コスプレ少女のせいだろう。

物質創造だか何だかで、和服をつくれればいいじゃないかと言ったのだが、忍ちゃんは

一言。

「めんどくさ」

それに、よく構造も分からないそうで。

運がいいことに、いや今となっては悪いことに、昨日月火は姉の火憐と出張だった。

ファイヤーシスターズの活動だ。

それで僕は無意識のうちにこっそりと妹達の部屋に忍び込んで、和服を取りに行く形になった。

で。

問題はここから。

部屋に戻ってきた僕に、忍ちゃんは一言。

「どう着るか、俺は知らん」

着方も分からなかった。

いや昔日本に居たんなら知ってるんじゃないの？ とか思いつつ。

「お前様、手本を見せてくれんか」

……。

えーつと。

忍は和服を自分で着たいと言い張って、だから僕が着させようとしても断固拒否して。

でも忍は着方が分からないから僕にお手本を見せろと要求して、それを観察してました。

僕は着物を着てしまいました、月火の！

以上！

ちなみに。

忍はその後、見事に着こなして見せた。

ゆるゆるのぶかぶかだったけど、とても似合って可愛かった。

金髪でも着物は合うんだなあ、とか。

当時の僕はそんな軽い気持ちでした。

「……………」

「……………」

無言の月火。

無言の僕。

「道理で……どうつりで私の着物にお兄ちゃんの髪の毛が……」

浮気がバレちゃったお父さんの気分をここで味わうとは。

忍は吸血鬼だから、髪が抜けるとかそんなこと自体有り得ない。

あー。

バレちゃったかー。

きれいに畳んでしまったつもりだったんだけどな……。

「お兄ちゃん、ちよつとそこで待ってて。すぐに薙刀を持ってくるから」

「何でそんなもん平成の女の子が持つてるんだよ!」

監視カメラとかそれ以前に!

「毎朝薙刀体操してるの、知らないの?」

「お前、昭和の女の子だったのか!?!」

「あ、そつか。お兄ちゃんを起こす前にやってるから、知るわけないか」

怖い。

怖いよ。

皆さん、これが妹月火の正体ですよ。

そして、月火が部屋を出ようとしたその時。

部屋に、誰かが入ってきた。

「ちよつと、誰？ テレビもクーラーもガンガンじゃない」

羽川！

た、助かった……。

か？

「あ、阿良々木くん。おかえりー」

「ああ、……ただいま」

月火はといえば、テレビの音量を下げていた。

平静そのものの顔だ。

こいつはこうやって怒りを抑えることができるんだもんなあ。

そして後が怖い。

「阿良々木くん。私、もうそろそろ帰らなくちやなんだけど、」

「ああ、そっか」

でも、話があるって言ってたよな。

「……送っていくよ、日が落ちるの早いし」

「あつ、本当？　ありがとう」

「行つてらっしゃい」

何事も無かつたかのように言う月火。

でも心の中では、ちつ、逃げやがるこいつと思っているに違いない。  
なぜなら。

部屋を出る時ちらと彼女を見たとき、彼女もこちらをしつかりと見て。

そりやもうしつかりと見て、笑つてこう言つたから。

「絶対、帰ってきてね」



## 其の拾壹

011

火憐と月火は、午前も午後も、羽川とお勉強だったらしい。

そして、まだ八月に入ったばかりだというのに、宿題も終わったそうさ。

予想以上に、僕にとっては予想外なことに、早く終わったので、お勉強会は解散、火憐は外で運動しに、月火はのんびりテレビというわけだ。羽川はもちろん残って勉強。

ここが差なんだよな。

まあそれはどうでもいいとして。

僕個人としては、三人が一緒にお昼ご飯を作ったというのが超羨ましい。余ってないかな。

僕はママチャリを押しながら、羽川と並んで歩いていた。

別に送りに自転車は必要ないけど、帰りは自転車で帰るつもりだから。

羽川に貸しても良かったんだけど、何故か断られた。

察されてるよな……。

「で。話って何だ？」

「うーん、大きく分けてふたつ、かな」

羽川は少しそこで間を置いた。

「いい話から聞きたい？」

「もう片方はどんな話なんだ？」

羽川は答えない。

何か怖いな。

「じゃ、じゃあ、いい話から」

「阿良々木くん、こういう所でしちゃいけない話だつてのは分かってるんだけど——」

「……？」

「おめでどう、阿良々木くんもついに副音声デビューだよ」

……。

え？

今何て言つたんだろう。

「ごめん。もう一回言つてくれない？」

「阿良々木くん、副音声デビューだよ。『化物語 つばさキャット』の」

！

聞き間違いじゃなかった！

やった！

ついに、僕も！

副音声に参加だあ！

「本当に嬉しそうだね……」

「僕はこの時をずっと待ってました！」

しかも羽川さんの口から！

やべえ、涙出てきた。

「うん、あんまりここでは言いたくなかったんだけど、なんだか色んな人がこの話をしてたみたいだから、思い切ってこの場を借りて発表させていただきました」

わー。

素直に嬉しい。

「なあ、羽川」

「ん？ 何？」

「抱きついちゃっていい？」

「駄目」

きつい一言。

やっぱ駄目か。

この嬉しさを表現するにはそれが一番だと思ったんだけどな。

こう、お互いやったー！　って言いながら抱き合う。

外国じゃ当たり前だろ。

「外国では当たり前だとしても、今の阿良々木くんはそういうのと関係なしで抱きつこうとしてたよね」

「じゃあこの嬉しさを、僕はどこでどうやって示せばいいんだ……」

「なんか八九寺ちゃん危ないと思ってしまったんだけど、気のせいだよな？」

呟く羽川。

バレバレだった。

あーでも、本当に嬉しい。

このまま最終章まで副音声について語っていたい。

みんなが話したがるのも、分かる。

「駄目に決まってるでしょう」

言い放つ羽川さん。

「それに最終章まで語るより、阿良々木くんは最終章まで勉強したほうがいいと思う」  
「う」

「なんか、今日戦場ヶ原さんとお勉強やめたそうじゃない」

「うう」

「戦場ヶ原さんも悪いけど、それからずっと外出歩いてた阿良々木くんも、問題だよね」  
「ううう」

分かってたんだ。

バレバレじゃん……。

「そうか……じゃあもし僕があその後図書館で黙々と勉強していたら、僕は羽川に抱きつけたのか……」

「そんなことは一言も言ってません」

厳しいお叱りの言葉を受けた。

深く反省。

「……羽川、よければもうひとつの話も、聞かせてもらえないかな」

「いいよ。ていうか、こっちの方が今の阿良々木くんには大事な話かな」

……何だろう。

副音声より大事な話とか、今の僕には考えられないんだけど。

「こないだ、忍野さんの夢を見たの」

「……………」

「別に普通の夢だったよ、旅の途中で忍野さんに会う夢。ついでにお礼とお別れの言葉

も言えたし、うん、いい夢って言えば、いい夢かな」  
思い出した。

忘れていたことだ。

そして、引つかかっていたことだ。

忍野の夢。

戦場ヶ原も言っていた。

だが、彼女は魘された、と言っていたが。

「どうしてそんな夢を見たんだろうって、起きてから考えて」

羽川らしい。

夢についてまで考えるんだ。

「私の所為、かなあ……って」

それは、戦場ヶ原も言っていた。

——これは、どういうことなのかしらね。

——いえ、私の所為と言ってもいいのかしら。

「そりゃ、どういうことだ？」

「ねえ阿良々木くん」

質問しかけた僕を。

羽川は遮った。

「いろは歌ってあるじゃない」

「あ？」

いろは歌？

あの、いろはにほへとつて奴か？

「うん。あれ、全部言える？」

「いや、さすがに全部は無理だな……」

いろはにへとへとだ。

戦場ヶ原が言ってた。

あはは、戦場ヶ原さん面白いね、と。

羽川は笑ってから。

「いろは歌にはね、諸行無常、ぜしやうめつぽう是生滅法、しやうめつめつ生滅滅已、じやくめついちやく寂滅為楽の意味があるんだよ」

そうして彼女は、いろは歌を空で詠み始めた。

色は匂へど 散りぬるを。には諸行無常の。

我が世誰ぞ 常ならん。には是生滅法の。

有為の奥山 今日越えて。には生滅滅己の。

浅き夢見じ 酔ひもせず。には寂滅為楽の意味が。

それぞれ、込められているらしい。

「へえ。あいうえお全部使ってるだけじゃないんだな。そんなのよくつくつたなあ」

「当時はワ行の『ん』は入ってなかったんだけどね。それで、私が言いたいのは最後の部分。寂滅為楽」

「浅き夢見じ……つてとこか」

「意味はね、諸説あるけれど。儂い夢など見るまいよ、酔っているわけでもないのに」

「夢、か……」

「私の言いたいこと、分かる？」

もう忍野さんはいないの。けれど、そんな夢を見ちやっただってことは、いろはで言うなら、私は酔ってたんだね」

「でも、羽川、忍野が——」

「いないのよ」

きつぱりと羽川は言った。

「もう、帰ってこない。阿良々木くんだって、気付いてるくせに」

でも、僕は会った。

それもさつきだ。

「私は、あんな夢を見ちやっただ自分が、許せないな」



そうして羽川は笑って、もうこの話は終わり。と言った。

「じゃあ立て続けで悪いけど、こころで面白い話をひとつ」

「お」

「いろは歌だね」

「そこでまたいろはの話をする時点で、僕的には何の面白さも感じられないけどな！」

まあ、聞いてよ、と羽川は論じて。

「いろはの四十七文字を、七文字で区切ってみるの。そうしてできた七行のいろは歌……最後の一行は余って五文字になっちゃうんだけど、まあその七行の最後の文字を読んでみて」

僕にはそんなものを思い浮かべることができなかったから、羽川が一行ずつ読んで、その最後の文字を僕が並べた。

「と、か、な、く、て、し、す。だ」

「そう。暗号説って言ってるね、いろは歌には暗号が隠されてたんじゃないかって説。いろは歌の作者は未詳だからね。いろんな説を立てて、みんな研究なんだよ。

それで、その最後の文字、とかなくてしすは、とがなくてしす……咎無くて死すといれるわけ」

「おお」

「無実なのに殺されるって、暗号なんだね。期せずしてそうなったのかもしれないけど」  
「へえ……」

今更ながら、いろはに興味が沸いてきたな。

「平仮名全部を使って歌をつくるとか、只者じゃないよな……」

「え？ そうかな、私は小さい頃自分でつくって遊んでたよ」

「は？」

「だって、自分でつくった方が楽しくて覚えやすいし」

楽しそうに言う羽川。

いや、普通つくれねーだろ……。

「んん？ そんなことないよ。」

いろは歌はさつきも言ったように暗号があるかもってことで不吉に思われたんだよね。それで、明治時代に新しいいろは歌を募集したわけ。そしたらたたくさんのいろは歌が集まったんだよ。だからそんなに難しいことじゃないんだよ」

「そうかな……」

「そうだよ。これはいろは歌の中でも私が好きな歌なんだけどね、とりな順って言うの」

とりなくこゑす ゆめさませ（鳥啼く声す 夢覚ませ）

みよあけわたる ひんかしを（見よ明け渡る 東を）

そらいろはえて おきつへに（空色榮えて 沖つ辺に）

ほふねむれるぬ もやのうち（帆船群れるぬ 靄の中）

「ふうん、なんだか情景が浮かぶ歌だな」

「うん、綺麗な歌だよ。鳥が鳴いている、朝だからもう夢から目覚めなきや、ほら東から上る太陽を見てご覧……って感じかな。あつ、ごめんごめん。一人で勝手にはしゃいじゃったね」

「……お前は何でも知ってるな」

「何でもは知らないわよ。知ってることだけ」

だから、ね？

と羽川は僕の前で人差し指を立てる。

「夢から覚めないと、いけないんだよ」

「……………」

「現実を見なきや」

でも僕は忍野を見たんだ。

とか言ううと非常に子供っぽい気がして、やめた。

まだ何か、引っかかっている。

でもそれは何だ？

「……よく覚えとくよ」

「うん。分かつてもらえると、嬉しいな。いろは歌は、他にもあめつちの歌とか、たゐりの歌とか色々あるから、読んでみるといいよ。そうだ、今から一緒につくってみる？」

「悪い羽川、さすがに僕にはそんなことはできない……」

詩人じゃないし。

羽川はまた笑って。

「ああそうそう阿良々木くん。馬鹿といえばね、」

「ちよつと待て羽川、どこからどうきて馬鹿といえばと言ったんだ!？」

僕のことを馬鹿だと思ってるってことか!？」

「あ、ううん、違う違う。火憐ちゃんに聞かれたのよ。言葉の由来」

「ああ、なんだその話か……」

今朝、火憐が言ってたやつな。

「馬鹿を馬鹿って書くのは、これまた諸説あるんだけど、史記にある『鹿をさして馬という』が元になったというのが一番有名かな。でも同時に一番可能性が低いとされるから、これが正しい、とは言い切れないんだけどね」

「そうなのか」

「だいたい、馬鹿っていうのは当て字だしね。莫迦とか、バカとかが妥当だと思う」

「うん……」

なんだか馬鹿馬鹿言われてる気がしてヘコむ僕だった。

「火憐ちゃんもなんだかんと言つて、お兄ちゃん思いなんだね」

「は？ どういうことだ？」

「いや、阿良々木くん馬鹿の由来を、馬と鹿が馬鹿だから馬鹿と思つてたんでしよう？」

「違う！」

「あれ？ だから火憐ちゃんは質問してきたんだと思つてた」

それは火憐自身の馬鹿な勘違いだ！

僕に押し付けてんじゃねえよ！

あれ、やっぱし僕羽川に馬鹿だと思われてる？

羽川翼。

猫に魅せられた少女。

怪異と関わったからか、忍野と関わったからか、あるいは何か他の理由で。

彼女は、大学に入らず、卒業後は旅に出る。

ちゃんと計画も立てて。

変えるつもりなど無いのだろう。

普通旅とかそんなこと考えないと思うのだが。

それでも僕は思う。

彼女は、本物だと。

と。

突然立ち止まる羽川。

「ここらへんでいいや。お邪魔になるかもだしね」

そうしてにつこり笑う。

お邪魔？

何の？

そう聞くまでもなかった。

携帯が鳴ったのだ。

どんだけ凄いだよ。

「じゃ、また明々後日、阿良々木くん。いい？ 明日は宿題をちゃんとするんだよ。明日は阿良々木くん忙しいから、特別に家庭教師はお休みだよ。いい？ サボっちゃ駄目だよ。明日の分は、お盆休みに振り替えて大丈夫かな？」

そうして確認を終えた羽川は。

ばいばい、と。

手を振りながら帰っていった。

今朝のうちからこの二つの話をするつもりだったのだろうか。忍野の話なんて一言もしてなかったのに……と思いつつながら携帯電話を取り出し、相手を確認する。戦場ヶ原から電話だった。

## 其の拾貳

012

「阿良々木くん」

電話に出るなり、相手は早口で言った。

「おお、戦場ヶ原……どうした？」

「……別に、阿良々木くんの声が聞きたかったわけじゃないんだからね」

「……」

平坦な口調で言われても。

「デレてんの？」

「さつき、羽川さんから電話があつて、」

「そうなのか？」

「もう別に嬉しくも何とも無かつたんだけど」

「羽川にデレた！」

あれ、無理にツンデレぶろうとしてない？

「お叱りを受けてしまったわ」



「ああ……今しがた僕も受けたよ」

「阿良々木くんとお揃いなんで、嬉しくも何とも無いわね」

「あれ!？」

さつきデレた人が!？」

今はツンモードなのだろうか。

なんだよ、傷つくなあ。

傷物語二。

「そうそう、先程私は凄い発見をしたのよ。聞きなさい、聞かないと殺すけど」

「そんな殺伐としたこと言わなくても聞くよ!」

「豆知識。豆という漢字を書いて丸で囲み、逆さにして見るとなんだか困った人の顔に見えるかも知れないわよ」

「そののどろが凄い発見なんだ!？」

「え? そりやもう天地が引っくり返るほどの」

「何でさも当然そうに言うんだよ!」

「ふふ。これが本当の豆知識ね」

「どうでもいい!」

それに。

豆を引つくり返しても、人の顔には見えない。

「それは阿良々木くんの字が汚いのよ」

「酷い言い方だな！」

「ま、色んな書体で試して御覧なさい。書体によつては、嬉しい顔だったり、普通の顔だつたりするわ」

「……そうかよ」

「あらあら、阿良々木くん、随分と厳しいのね。ではもうひとつ、私の大発見よ。聞きなさい、聞いても殺すけど」

「どつちにしろ殺すんだな！」

「楽という漢字を書いて丸で囲み、逆さにして見るとなんだか酸っぱいものを食べた人の顔に見えなくも無いわよ」

「また漢字かよ！」

えーと。

楽を囲んで引つくり返して。

「ぶっー！」

「ね、見えなくも無いでしょうっ？」

不覚にも、吹き出してしまった僕。

いや。

面白かった。

「阿良々木くんの顔そっくりよね」

「いや、どうして僕はそんな酸っぱい顔をしているんだよ！」

「アニメ化された時、あまりの違いに驚いたわ」

「いやだから僕の顔はそんな面白いもんじゃねえよ！」

「うふふ。これが本当の楽知識ね」

「……いや、したり顔で言われましても！」

何も上手いこと言えてないって。

「楽があるでしょう、と言えばよかったですかしら」

「いや、学だろ！」

「豆知識といえば、豆しばってあるじゃない」

「あー、また豆から発展させるか……」

「いいじゃない。豆のような阿良々木くんにはぴったりな話題よ」

「豆のようなどいいう修飾には一体どんな意味が含まれているんだ!？」

小せえってか。

小さいって言いたいのか！

「いえ、ジャックと豆の木の豆のように、いつかはビッグな男になるということよ」  
「ぜってー嘘だ！」

「それで、豆しばの話なのだけれど」

「ああ、何だよ」

「あいつらは何故毎日一つ豆知識を教えるのでしょうかね」

「知るか！」

「私もし奴らに出くわしたら、豆知識を聞いて『はいはいそれくらい知ってますよーだ』と言って潰しちゃうと思うけどね」

「酷い！」

「名ばかりヒドインとは私のことよ」

「何だその酷いネーミングは！」

名ばかりだけでなく、酷いヒロインなんだ……。

「しかも、巨大化した私がよ」

「もう豆とか見えねえだろ……」

「ふはははは、人が豆のようだよ」

「潰すって、人間をだっただのか!?!」

しかも、豆じゃなくてゴミだろ。

名言が台無しだ。

いや、名言自体が台無しなのかな。

「ゴミって……自分のことをゴミと思ってるの？」

「いや、豆を訂正しただけで別に自分がゴミという意味じゃ……」

あれ？

僕のことをゴミだの虫だの言っておきながら、人が豆のようって言ったよな……。

「それじゃあガハラさん。ガハラさんは僕を普通に人として見ているという事じゃないか」

「おーや。一本とられてしまったようね。それとも、今の台詞は人として見られるのが嫌という意味？」

「いや、決してそんな意味ではないよ！」

「それにしてもやっぱり豆が喋るなんて、気味が悪くない？ しかも笑い方も不気味だし」

「あー、お前はそう思うんだ……」

まあ、普通に考えりゃ豆しばは怖いよな。

炒飯食べてたらその中の具が喋りだすんだからな。

「それにしても阿良々木くんは本当に小さいのね」

「やっぱり小さいって思ってたんじゃないか!」

ビッグになるってのはやっぱ嘘なんだな!

「隣に並べばその差は歴然ね」

「え……………」

驚くべきことに。

僕の隣に、ガハラさんが立っていたのだった。

「ええ……………えええ!?!」

携帯を耳から離して、電源を切る戦場ヶ原。

「あら、狐につままれたような顔をして。狐にまで馬鹿にされちゃったのね、可哀想に」

「狐に化かされたってことを言いたいのか!?!」

馬鹿にされたとか化かされたって、また結構なミスだよなあ!

「ま、とうの昔に阿良々木くんは化かされてるって感じだけど」

「……………」

「ねえ、阿良々木くん。実は神原から話は聞いたのだけれど」

「ああ……………」

「私より先に彼女とやっちゃったそうじゃない」

「何大法螺吹いてんだ、あいつ!?!」

「さすがの私もシヨックだったわ……」

だから誤解だつて！

「まあ、今のは冗談だとして。」

阿良々木くん、例の学習塾で、会ったそうじゃない」

「……ああ、まあ」

「連れてつてもらえないかしら」

「え？」

「その塾に、連れてつてもらえないかしら」

ここに、僕のいるところに来る前から、戦場ヶ原は決めていたことなのだろう。

迷いもせず、きつぱりと言った。

「いいけど……でも何でだ？ お前、忍野とはあんまし関わりたくないって——」

「本当に何も気付いてないのね。でもまあいいわ。後々分かることなのだから」

「……でも、大丈夫なのか？ もう暗くなるのに」

しかし戦場ヶ原は行くといつて聞かなかつた。

大丈夫じゃないのは、僕の方なんだよな。

「私は明日忙しいの。だからできれば今日のうちがいいと思って」

「そうか」

「煩わしいのは、もうたくさんなのよ」

そう言つて。

歩き出す戦場ヶ原。

今日も彼女は長いスカートを穿いているので、徒歩で向かう。帰りが遅くなつてしまふが、仕方が無い。

「夢喰い馬、ね……」

僕は戦場ヶ原に、忍の解説を話して聞かせた。

戦場ヶ原はふうむ、と唸つてから怪異の名を口にしたのだ。

「少なくとも忍野さんには、馬といった要素は皆無よね」

それは僕も思つた。

馬は優雅で美しい感じだけど、忍野はずる賢く薄汚い。

「名前は馬だけど、派生しちゃつてるから。どちらかというと、バク」

「バク。ああ、そう、なるほどね」

一人で納得したような顔をする戦場ヶ原。

「阿良々木くんは、本当に色んな怪異に関わるのね……どうしてかしら」

「……僕が聞きたいよ」

つて、あれ？



僕が関わる？

今回は忍野であって僕というわけでは……ああ。

忍野を通して、関わったという意味か。

「怪異が惹かれる何かがあるのかしらね」

「そうかもな」

「何なら、解剖して確かめてみましょうか」

「それだけはやめてくれ！」

科学では怪異の証明ができないように。

きつと証明はできないだろう。

「ああ、しまった。今日は文房具を持って来てないわ」

「そりゃ残念だったな」

「彫刻刀ならあったわ」

「おい！」

何でんなもん持つてるんだよ！

「彫刻刀って、面白い名前よね。なんだか凄く黒砂糖っぽい感じがしてこない？」

「それは、超・黒糖だろ！」

お菓子のパッケージに書いてありそう。

誰も即座には思いつかないだろ、そんなの。

「まあ、彫刻刀は嘘。困ったものね、解剖ができないじゃない」

「仮に彫刻刀を持っていたとしても、解剖後はどうしようもないよな……」

「ティッシュなら持つてるわよ」

「止血以前の問題だろうが！」

血生臭い話になってしまった。

怪異に関わる、か。

一度怪異に関わったものは、怪異に惹かれる、とか。

忍野が言っていた。

まあ、怪異殺しとまで言われる怪異の王が僕達の町に来てしまったことから、ここが怪異の吹き溜まりのようになっていっているというのも理由の一つだろうが。

気持ちの良いものではない。

「まあ策士策に溺れるとか、狩人罠にかかるとか言うし、変に考えていたら逆に自滅しちゃうのかもね」

「……そうだろうな」

「それに阿良々木くんは策士でも狩人でもないし。仮に狩人だったとしても雁すら狩れないで、しよせん阿良々木くんが枯れるだけなのよね」

「単に駄洒落が言いたかったただけなのか!？」

意味分からねえよ!

「ちなみに私は狩りのカリスマなの」

「そうかよ」

また洒落じゃねえか。

「ええ。狙った獲物は譲り受けるわ」

「どんなリサイクルだよ!」

待ってたらいつか渡される日が来るのか?

それまで我慢の日々なのか?

「え? 罹災来る?」

「またバイオハザードの話になってしまった!」

「阿良々木くんてば、罹災は名詞なのだから、その後には動詞の来るがくるのはおかしいわよ」

「いやだから災害の話じゃねえよ!」

再利用だ。

繰り返しギャグって、ある意味再利用だよな。

「——で。どうして忍野の所に行きたいんだ?」

「それはもちろん、阿良々木くんに教えなくちゃいけないことがあるからよ」  
百聞は一見にしかず。

戦場ヶ原は呟いた。

「あなたはまだ気付いていないのよね。

本当に、困ったものだわ……少し考えれば、分かることなのに」

何だか、羽川といい戦場ヶ原といい、厳しいことを言われっぱなしな気がする。

「啼かぬなら、啼くまで殺してみせようホトトギス」

「合体しちゃった！」

語呂も悪い！

それが戦場ヶ原を表しているのか!?

啼くまで殺すのを衆目に晒すんだ……。

殺されるのはきつと僕。

「私が塾ですることは、そんなことね」

「啼くまで殺すの!?!」

「言っただでしょう。私は狩りのカリスマなのよ」

まあ。

殺しはしなかったのだが。

「やあ、阿良々木くん。今度はツンデレちゃんと一緒になんだね」

忍野は、二番目の教室で寝転がっていた。

「こんばんは、忍野さん」

「で？ 今度はツンデレちゃんがご挨拶ってことかい？

見たところ、何もなさそうだし」

寝転がったまま、戦場ヶ原を見る。

じろじろと。

「忍野さん、質問があるんです」

そんな忍野を一瞥して。

彼女はきつぱりと言った。

「何だい？ 随分と元気いいね。何かいいことでもあったのかい？」

その言葉を。

その言葉を言い切る前に、戦場ヶ原は質問をしていた。

「忍野さん、趣味は何ですか」

「おや、急にどうしたのかな、そんなこと、答える義務なんて無いだろう？」

こいつ……相変わらずその口調は何とかならないのだろうか。

むかむかしてくる。

「じゃあ、好きな色は何ですか」

「おいおいツンデレちゃん。蟹の時じゃないんだから。どうしてそうやって質問攻めにするんだい」

「……それは、あなた自身が知らないからです、『忍野さん』」

戦場ヶ原は忍野を睨みつけた。

忍野は目を細め、むくりと起き上がってポケットから煙草を取り出した。

火を付けずに啜える。

「それは、どういう意味かな」

「忍野さん、あなたは忍野さんではないという意味です。」

忍野さん。もう彼はここには帰ってきません。それを掘り返すような真似は、やめて

下さい」

そして戦場ヶ原は。

相手に向かって、こう言ったのだ。

「あなたは、……あなたが、『夢喰い馬』でしょう?」

しばらく沈黙だった。

誰も何も喋らない。

沈黙を破ったのは、忍野だった。

口の端を歪めて。

彼は、にやりと笑ったのだった。

煙草が、リノリウムの床に落ちる。

「そうだよ」

あつさりと。

実にあつさりと彼は告白した。

「僕が、『夢喰い馬』だ」

馬が、啼いた。

## 其の拾参

013

「お前様よ、己の勘違いに気付いたようじゃの」

戦場ヶ原を家まで送り、帰宅した時、月火は夕食を作っていた。

「……ただいま」

「おかえりー」

あれ、普通の反応だ。

「つ、月火ちゃん？」

「ああ、お兄ちゃん。別に私あの時怒ってなかったし。プラチナむかっただけだよ」

凄く怒ってるように聞こえるんだよなあ、その言葉。

「それにお兄ちゃんは和服に興味を持ってくれた、ということでしょう？」

「あ、ああ、まあ……」

和服の文句ではない。

というかさななこと言ったら月火から本当の本当に殺される。

「だから、別に怒ってないよ」



「そ、そっか……」

苦笑いして部屋を後にする僕。

月火のようなヒステリーだと、怒りも意外と早くおさまることもある。命拾いしたようだ。

そして、僕は風呂場にいた。

今日は随分と歩き回った上、崩壊寸前の建物にも入ってしまったので、シャワーといこう。

そして。

シャワーを浴びながら。

僕の後ろで忍が話し始めたのだった。

「あの軽薄な男が夢喰い馬であることに、何故気付かなんだ」

「いや、さすがにそこまでは……」

まったく、相変わらず儂の主人は馬鹿じゃのう、と呟く忍。

確かに、否定はできなくなってきた。

戦場ヶ原は、神原との電話、そして羽川との電話で気付いたのだ。

僕が何に気付いたかを。

僕が何に勘違いしていたかを。

だから、戦場ヶ原は僕の目の前で証明して見せたのだ。

「夢喰い……馬」

僕は忍野……いや、馬を見た。

彼は忍野そっくりだった。

それでもどこか違うと思っただのは、彼は忍野ではなかったからなのか。

彼自身が怪異だったからなのか。

「そうだよ。阿良々木くんは何も気付かなかったみたいだけど、ツンデレちゃんは早くも見破ったってわけか」

面白くないねえ、と頭を掻く。

『忍野さん』、最後の質問です。あなたは、ここで何をしていますか」

「何をつて？」

首を傾げる馬。

彼の足元から生じる影が、不気味に蠢いていた。

その形は歪いびつで。

そして、どの生き物とも違う形をしていた。

「お嬢ちゃん。もう気付いているんだらう？」

僕は、君の夢を食べた」

「……っ」

「とても美味しかったよ、お嬢ちゃんにとっては悪夢だったかもしれないけど」

「やっぱりあの悪夢は、あなたが見せたんですね」

そうさ、と彼は立ち上がる。

「僕は夢を喰って大きくなる。」

僕は食べた。君の夢も、そう、委員長ちゃんの夢も」

願いを叶える。

それは、忍野の願いではない——僕達の願いだったのだ。

対象者は、忍野ではない——僕達。

「願いは、叶ったかな」

「いいえ」

いいえ、と。

首を振る戦場ヶ原。

「まったく、まったくよ。」

こうして偽者にせよ忍野さんについてしまったんだから、願いなんて叶ってないわ。

それ以前に、私は願ってなんか、ない」

「ふうん、そうかい？」

忍野そっくりに笑つて。

馬は話し出した。

「僕はどんな小さな夢でも、嗅ぎ当てる事ができる——それに、叶えることだつてできるんだ。

だからお嬢ちゃんが願つたのは忍野メメとかいう奴に会いたくない、じゃあない。

お嬢ちゃんは、もう一度だけでいいから、彼に会いたかつたんだ。それくらい、僕に分かるよ。どんな小さな想いでも、分かるんだから。

委員長ちゃんも、密かに想つていた。忍野メメにお礼が言いたい。だから叶えた。百合っ子ちゃんも、そう。忍野メメに会いたい。だから叶えた。

迷子ちゃんは、忍野メメに会つてみたい。だから叶えた。

照れ屋ちゃんは、忍野メメとは今度会うようだから、叶えるまでも無かつた。

そして、阿良々木くん。

君が一番、この中で想いが、強い」  
次の瞬間。

忍野は、否、馬は、目の前：僕の目と鼻の先に立っていた。

「一番美味しそうだから、阿良々木くんの夢は最後までとつておいたんだよ」

馬はにやりと笑う。

「でもまあ、今夜はまた委員長ちゃんの夢を頂くとするか。あの子、自分で自分の夢に反省してみたいだけ——立派だね、だけどその迷いすら僕は喰うことができる。願いは叶える」

代償として、悪夢を見るかもだけどね、と言う。

「だから、だから、阿良々木くんの夢は明日の夜にお預けだ。

忍野メメに思いを馳せている人は多いから、本当にこの町は面白いよね。みんなの夢を食べて願いを叶えるまでは、僕はここにいろよ」

そして、今。

頭の整理ができたところで、僕は勘違いを、それもとても馬鹿な勘違いをしていたことに、ようやく気付いたのだった。

みんなから叱責の言葉を受けても、仕方ない。

戦場ヶ原や羽川は言っていた。

私の所為、と。

それは、自分が心の底で密かに思っていたことに悔やんでいたのだ。

僕は、それにすら気付かなかったというのに。

「僕は言わなかったか？ 夢喰い馬はあの軽薄な男に、捉われていると」  
そう。

僕は勘違いしていたのだ。

僕は忍野が、馬に捉われていると思っていた。

だが実際は、馬が、忍野に捉われていたのだ。

大体、可笑しい話じゃないか。

あの忍野メメが、怪異に捉われるはずが無い。

「多くの人間が同じことを想っておれば、それに惹かれて馬もやって来るじゃろうよ。多分馬の奴、あの軽薄な男に化けて興に乗っておるようじゃ。これは早急に対処が必要じゃの」

「いや、でも忍。あいつは悪気は無いんだろう？ 願いを叶えるって、言っただじやないか」

「初めはそうだったかもしれない。じゃがお前様よ、馬は夢を食べて大きくなると言うたじゃろう？ もう今の時点でも十分巨大化して強くなったのに、もしお前様の大きな夢を食べたらどうなると想う」

「……」

ひとたまりもない。

「運が悪ければ、死ぬじゃろうな」

「死ぬ、か……」

「まあ、儂はお前様が死んでも別に何とも思わないがの」

今のはツンデレなのだろうか。

辛辣な言葉を口にして、忍はかか、と笑った。

いつの間にやら湯船を占領していた。

僕はもうシャワーを済ませていたが、これだと湯船に浸かれない。

「いいか、お前様は夢喰い馬に捉われてしまったのじゃ。一度目を付けられたら、もう逃れることはできない」

「……対処法はないのか」

本物の、忍野は何か言ってなかったのか。

「いや、喋っておったかもしれないが……」

忍は湯船から上がって。

「まあ、その話は戯れの後じゃ。儂がちゃんと説明しなかったのも悪いが、お前様もお前様じゃ、相殺といこうかの」

「……分かった」

別に、忍は悪くないんだよなあ、と思いつながらシャンプーを手に取り、彼女の頭を泡立たせる。

また凄い泡の量だった。

「シャンプーとは実に面白いものよ。人間の文化は、非常に面白い」  
「そうか」

非常、ね。

でもこんなに泡ができるのは、お前のイメージだからな。

なんかシャボン玉が大量発生してるし、今度シャンプーハットでも買ってやるべきだろうか。いや、買ったとしても妹達に不信がられるな。

「ついでに身体も洗ってもらおうかの」

そして忍はまたかか、と笑う。

風呂は四百年ぶりとか言ってたし、それに忍は女性だし、やっぱりこういうのは気になるんだろうな。

いくら体が汚れないといっても。

「しかし、あのツンデレ娘にいい所を全て持っていかれた感じがするの」  
「はっ」

「いや、僕は夜になったら、お前様に面と向かって、『あれは軽薄な男ではない。あれは夢喰い馬じゃ』と言うつもりだったのじゃ。そして章変え、という展開を求めていたのじゃが」

「そんなこと考えてたのか！」



いや、すぐに教えてくれよ。

なんだ、みんな気付いてたんじゃないか！

なんか僕だけ恥ずかしい。

「格好いいところは全てあの名ばかり少女にとられてしまった」

「名ばかり少女って！」

少女じゃないみたいじゃん！

「そうか。名ばかり少女は儂じゃったか」

そう言われればそうだけどさ！

自虐ネタどころじゃない、ただの自虐だ。

そうして、シャワーの水で忍の頭を洗い流していると。

「ふひゃー、あつちーな、もう汗だくだぜ、やっぱ地球温暖化つてすげーよ、ダツシュ往

復五キロで汗が滝のようだもんな、もうナイアガラだよ、ナイアガラ——」

ばん、とガラス戸が勢いよく開いて、火憐の登場だった。

すっぽんぽんである。

「……えつと」

さあ、状況説明！

場所——自宅の風呂！

登場人物——僕、忍、火憐！

概略——僕（高校三年生）が忍（見た目八歳・金髪）の髪を洗って戯れているところを火憐（妹）に見られた！ しかも火憐は裸！

うわ、また分かりやすっ！

説明なんかいらねえ！

「……………」

しばらく火憐は黙って僕と忍を見ていた。がらがらがら。

再び戸を閉める火憐。

五秒後。

再びばん、と戸を開けて火憐再登場。

「ああ、よかった、見間違いだった」

「見間違い？ 何のことだ」

「なんでもねーよ」

五秒の間に、忍は僕の影へ戻っていた。

いやあ、危ない危ない。

これが月火だったら……。

これで一安心。

って！

「つかお前何で入ってきてんだよ！」

「いや、兄ちゃんが入ってるなんてあたし知らなかったしー」

「上がるまで待つてろ！」

「やだよ、また着替えろっつーの？」

うわあ。

妹と風呂かよ。

これは見る人によっっちゃ忍と風呂よりも犯罪じみてるぞ……。

「僕まだ湯船に浸かってないんだよ」

「あー、じゃあとつと入っておつとつと上がりなよ」

「何故某会社のお菓子の名前が出た!？」

「いや、おつとつとつて海のキャラクター勢揃いだからさ」

急いで湯船に浸かる。

「とと丸が出た時の感動は忘れられねー」

一人で喋ってる。

十数えたらすぐに上がるう。

「いや、兄ちゃん千数えなくちや駄目だ」

「何だよ!？」

茹だつちやうよ!

手足しわしわになつちやうよ!

「ああ、そういえば兄ちゃん、昔そうやって、『おじいちゃんになつちやつたー』的なこと言つてたな」

「昔の話を……」

「それに千数えるのなんて秒速で終わるだろ。いち、じゆう、ひやく、せん。はい終わりーとつとと上がれー」

「また小学生みたいな中学生だなおい!」

お前もうち中三だろ。

何小二病みたいなこと言つてんだ。

火憐はポニテを解いて、髪を洗う。

「何じろじろ見てんだよ」

「別に」

「兄ちゃんに、裸見られて、もういいや」

「もういいの!？」

それは女性として有るまじき発言だと思ふよ！

「アルマジロな発言って、どんな発言？」

「こつちが聞きたいわ！」

丸くなつちやうのかな。

「はー、それにしても疲れたなーだりー」

「夏にダツシユする奴の気が知れない」

「ちよつと月火ちゃんのご機嫌が麗しくなかつたからさー、ずっと外走つてたんだよな」

「そ、そうなんだ……」

「どうしたんだろ、着物がどうのつてのを言つてただけだよ、」

「へ、へえ……」

「何だろう、兄ちゃんがパンツではなくフンドシを着用してるのが分かつちやつたのかな」

「着用してねえよ！」

何だよその妹以上に和服コスプレ野郎は！

「こないだ月火ちゃんと、兄ちゃんはブリーフ派かトランクス派かという議題で盛り上がつてただけだよ」

「何僕の後輩みたいなこと言つてんだよ！」

痛々しい話だな!

「ああ、痛々しいといえ、こないだ古文のテストで、『いと痛し』を『痛々し』って書いてしまったな」

「痛々しい!」

「まあ、結局ブリーフ派だと思ふ者はブリーフ派、トランクス派だと思ふ者はトランクス派という結果に終わって」

「言っておくが、それが格好いいと思つていいのは中学生までだ!」

「そうだ、兄ちゃんも参加してくれよ、三人で話せばきつと分かるはず」

「いや、何で僕が僕自身の趣味について考えなくちやならねえんだよ!」

どつちでもいいよ!

「いや、三人寄らば、えつと……」

「分からない馬鹿がいた……」

僕よりも馬鹿な人はいました!

「文殊の……、そう、三人寄らば文殊のえつちだ!」

「湯船で溺れ死ね」

神原が喜びそうな台詞だが、生憎僕には乗つてやる気は無い。

どうして最後の最後に間違えるんだよ。

もういいや。

とりあえず上がろう。

湯船から上がり、ガラス戸を開けると。

目の前に、月火がいた。

「あれ？ 今入ってるのお兄ちゃんだったんだ」

「え？ ああ、うんまあ」

「シャワー止めてたくない？」

「あ、ああ、そ、そうだな」

やばい。

超やばい。

火憐がいるのがばれたら、もう確実に死ぬ。

「ご飯できてるから、早く着替えてね」

「はいよ」

ところがところが。

「なあ兄ちゃん、それで三人寄らば何だっけ？」

ひよっこり顔を出した火憐。

この馬鹿野郎。

「……………」

無表情の月火。

せつかく珍しくキレイなかつた月火も、もう限界のようだ。

「火憐ちゃん、お兄ちゃん、どうして二人とも素っ裸なのかな」

あーちゃー。

もう駄目だ。

しまった、といった顔をする火憐。

「火憐ちゃん、三人寄らば、呪文の知恵だよ」

間違ってる！

こいつもまた間違ってる！

三人寄らば、命取り。

あれ？

そうだったっけ？

「二人とも、ちよつとそこで待ってて。すぐに薙刀を持ってくるから」

そうして。

につこり笑顔の月火は、急いで薙刀を取りに行ったのだった。



## 其の拾肆

014

月火から開放され、夕食を食べたときには、もう九時になっていた（夕食は無いに等しかった。風呂場での出来事に関してはもう笑い事では済まされないのです、というか彼女のイメージがこれ以上悪くなったら困るので、省略）。

二階に上がり、自分の部屋に入ろうとしたが、邪魔者がいた。  
火憐だった。

僕の部屋の前で、仁王立ちしていた。

「……どけよ」

「ここで会ったが百年目！ 覚悟！」

「いや、自分の家だし」

何だよ急に！

「いやさ、兄ちゃんのせいで月火ちゃんマジグレじゃねーかよ。あたしは何も悪くないってのにさー」

「いや、お前の所為だよ！」

ほとんど！

「んー、でもこのままじゃ納得いかないというか……」

「お前のくだらんプライドなんか知るか。いっつも風呂呂上り踊ってる体力馬鹿が」

薙刀事件後も、普通に踊ってる（本人曰く、エアロビクス）をしていた火憐は本当に馬鹿だ。

「あつ、そっか。あたしの持ちネタを披露するべきだったんだな」

「つうか少しは疲労してくれ……」

火憐は体をくの字にまげて（しかも僕じゃ絶対できないきつそうな姿勢をとって）、顔を歪めた。

「ここで会ったが百年目！ 覚悟！」

「やられてるのに!？」

そして再び仁王立ちして胸を張る火憐。

「逆パターン。畜生、覚えてろ！」

「やられた癖に偉そうだ！」

危ない危ない。

笑壺ネタになるところだった。

僕は火憐を押しつける。

もう満足だろ。

「なあー兄ちゃん。やっぱしあたしは兄ちゃんが悪いと思うなー」

「僕はお前が悪いと思う、それでいいだろ」

「いや、よくない!」

びし、と言いつ放つ火憐。

こういう時に燃え上がられると困るのだが……。

「どつちが正しくどつちが間違ってるのか分からないままなんて、おかしいだろ! 白

黒はつきりつけねーと!」

「いや、お前の考えが間違ってるんだ」

「それに、昔はよくこういう時は喧嘩してたのに、近頃兄ちゃん喧嘩してくんないじゃん。一体全体どういうわけだよ」

「いや、どうして喧嘩を求めんだよ……」

月火にまた怒られるぞ。

いや、僕が袋叩きにあうのか。

「こういう時は、指相撲で決着をつける!」

「意外としよばい!」

「ほら、手エ出せ兄ちゃん」

右手を差し出す火憐。

押しつけたと思つたらまた扉の前に立っていた。

何の護衛だよ。

というか主人を入れない護衛なんてないよな……。

しようがない。

ここは付き合うか。

これはゲームで言う一種のイベントみたいなもんだろう。はいを選択しないと永遠にループする奴。

やっても何ももらえないけど。

「ようし、勝った方が今週月火ちゃんの奴隷だ！」

「目的が変わってる！」

しかも勝った方がかよ！

「よーい、どん！」

かけつこのような掛け声と共に、僕の親指を火憐の親指が押し付ける。

つていうか！

容赦ない！

マジで痛い！

押し付けるといふか、捻り潰すといふか。

いや、指キリキリいつてるし、骨が折れるんじゃないか!?  
しかも。

「いーち、にー、」

「ギブギブギブギブ!」

数えるの遅い!

めっちゃ遅いつて!

ようやく指を離す火憐。

「なんだよ兄ちゃん、もう負けか?」

「いや、マジで指相撲する奴とか、ありえないだろ……」

痛めたのは指だけのはずだが、息も絶え絶えだった。

「これくらいでへばつても困るぜ。さあ、第二回戦といこうか」

「まだあんのかよ!」

「さ、兄ちゃん早く早く」

「絶対目的を失つてるよな……」

「目的? なんだそれは。兄ちゃんの指を潰す以外に、何かあるのか?」

「やっぱしな!」

あの痛さは半端じゃなかったよ。

「高望みはしない」

「僕の指を潰す事だけで十分だろうに！」

まったくさあ。忙しいってのに。

……いや。

折角だから、訊いてみよう。

今、一番訊きたいことだ。

「火憐ちゃん」

「何だ？ 捻り潰される覚悟ができたのか」

「いや、そんな覚悟できねえよ！」

「あたしはできてるよ？」

「Mかっけえ！」

息をついて、質問する。

「願いを叶えてくれるアイテムがあったとして、叶えてもらうか」

「もらわない」

火憐は即答した。

当たり前のことのように。

いや、当たり前なのだろう。

「願いを叶える？ んなもん自分で叶えるさ。願いは、努力して自分で叶えるもんだろ。そうだよな。」

願いを叶えてくれるアイテムが目の前にあって、そのとき願わないと、どうして言える。

かつて僕はそう思っていた。

でも今は違う。

願いは、自分で叶えるものだし、どんな夢も他人が叶えることはおかしいことだ。でも最初からそう考えていた火憐は凄いと、言うべきなのだろうか。

「だからあたしは、ドラゴンボールがあつたとしても、絶対に神龍シエンロンは呼び出さない」「漫画の話をするな」

「集めはするだろうけど」

集めそうだよな。

お前だつたらサイヤ人と互角に戦えるだろうよ。

「願うとしても自分とか他人とかじゃなくて、世界全体に向けて願うだろうな」

「……例えば？」

「平和とかさ」

また当たり前だろ、という風に言う火憐。

馬鹿だけど格好いい。

バカツコいい。

「ナメック星だかの神龍だって呼び出す気はねーし、あたしなんかには呼び出せねーよ」  
願いは三つもいらないうてか。

無欲、というのかな。

「だってあたしナメック語知らないし」

「漫画の話が続けるな」

ただの馬鹿だった。

空気が読めないのか。

それに、と続ける火憐。

「あたしはそんなものに頼る気はないよ。たとえ、兄ちゃんや月火ちゃん、守るべき人が死んじまつても。地獄の果てまで行つてでも、連れ戻す」

につこりと笑う。

僕はこの言葉が訊きたかったのかもしれない。

願いを叶えるものなんて、必要ない。

夢喰い馬も、僕にとってはまだのおせっかいに過ぎない。



余計なお世話だ。

「じゃあ格好いい火憐ちゃん、僕そろそろ部屋に入りたんだけど」

「何を言う！ 駄目に決まっている、まだ決着はついてねー！」

「……。火憐様、どうか私めの為にそこを退いて下さいませ」

「よしつ、そこまで言うのなら仕方あるまい！」

簡単に落ちた。

「ここらへん八九寺と違うんだよな。

まだまだ子供だ。

忠犬宜しく退いてくれた。

しかもバク転しながら。

「……僕は受験勉強に勤しむから、邪魔するなよ」

「しゃーねーな、じゃあ腕相撲の決着は明日だ」

ついに競技まで変わってしまったが……。

ようやく部屋に入った僕は、ドアを閉めるなり自分の影に呼びかけた。

ぬう、と僕の影から幼女が姿を現す。

「全く、我があるじ様の過激な妹御の所為で、ゆっくり風呂にも入れんかったわ」

「……………めん」

「別に、謝ってほしいわけではない」

ぶつきらばうに忍は言つて、それで、用は。と尋ねた。

「忍。何か対処法はあるのか」

忍野は、何か言つていたか。

忍は、ゆつくり言つた。

「ない」

「……」

「あの軽薄な小僧が言つていたのは、ツンデレ娘の蟹の時のような対処法じゃつた。今のお前様にはそんな準備はできまい」

結界を張つて。

祭壇を設け、供物を捧げ。

酒を用意する。

そんなこと、できるわけがない。

願いを叶えるタイプの怪異への対処法。

かつて忍野が話していたが、もつともスタンダードなものは、その怪異では叶えられない願い事をする事、だそうだ。

例えば大きすぎる願い。絶対に不可能な願い。

火憐の願いも、それに含まれるのかもしれないが。

だが、僕達はもう願ってしまった。

無意識であつても、夢見てしまった。

キャンセルは不可能。

怪異にクーリング・オフなど通用しない。

だから、理屈を裏返すという手がある。

願う自体が、不可能であればいい——それが、猿と相手取るとき使った手だったの

だが、今回はそれもきかない。

夢喰い馬は、それさえも覆す怪異なのだ。

不可能を可能にする。

忍野の姿をとり、願いを叶え、夢を食べようとしている。

所詮馬の目的は、夢を食べることだ。

簡単に叶えられるかつ美味な夢を探す。

そんな怪異の対処法は、もとより存在しないのか。

「じゃから、平和主義のあの小僧のように言うのなら、話し合いじゃ。それでも駄目なら、もうバトルしか手段はないと思う」

「バトル……」

「あの馬を、降参するまで甚振り、もとある場所に還すか。あるいは、エナジードレインで存在ごと吸い尽くすか」

「どちらにしろ、戦うんだな」

「お前様が死んでも良いのなら、戦う必要はないぞ」

しかしまあ、と忍は苦笑する。

「お前様が死ねば、儂も死ぬのじゃがな」

「……」

「それに、もう『取引』はしたじやろう?」

取引。

駆け引き。

ゲーム。

自ら平和主義だと言った忍野メメがしていたように、僕は夢喰い馬と取引をした。

今夜羽川翼の夢を喰うのを諦めてほしい……と。

代わりに今夜は僕の夢を喰え……と。

しかし、力を増した馬に夢を食べさせるということは、死ぬことと同じだ。

対象者は耐え切れず死んでしまうだろう。

だから僕は、取引をした。

馬は了承した。

でも僕は、もちろん今夜夢を喰われるつもりはない。

話し合いが駄目なら。

戦うしかない。

「お前様よ、忘れないでほしいことがある」

「何だ？」

「あやつは、軽薄な小僧ではない」

「……分かつてるよ」

「いや。軽薄な小僧でないからこそ、それ以上ということを、忘れないでほしい」

今、馬は忍野メメに化けている。

願いを叶える為に、その姿をとっている。

いや、とつていた、と言うべきか。

忍が言うには化けているのは見た目だけではないのだ。

内面まで。

内側まで、忍野メメなのだ。

喋り方だけではなく、性格だけではなく。

僕たちの思い描いた忍野メメが、具現化したものだ。

だから、馬は戦場ヶ原の質問には答えられなかった。

僕達が知らないことは、馬も知らないのだ。そこまで化けることはできない。いくら、忍野そっくりとはいっても。

僕は、黙って頷いた。

忍はにやり、と吸血鬼独特の笑みを浮かべて。

僕に訊いてきた。

「お前様、どこへ、何をしに行くのかな」

「廢ビルに、馬と戦いに」

「何のために」

「羽川や、戦場ヶ原……みんなのために、お前のために」

「は。やはり我があるじ様は、他人のためにと言うのじやな——自分の命を投げ出すことに何の躊躇いもないようじや」

ああ嫌じゃ嫌じゃ、と忍は笑う。

お前の時だって、そうだった。

自分の命を投げ出してまで、僕は忍を救おうとした。

でもそれは。

美しくはあっても、正しくはないのだけれど。

「なら、儂もついて行くしかないじゃろうな」

「……」緒に戦つてくれるのか」

「全く、儂は別にお前様について行きたくはないのじゃぞ。我があるじ様がダメージをくらうと儂ももろにダイレクトにそれが伝わってしまうから、仕方なく、あらかじめ、嫌々ながら参戦するだけなのじゃからな。別に、お前様が心配じゃからとか、お前様一人じゃあの怪異には立ち向かえんとか、そんなことは微塵も考えておらんのじゃからな

「……お前も立派なツンデレ娘だよ」

とにもかくにも。

対忍野メメ。

対夢喰い馬戦に向けて。

僕達は、塾に辿り着き。

戦鬪の準備を整えた。

## 其の拾伍

015

準備をするのに、敵の目があるというのは落ち着かなかつた。

僕が吸血鬼と化し。

忍が吸血鬼と化す方法は簡単だ——忍が僕の血を吸えばいいのである。

そうすれば、忍は吸血鬼としての力をいくらか取り戻せるし、僕も吸血鬼としての人から外れた力を同時に得ることになる。

ただ、家や道端で血を吸わせるわけにはいかない——目撃者がいては困るからだ。

仮にそれを見た人がいたとして、それは精々町の噂になる程度だろうけど。

街談巷説。都市伝説。道聴塗説。

用心に用心を重ねて、塾の一階で僕達は準備をするつもりだった。

ところが、その一階に、僕達が準備をしようと考えていたその場所に、忍野メメの姿があつたのだ。

見透かしたような顔をして。

「へえ。阿良々木くん、僕には君が何をするつもりか分かるぜ」



「……そうかよ」

「話し合いで解決しようなんぞ、怪異相手にはやめた方がいいね。特に僕の場合はさ。」

今の僕は、人の話を聞く気なんてさらさらないんだから」

さすが、イメージが具現化した怪異、僕の考えてることなど忍野のように分かっ  
てしまふということか。

でも、やはり。

忍野とは違う。

「いやあ、僕は平和主義者なのに、戦いを好むなんて矛盾してるね」

「おい、馬。忍野でもないのにその口調はやめろ」

「んー、好きでこんな口調でいるわけじゃないんだけどね。」

でも、好きでこの姿でいるかな。この人間の体は丈夫だね。こんなに力を蓄えてい  
ても、崩れないんだから」

蓄えている。

やはり、馬は今力を増している。

「阿良々木くんの取引どおりだよ。今夜委員長ちゃんは諦める、だけど代わりに阿良々  
木くんの願いを叶える。」

「一步も譲らないし、それ以上も求めない」

「……」

「で？ 僕は今夜阿良々木くんの夢を叶えるつもりだけど？ それを変えるつもりも無いけど」

「夢を叶えるんじゃないだろ。夢を食べて、お前の腹が満たされる

だけだ」

「そういう言い方もできるね。」

「だってさ、人間側にばつか得だったら駄目じゃない。バランスが大事なんだよ——」

と。

さながら忍野のように、馬は言ったのだった。

「相手の夢を叶えると同時に、こちらもお腹いっぱいになる。これでバランスがとれるわけだ」

「……叶えちゃいないだろ」

「あ？」

途端、馬の声がからりと変わった。

それは、忍野のものだったが。

恐ろしい声だった。

「叶えちゃいないだつて？ 聞き捨てならないなあ。

阿良々木くん。僕はこれでも」

相手はにやりと笑った。

「阿良々木くんが、とてつもなく嫌いなんだよ」

ツンデレでもなんでもない、憎しみのこもった声で、それも忍野の声で、馬は言ったのだった。

よくもまあ笑いながらそんなことが言えるものだ。

「きみは、報いを受ける必要がある、だろう？」

夢喰い馬。

夢喰い魔。

報い馬。

報い。

確かそれには……どんな意味が、あるんだつたか。

「報いを受ける必要がある者が、当たり前のように願うんじゃないつつつてんだよ」

「……」

願いを叶えてもらう対象者とは。

願いがある者。

馬の損にならない願いをする者。  
報いを受ける者。

本来なら、叶えてもらう資格などない者。

これは、家を出るときに忍から訊いたことだ。

つまり、当てはまるのは、僕。

「阿良々木くん。きみは、僕達に関わりすぎた。

きみは、片足どころか半身を突っ込んだようなものだ。まったく、元気がいいよね。  
僕達に関わって、きみは何を得た」

「……」

「何も、とは言わせないよ。

落ちこぼれだったきみは、友人を得て、恋人を得た。怪異の知識や経験が増えたなんて、抜かしたことを考えてるかもしれないが」

肩をすくめて、僕の隣に立っている忍を見、そして再び僕を見た。

「きみが、今夜夢を食べてほしいと言うなら、僕は喜んで食べてやろう。

食べてほしくないと言うなら、僕は味わって食べてやろう。

君が防衛するのなら、僕は攻撃する。

誰かが言っただけだったわけ？ 言葉が通じないのなら、戦争しかないって」

「少なくとも、お前じゃないだろ」

かの戦場ヶ原ひたぎは、「戦争をしましょう」という発言をしたにはしたが、彼女には、言葉が通じたために暴力沙汰になることはなかった。

だがこの目の前にいる男は、人間ではない。

お願いできないなら、危険思想に手を出すしかない——つてか。

「おしやべりが過ぎたかな。さっさと準備したどう？」

それは、彼が戦闘しかしないということだろう。

馬は話し合うつもりはなさそうだ。

僕もみすみす死ぬわけにはいかない。

僕がこいつを何とかしないと、羽川が危ないのだ。

それだけではない、他のみんなもどうなることか。

僕と忍が準備をしている間——つまりは、僕と忍が座って抱き合うような形をとり、忍が僕の血を吸っている間という意味だが、馬は壁にもたれ、気楽そうに片足をぶらぶらさせながら、そしてむかつく笑みを浮かべながら、また話しかけてくるのだった。

「そういや、僕がいなくなつたあと、何か他に関わつたのかい」

「お前は忍野じゃないだろ」

「ああ、忍野メメがいなくなつたあと、と言えよよかつたね。いや、知識や記憶はそいつ

のものでも、彼が知らないことは、知らないんだよ」

「そうか……」

馬が忍野の姿をとっているのはいわゆる願いを叶えて——夢を食べていないからだろうが、それまでは対象者の思ったとおりの姿でいるということ、決して他の姿を取れないということではないのだが。

「いや。囲い火蜂つていうのに妹が憑かれたくらいで、あとは何も」

「囲い火蜂。囲い火蜂ねえ。ふうん」

何か思うことがあるのだろうか、相手は目を細める。

本当に忍野みたいな奴だ。

いや、もしかしたら実際は何も思うことなどないのかもしれない。

忍野がこういう時、『思わせぶりな態度をとること』が僕達にとつての忍野のイメージだから、その真似をしているだけにすぎないのだ。

「……随分と余裕だな」

「どういう意味だい」

「僕は夢を喰われる気なんてさらさらないからこうして準備してるわけだけど……お前は、それを馬鹿みたいに待つ必要なんて、ないじゃないか」

「おいおい、随分と余裕なのは阿良々木くんの方じゃないのかい？」

僕はね、食事前の運動とはいっても、適当にだらだらするつもりなんかないんだよ。しつかりと準備して、思い切り体を動かす。それに、正当防衛する者には正当に攻撃するだけさ」

「お前も、ずつと退屈してたんだな」

それだけ、本気ということか。

「そういえば、馬」

「何だい、阿良々木くん」

「僕は、怪異の知識や経験が増えたなんて、ちつとも思っていない」

忍の肩を軽く叩いて、僕は立ち上がる。

ぎりぎりまで、限界まで血を吸ってもらったから、体がふらつく。

これほどの量を吸わせたのは、これほどの吸血鬼性を取り戻したのは、ゴールドンウィークの猫のとき以来だろうか。

「こうしてお前と戦わなくちゃいけないんだから、むしろ、僕はお前達のことを全く分かっている」

続いて、忍が立ち上がった。

「くだらんことをべらべらと、うるさい馬じやな」

その声は、幼い舌足らずなものではない。

僕の血を吸った忍野忍は、見た目八歳の幼女から、見た目十八歳くらいの少女の姿になっていった。僕の血を吸ったその分だけ、忍も吸血鬼としての力をいくらか取り戻すのだ。

先日、和服を着用し気に入ったのだろう、今の彼女は着物姿だった。ただ着物とは言っても月火のものとは違う、随分とアレレンジされている。動きやすい：戦いやすい格好だったし、髪型はポニーテイルではあったが、リボンやゴムではなく簪でとめている。元貴族というだけあって、全体的にゴージャスだった。もう金や黒や赤で飾られまくりだ。眩しすぎんだよ。

「準備はできたみたいだね。阿良々木くんは代わり映えしないけど、見違えたよ、忍ちゃん。でも馬子にも衣装って感じじゃない？」

「かか、馬子とはまた面白いの。儂が馬子でも、馬はうぬじやろうが——ならば我があるじ様は、うぬに乗る客というところか」

そして、忍は相手を睨む。

本気で睨めば、壁どころか建物も吹っ飛ばす三白眼。

「うぬが我があるじ様を殺そうとすれば、儂もうぬを殺すじやろうよ」

だがそんな脅しに何も感じないのか、馬は肩をすくめただけだった。

「降参するなら今のうちじゃぞ」



「はっはー、笑わせるねえ。それはこっちの台詞だよ——まあやれるだけやってごらんよ。まあ無理だと思っけどね。今の忍ちゃんは、フルパワーモードではないもの。いくら阿良々木くんの血を吸ったところで、まあ僕には勝てないんだけどね」

それじゃ、行こうか、と。

慣れた風に、馬は階段を上り始めた。どこへ向かおうとしているか、聞かずとも分かっていた。

猿とのバトルに使った、二階の教室だ。

僕も忍も今はほとんど怪異のようなものだし、戦いの場にふさわしいのはそこしかないと思っていた。

神原の猿で思い出したが、これは猿、否、悪魔とのバトルの、延長線上のようなものだろう。

対処法こそ違えど、あれは、願いを叶える怪異だった。

悪魔に願った神原は、願いを叶えてもらった。

だが今回僕達が願ったのは、馬だ。

同じ願いを叶える怪異なら、戦場ヶ原の蟹の方が近いかもしれない。

神のごとき存在、上位の存在。

悪魔が願いを叶えるたびに神原と同化していったように。

馬は願いを叶えるたびに力を増す。

あんな夢こんな夢いっぱいあるけど。

みんなみんなみんな、叶えてくれる。

「それじゃ、僕はこれから悪意と敵意を持って、阿良々木くんと忍ちゃんを襲うわけだけ  
れど」

二階の一番奥の教室、その扉を開け、馬は先に中に這入って行った。

続いて僕と忍が這入る。

後ろ手で、僕は扉を閉めた。

内側からは絶対に開かない扉を。

全く光の差し込まない教室で、馬は言ったのだった。

吸血鬼の目で、見える、見える。

半笑いを浮かべた、中年の男が。

「きみ達も、悪意と敵意を持って僕と、忍野メメと戦え」

## 其の拾陸

016

戦鬪開始。

吸血鬼化するまで、気がつかなかつたことだったが、馬は殺気を発していた。その巨大な塊に、押し潰されそうになる。

こうして近くにいるだけで精一杯だ。

ギロチンカッターなんて比じゃない。

意思に反して背中を向けて逃げ出したくなるような力。

違うじゃないか。

こいつは忍野だなんて、どうして思ったのだろう。

こんな殺気、忍野は出したことなどなかったのだから——！

だがそんな中、忍はずい、と一歩前に出た。

こんな殺気も、彼女には何とも無いのだろうか。

「こゝは儂から行かせてもらうぞ、我があるじ様——」

動けなかつた僕をカバーするように。

彼女は、駆け出した。

先程まで穿いていた高級そうな草履（高級な草履って何だよ）や、足袋を脱いで、裸の格好だった。普通の人間ならリノリウムの上でそんな格好をしていたら怪我どころじゃ済まされないが、生憎彼女は吸血鬼、元怪異の王だ。

馬は忍野——プロフェツショナルを気取っているのか、自分から攻撃はしてこなかった。

忍は両手を刀の形にして、それは馬の頭に命中し、彼の頭部を爆散させた。はずだった。

僕の日でも到底追いつけない程の速さで、その攻撃は決まったはずだった。

だが、手刀が決まる直前、馬は跳んだのだ。

高くジャンプして、攻撃をかわした。

そして、その上。

忍の両腕を掴み、動きを封じて彼女を蹴り飛ばした。

その際、大根でも引っこ抜くかのように忍の両手首だけが彼の手に残っていた。

一瞬の出来事だった。

「ぐ、ぬ——！」

人間技じゃない！

着地した馬は、忍の手首が蒸発したのを見て（つまりは忍が回復したということだが）  
笑みを浮かべ、こちらを見る。

「——っ！」

気が付けば、彼は目の前に立っていた。

ズボンのポケットに手をつ突っ込んだまま、片足を上げてそれは僕の腹に命中する。

見えなかった。

避け切れなかった。

予想はしていたが、予想以上だった。

「か、は——！」

見れば、血を吐いていた。

自分の血が見えても、何の意味も無いっての。

「ふ、はは——！」

忍の笑い声がする。

笑う余裕は、彼女にはあるようだ。

楽しんでる。

「いいのう、夢喰い馬——吸血鬼と対等に戦えるとは、うぬもなかなか、」

後ろから馬目掛けて駆けた忍だったが、振り向きもせずに馬は拳を放つ。

頭部が爆散したのは、忍の方だった。

「対等だった？ 笑わせるねえ。」

君たちは、僕に戦いを挑む前から、負けと決まっていたんだよ。僕は、君たちに負けてはならない存在なんだから」

「はっ！」

体が再生した忍は笑う。

「笑わせるな、所詮人間から忘れられた怪異など」

だが、忍の攻撃は命中しない。

まんまと馬にかわされる。

何故だ。

どうして。

夢喰い馬は、そこまで強くない怪異、じゃなかったのか。

「う、おおおおおっ！」

僕だって、のんびり傍観してるわけにはいかない。

声を振り絞り、勇気を振り絞った。

僕も両手を手刀の形にして、忍と挟み撃ちするように馬に突進した。

だが、馬は僕の手を掴んだ。

否、僕の手を握り潰した。

忍も同様に。

指ではなく、手首が潰される。

火憐もタジタジだ。

驚愕して頭が真っ白になった僕に、容赦などするはずもなく、馬はそのままひよい、と僕を持ち上げて。

「な——!?!」

僕を持ち上げた、というのはもちろん片手で、である。

だが問題は、忍ももう片方の手で持ち上げられたということだ。

そして僕達は、勢いよく地面に叩きられた。

そうか。

遅ればせながら、ようやく僕は理解した。

戦闘は始まったばかりだったが、時すでに遅し。

決して強くなれない怪異ではない。

相手は、馬は忍野メメなのだ。

僕たちの思い描いた忍野メメが、具現化したものだ。

内面まで。

内側まで、忍野メメなのだ。

喋り方だけではなく、性格だけではなく。

記憶も、強さも……ということ。

地の利も、関係ない。

経験も、関係ない。

忍が言っていたのは、そういうことだったのか。

僕達のイメージした忍野メメの姿だから、馬はそれと同じ強さを誇るということ。

あるいは、それ以上の。

「畜生！」

「確かに僕は畜生の類でもあるけどね——怪異に対して使うなんて、本当阿良々木くんは元氣いいよね」

くそっ。

相手にはお喋りする余裕もあるってことじゃねえか！

それもそうか、まだ馬はノーダメージなのだ。

どうして僕はこうも自分でリスクを負ってしまふのだろう。

あの忍も攻撃を受けているのだから、相手の強さは計り知れない。

いくらフルパワーでないといっても、忍はそんな弱い存在などではないのだ。





本気を出せる相手がいて嬉しいのだろう。  
笑って笑って、笑いながら。

それでもつて攻撃を繰り出しながら。  
それらは全て、当たらない。

「本当、笑わせるよな——」

何分間繰り返しただろう。

三分は経っていたかも知れない。

やっと馬が眩いて、ふいにしやがんだ。

今だ、この隙を逃がすな。

すかさず拳を繰り出す僕だったが。

次の瞬間、僕は教室の黒板に頭を打ち付けていた。

何があつた。

あの一瞬で。

馬は左足を軸に、右足を勢いよく振り上げて回転したのだった。

火憐がやつてたカポエラか!?

彼女がやるより随分様になつてるけどさあ!

いや、少しカポエラとは違うか。火憐は逆立ちをしていたし——。

馬の足に僕は捕らわれて、そのまま吹っ飛ばされる……同時に、頭も吹っ飛んだ。それで記憶が飛んでいたのだ。

そうか、忍野は長身な方だから、逆立ちで足を回転させても僕や忍を掠める程度なわけだ。だから片足を軸に攻撃してきたのか。

僕を放った右足は、そのまま速度を下げず忍にもヒットしたのだろう。

忍は、扉に頭を打ち付けていた。

「言つたよね？ 阿良々木くん。僕はきみが大嫌いだつて」

ゆつくりと僕の方へ歩いてくる。

忍がすぐさま駆けつけるが、そのたびに馬に吹き飛ばされていた。

こちらを見たまま、全く余所見もせず、忍には攻撃をし続ける。

酷い絵面だ。

何て奴だよ。

ずるずる、と床に落ちた僕を見下して。

馬は、嫌な感じに頬を歪め、笑った。

「だから、殺しはしないけど何度でも死んでもらうよ」

いつぞやの猿を相手取ったときのように、僕の体にはぽっかり穴が開くことになった。

最初の蹴りは挨拶代わりだったのか。

今、相手の強さを理解した。

もう痛みに声も上がらない。

今回開いた穴は、腹部ではなく、胸部。

肺がなくなった。

呼吸ができない。

この手の攻撃が吸血鬼には有効……まったく、容赦ない。

いや、ここは心臓を狙わないでくれて感謝するべきところだろうか。

僕は、報いを受けるのか。

怪異に対する僕の行動が、夢喰い馬を怒らせた。

怪異から報酬を得て。

そして、その仕返しをされるのか。

「降参するなら、今のうちだよ」

降参も何も、僕は呼吸もできない状態なのだから、返事などできないのだが……。

いや、降参する気などない。

ふいに、戦場ヶ原の姿が浮かぶ。

走馬灯、ではないだろうが。

「阿良々木くん、確かめたいことがあるの」

数時間前、戦場ヶ原を家に送っている時。

「何だ」

「羽川さんの代わりに、まさか本当に夢を食べられるつもりじゃないでしょう」

「そんなつもりはないよ」

「……じゃあ、何をするつもりなの」

「……………」

彼女は、じつと僕を見つめる。

数秒間の沈黙。

そうか、僕が塾で馬と『取引』をしている間、戦場ヶ原はずっと黙ってたけど、何も思うことが無いわけではなかったのか。

「もし阿良々木くんがまた戦うというのだったら、それで阿良々木くんが死んでしまうようなことがあったら、」

一瞬、戦場ヶ原は唇を震わせたように見えた。

「私は、どうするんでしょうね」

彼女は、ただ、それだけ言った。

……想像したくなかった。

そうだ。

僕は死ぬわけにはいかない。

降参もできない。

みんなの為だけでなく。

僕自身の為にも。

戦わなくては。

戦うんだ！

「……おやおや」

やっと、と言うべきか。

僕の拳は馬の顔面に命中したのだった。

「まだそんな元気が残ってたのかい」

不気味な息が僕の拳にかかる。

鳥肌が立った。

「じゃあ、まだまだ本気を出せるってもんだね！」

これは、神原の猿の時の延長線上とは言ったが、違う。

春休みの地獄にも匹敵する。

馬の強さを理解したのは、ここからだった。

まず、両腕が破壊される。

次に、両足が破壊される。

この頃にはようやく肺も再生しかけていたが、四肢を破壊されては、何もできない。嫌でも、忍との出会いを思い出してしまう。

そして、首が破壊される。

その繰り返し。

五体が死んでは、再生する。

こちらが立ち上がる隙も与えない。

呼吸する暇も与えない。

されるがまま。

やられるがままだった。

あまりにも激しい攻撃に、僕は相手がどのようにして僕の体を破壊しているのか知ることができなかつたし、知りたくもなかつた。

「お前様！」

遠くの方で、忍の声があった。

無論、返事はできない。

そうだ、忍は。

彼女は僕の受けたダメージをそのまま受け取ってしまった——彼女は、無事なのか。

「儂のことなどどうでもよいわ！ それより、お前様、『あれ』を使うしか手段はないよ  
うじゃー！」

そう彼女は叫んだ。

『あれ』？

あれとは何だ。

エナジードレイン？

いや、まさか。

触れることさえできないのに、どうして牙を彼に突き立てることができようか。

それでは、あれ、とは。

そんな勝てるような武器を、僕達は持っていたか。

武器。

——そうか。

「何だい、阿良々木くん——このまま、死ねるところまで死ぬ気になったのかい？」

あんな思わせぶりな忍の発言が聞こえなかったのか、馬は何も抵抗しない僕に対して  
言った。

時間がない。



僕は黙っていたが、無言のまま、忍に念じた。行け、と。

言わなくても、相手には通じるらしい。

忍は、攻撃を受けている僕には見えなかったが、きつと。自分の腹に手をつっ込んだだろう。

そして、二メートルほどもある大太刀を取り出しただろう。

妖刀、『心渡』。

別名、怪異殺しで有名。

忍の虎の子のブレード、だ。

全盛期ほどの威力はもうないにしても、少なくとも怪異を切り倒す武器には相応しい。

最後の手段だ。

これに賭けるしか手は無い！

「——と」

そんな声がして、気が付けば、攻撃は止んでいた。やったか。

相手はぐらりと傾いて。

見れば、彼の左手首がなくなっていた。

忍の攻撃は当たったようだが、外れたと言ってもよかった。

忍が狙ったのは勿論心臓（この怪異にあるかは置いておいて）だろうから。

馬は辛うじて避けたのだ。顔を歪めて、自分の手首を見て笑う。

落ちた左手首は蒸発してしまった。

だが、相手は吸血鬼ではないから再生はしない。

相手は人間でもないから血も出なかった。

ただ、斬られた分、力が減るだけ。

だから、馬が繰り出してきた右手と左足からの攻撃のどちらも、辛うじてだが僕は避けることができた。

「ちっ！」

聞こえよがしな舌打ちが聞こえる。

忍は刀を構えた。

和服ということもあって、今回は随分と刀が様になっている。

馬は僕の攻撃を難なくかわし、忍のブレードをかわそうとジャンプし、空中でバク転を披露した。

今回は刃が髪の毛を掠る程度。

それでも、いける。

明らかに相手の動きは鈍っている。

ところが。

これからのことはまたあまりにも一瞬の出来事で、何が起こったのか気付くのに数秒を要した。

まず、僕の拳が（もう手刀にするとかそんなことを考えてる暇もなく）馬の腹に命中し、続けて僕は蹴りを繰り出そうとし。

忍は背後で大太刀を、軽いとは思えないそれを軽々と、優雅に踊るように相手に向けて。

それが、馬の首を切断するはずだった。

だが、馬は僕の足を残った右手で止め、そのまま僕は仰向けに地面に叩きつけられて踏みつられた。

一方で忍のブレードを振り返って唾え（！）、どうやったのか忍の手からそれを奪い取り、先程僕の攻撃を止めた右手でそれを持つ。

忍はいえ、察するに左腕で彼女の首根っこを絞め身動きができないようにしたのだろうか。

彼女の小さな息を詰まらせる音が聞こえた。

「しの、ぶ——」

「面倒だ。このまま忍ちゃんには死んでもらうよ」

「……！」

そんなことは不可能だ、とは言えなかった。

今、相手の手には心渡——怪異殺しがある。

っていうか、今さっきの動きの鈍さは、嘘だったのか。

緊張させて勝ち、

且つ油断させて、勝つ。

「怪異の王……旧ハートアンダーブレードは、自分の武器によって、そして僕の手によって消えていくんだね」

のんびりと、他人事のようにそう言つて。

ちやき、と刀を忍の首に近づけ、滑らせる。

首を絞められているからか、彼女は何も言わない。

「まあ、あくまでこの子はお邪魔虫だから……今すぐ阿良々木くんが降参すれば、忍ちゃんを殺すのは諦めてもいいよ？」

「僕が代わりに死ねば、ということか」

願いを叶える、だよ。とそこは断じてそう言う馬だった。

これは思いつきだけど、と馬は思い出したように話し出した。

「どうだろう、きみが忍ちゃんを諦めれば、僕もきみを諦めると言ったとしても、きみはそんなことには乗らないだろう?」

「もちろんだ」

「じゃあ阿良々木くん、きみは命を引き換えにしてもまた彼女を助けるのかい?」

「もちろん、そうだ」

もちろん、そうだろう。

そうしないわけがない。

すぐにでも降参しよう。

忍が今日死ぬのなら、僕の命も今日まででいい——彼女を助けられるのなら、僕は喜んで何度でも死ぬ。

「そうだね。それが阿良々木くんだよ。うん、その言葉が聞きたかったよ」

その声は、どこか遠くから聞こえた。

それもそのはず。

「はっはー」

いつの間にか、扉は開いていた。

内側からは決して開かないその扉が。

扉の向こうに、一人のチャライおっさんが。

苦笑いでこちらを見ていたのだった。

「随分とはしゃいでるねえ。こんな所でこんな時間に怪異もどきと怪異がこぞつてバトルかよ。本当にみんな元気いいなあ——」

先程までさんざん聞いていたのに、何故かとても懐かしい台詞だった。

そう言ったのは誰であろう。

本物の忍野メメだった。

「——何かいいことでもあったのかい？」

## 其の拾漆

017

誰も身動き一つしない。

僕は今どんな状況かも忘れて、扉の向こうからこちらへ歩いてくる忍野を見ていた。何でこいつ、ここにいるんだよ。

またここで偽者の忍野だったり怪異だったりしたら笑えないけど。

そんなことはない、こいつは本物。

何故なら。

馬の持っていた忍の大太刀を、どうやってか奪い取り、馬を教室の向こう端に吹っ飛ばしたのだ。

立ち上がる僕。

忍野は忍に心渡を返していた。

「やれやれ、」

首を振る忍野。

「どうしてこいつも阿良々木くんは、色んな怪異に関わっちゃうんだらうね。蛸足配線も

いいとこだ。本当、きみは——」

「……おい」

僕は相手を制した。

「お前……何でここにいるんだよ」

「ん？」

「今頃違う町で怪異のこと調べてるんだとばかり——」

「今はそんな場合じゃないだろう？ 全く、空気を読めないのかな阿良々木くんてば」

いや……空気読まずにべらべら喋ってたお前に言われたくねえよ。

「夢喰い馬。もう十分だろう。夜遊びもそこそこにしないとね。いい運動にはなっただろうから、別に損ではないんじゃない？」

「……願いは」

とつくに立ち上がってはいたものの、馬は動かなかった。

「願いはまだ、叶えていない」

「まだそんなこと言ってるのかい？」

分かっている癖にさあ。阿良々木くんは、君に願ったわけではないにしても、一応思っ  
てはいたさ。僕に会いたい——ってね。他にもそう思ってる子がいたみたいだし」

モテ期なのかね、と頭を搔く。



そんなことは絶対無いが。

「でもさ、『忍野メメはここにいる』。つまりは、『願いは叶った』ことに、ならないかい？」

「……………」

もしかしたら、忍野はだからここにいるのだろうか。

僕が怪異に絡んだことを知って、残った対策としてここに来た。

いや、まさか。

「……………黙れ」

もう馬に、忍野らしさなど微塵も残っていない。

こうして見比べると分かるのだが、僕達のイメージした忍野は随分と濃かったように、馬のアロハは本物よりも政治的主張の効いたド派手なものだったし、本物より小汚かった。いささか本物の方が顔立ちもいいし。

……………。

なんだか本物に申し訳ないな……………。

「僕は願う者を見つけ、叶えようとしたまでだ。それで参上したらお帰り下さいってか？　ふざけるなよ」

忍野の姿が歪み、黒く染まってゆく。

千變万化。

そしてそれは、馬のような、バクのような、いやこの世の生き物のどれとも言えない姿に変わったのだった。

蠶を持つ、左前足のない、黒い生き物。

夢喰い馬。

「ほらね」

一方で本物の忍野は笑う。

「もうきみがここにいる必要はなくなっちゃったってわけだ——そうして体ももとに戻っちゃったわけだし」

だがここで、諦めないのがプロとは違う。

唸り、嘶きながら怪異はこちらへ襲い掛かってきた。

僕目掛けて。

「う、うわっ——！」

僕は忍野に肘で突き飛ばされていた。

そんな僕をよそに、馬の正面に立った忍野は、今までに見たこともない鋭い目つきで、右手を挙げた。

何があったのだろう、皆目見当はつかないが、忍野の手に馬の鼻面が触れるや否や、電

撃が走ったかのように馬は地面に倒れ、震えているのだった。

その時に一瞬だけ感じたあの重い気は、果たして忍野のものだろうか……。

「諦めが悪い奴だね」

呟く忍野。

一瞬で怪異を吹っ飛ばしたり、片手で怪異を止めたり……本当に人間離れしてるよ、お前は……。

そして本物だ。

いくら馬が忍野に化けていても、その中身はあくまで怪異なのだ。

思い返せば、攻撃が外れたときに舌打ちをしたり、諦めずにぐずぐずしているなんて、どんなに忍野ぶってても本物はそんなことは決してしない。

なりきれていなかった。

これがプロとアマの違い。

本物と偽者の違い。

反俗と俗の違い。

「忍ちゃん、僕はこういうのとても嫌いなんだけど、サクつとやっちゃってよ」  
ぼつり、と真面目な顔つきで言う。

「やる……とっぴ……」

「おいおいとぼけるなよ、この怪異を強制返還させるんだよ。もといたところに還つてもらおう。怪異を斬つたところで、それ自体が死ぬわけじゃない——ただ、もといた場所に還るだけなんだ……力は、失うだろうけれど」

「そう……なのか？」

僕もそれは知らなかった。

「そうだよ。だからもし忍ちゃんを斬つたところで、忍ちゃんはこの場からいなくなつちやうけど、それは忍ちゃんという存在が消えただけで、怪異の存在は消えないだろう？ 忍ちゃんイコール吸血

鬼でも、吸血鬼イコール忍ちゃんってわけじゃないんだからさ」

「しかし忍野——」

言いかけて、やめた。

怪異に同情してどうする。

もう馬は、斬られて同然のことをしたのだから。

むしろ今回は僕達が同情されるべきなのだ。

そして既に忍は馬に近づいて、その首元に刃を当てているところだった。

「馬鹿にしたことで、僕は怒り狂つておる——本当は甚振り弄り殺してやりたいところじゃが、勘弁してやる」

うぬもよくやったよ、と忍は付け加えた。

相手は痙攣するだけだった。

忍野の攻撃が、まだ効いているのだろう。

「……覚悟」

振り下ろした刀は、夢喰い馬の胴を斬る。

怪異は悲痛な叫びをあげながら、数秒その場を駆けまわっていた。

悶絶躰地。

そして、刀を抜いたとき、もう馬の姿はなかった。

ばん、ばん。と。

忍野が軽く手を叩いていた。

「いやー、お疲れ様々。随分と大変だったみたいだね、元気してた？」

いつものへらへらした調子に戻っていた。

「おい……」

「僕もね、正直言つて観客として最後まで眺めておきたいバトルだったよ。まあ、今回のことはみんな身に染みたるうし、怪異の豆知識は忍ちゃん全部してくれたみたいだし、僕はこれでお役御免——」

「おい忍野」

くるりと背を向け歩き出した男に、僕は声を掛ける。

忍野は珍しく、ぴたりと足を止めた。

「何？」

「答えを聞いてないぞ。どうしてここにいるんだよ」

「さあ」

「さあつて……」

「ちつと、忘れ物をしちゃったのかな」

「はあ？」

お前がここに何を忘れるって言うんだよ。

アロハのスペアとかか？

「まあ、ここで過ごした数ヶ月、というかさ……」

ニヒルな感じに笑って、はぐらかすように肩をすくめて振り返る。

「阿良々木くんはまたも自分で勝手に助かつちやつたわけだよ、と言いたいところだけど——実は今回の一件は僕にもちよいと絡んでたんだよね……」

「え？」

まあ、ここじゃ話しにくいから、と外へ誘う忍野。

うーん。

別にそこまでやってことじゃないけれど、今僕は全裸に近い状態だからな……あまり明るい所で話はしたくないんだよな。

あとで物質創造スキルで服を作ってもらうしかない。

四階の一番左の教室。

忍は切腹の如く刀をしまい、僕は適当な服を作ってもらってから（最初、和服が現れたときは冗談だと思つた）だったので、随分と時間を食ってしまった。

忍野は椅子を三脚引つ張り出してきて、三つ並べてそこに仰向けに寝そべつた。  
つておい。

僕達の分じゃないのかよ。

仕方ない………続いて僕は椅子を二脚引つ張りだして、忍と座つた。

「いやあ、我が家に帰ってきたような感じがするよね」

とまあ、悲しい台詞を吐いてから。

忍野は、本題に入ったのだった。

「実はとある町で僕はあの夢喰い馬に遭つたんだ。どこぞの神社でさ。落ちぶれたものだったよ。神社が廃れるとその神はどっか別の所に移動するのがつきものなんだが、あれはどっかかと居座つてたんだよね……性悪怪異と言つたところか」

煙草を啜える。

火は付けない。

「それでも、僕は始めて見る怪異だったから、一応記録をしたんだけど、それでこの話はお終いのはずだったんだけど……あの怪異は僕に関わってきた」

自分からね、と忍野は言う。

「阿良々木くんみたいにおせっかいな怪異もいるんだな、無理やり願いを叶えようとしやがった。力が欲しかったんだろね。でも僕はもちろん、御祓いをしたさ。ちゃんと対応して、きちんと還した。ところがどっこい、あの馬、今度はきみ達に関わったんだね。僕がきちんとした対応をしてりゃ、こんなことにはならなかっただろう」

「そ、それじゃあ……」

忍野が原因、なのか。

実際、彼が馬に捉われていた。

今回僕達が怪異に関わったのは、忍野の所為でもあるのか。

じゃあ、僕もあながち勘違いをしていたという訳ではないんだな。

「全部自分達が悪い、というわけじゃないんだな」

「そゆこと。まあ、反省し過ぎていけないってことはないぜ。さつき、ツンデレちゃんに会ったけど、ずいぶんと後悔してるみたいだったね」



「戦場ヶ原に……会ったのか」

さつきね、と忍野。

「でもそのちよつと前には百合つ子ちゃんにも会ったし、もつと前には委員長ちゃんにも会ったよ。まあ、この二人とは特に話もしなかつたけどね——」

じゃあ。

羽川はもしかしたら、忍野に会っていたからこそ、今日あんなことが僕に言えたのかもしれない。

それに、八九寺が忍野を見たと言っていたが、あれも本物だったのかももしれない。

だとすれば——。

なんだ。

みんなの願いが、叶っているじゃないか——。

「まあ今回反省すべきは、僕なんだけどね」

言葉を濁す彼だったが、仰向けで言われても全く反省しているようには見えない。

「ある意味では、僕も期せずして願いが叶っちゃったことになるし——」

意味ありげな言葉を呟きながら、僕と忍をちらりと見る。

「忍ちゃん。どうやら和解したようだね。二人でタッグ組んでバトってるのを見るに、二人ともいい感じじゃない。ちよつと危なっかしいけど」

忍は、ふんと息を吐いた。

「心配には及ばんわ。うぬなんぞいなくとも、儂らが勝利を収めるはずじゃった」

……いや、なんか負け惜しみにも聞こえる。

今回は本当に危なかったぞ。

「今回はアレじゃ……弘法も木から落ちる、というアレじゃよ」

「弘法も筆の誤りつつつてんだろ！」

何なんだよ。

照れ隠しか何だか知らないけどよ。

だいたい何で弘法が木に登ってんだよ。

猿に筆をとられたか。

「はっはー、それは僕のことでもあるね。今回は、僕のミスだ。一步怪異の方に踏み込みすぎちまった。その責任はこうして取ったけど——遅すぎたんだらうね」

「何がだよ」

「きみ達に対して、僕は何も言わずにふらりと出かけちゃったから、みんな変に心残りがあつたわけだろう？ だから馬に関わる以前に、これは僕の所為なんだよ」

全部ね、と言う。

いや、それでもそれは。

お前自身の否定にはならないか。

「お前はもうここには帰ってこないと思ってたよ」

「嫌だなあ。僕は僕だよ、阿良々木くん。君の思ったとおり、みんなの思ったとおりに行動するはずないじゃない。意思に反する言動をしてこそ、僕は僕だと言えないかい？」

「……」

なるほど。

それはよく分かる。

馬は忍野そっくりではあったけれど、やっぱりイメージでできたものだったから、予想を外すようなことはしなかった。

だが本物は。

見事に裏切ってくれた。

ここに帰ってきて、はたまた怪異に対してミスを犯したとまで言う。

反俗精神の塊、と言うとまた意味は違ってくるけど。

「そんな格好いいものじゃないよ、阿良々木くん——僕はただの俗人で、俗物だ。風流を解さない、つまらない男だよ」

忍野は立ち上がった。

すたすたと足早に教室の扉へ向かう。

「……もう行くのか」

「うん、もう区切りはつけただろう？ 僕は結構多忙だね。これから某スタジオに収録

に行かなきゃなんだよ」

「千石のあれは一過性のネタじゃなかったのか!？」

「じゃあ怪異が関係なくてもこいつはここに寄る気でいたんだろうな……」。

「あ、思い出した。阿良々木くんには、妹がいるんだったね」

「ん?」

何だ、知ってたのか。

「あの二人に振り回されないように気をつけてね。きみが怪異に関わっちゃったんだから、少なくとも妹たちにも飛び火する可能性も考えて。個人的には下の妹をしつかり見張っててもらいたいよ」

そのアドバイスは有難いものだったが、もう少し早くに欲しかった。

火憐はもうすでに、それも文字通り飛び火してしまった。

まあ、月火はまだ無害、なのだが。

「おっと。こう忠告しても、意味無いんだっけ——阿良々木くん、明日になったらもう今日のこととは忘れてるだろうから」

「……………」

僕の記憶はそんなに悪くないぞ。

頭に手を突つ込まなくても思い出せるものはある。

「いやさ、これは夢喰い馬独特なんだけど、あの怪異に関わって願いが叶った者は、それまでの出来事は忘れちゃうんだよね——つまり、今回の場合だと、阿良々木くんは明日になつたら、今日関わった怪異のことも、もしかしたら僕のことも忘れる。そして忘れていることも忘れる。ゴールデンウィークの猫の時と、ちよつとばかし似ているが」

別に夢オチつてわけじゃないぜ、と忍野は続ける。

「馬は人間のストレスを喰うものだ、と言えば分かりやすいんじゃない？　ちよつとした悩みを寝ている間に食べて消してしまふ。ストレスの源がなくなれば、何に悩んでたかも忘れるじゃない」

「そんなものか？」

「そんなもんだよ。まあ、きみだけじゃなく、他にも忘れちゃう子はいるだろうね……それに、僕も」

何だろう、忍野の背が妙に寂しげに見えるのは、僕の錯覚なのだろうか。

じゃ、いい夢みなよ、と皮肉なのかそう言つて。

あとは何も言わず、忍野は行つてしまった。

僕に立ち上がる暇も与えなかった。

実にあっさりとしたものだった。

だがそれが、彼だろう。

あっさりしたと言えば、僕も実にあっさりとしたものだけけど。僕も、区切りはつけたのだ。

「……お前様」

「何だ、忍」

見れば、彼女は僕を睨むようにじっと見ていた。じっと。

「……何だよ」

「お前様、僕は疲れた。もうくたくたじゃ」

いや、吸血鬼は疲れない体だろう。

「体ではない。精神がもうズタズタなのじゃ」

「ああ……」

お前、今回あまりにも押されてたもんなあ。

案外、ストレスが溜まったのかもしれない。

さっきの忍野の例と間逆で面白いが。

「じゃから」

椅子から身を乗り出す忍。

「今夜は、一段階上の儀式を求めろ」

「……………」

えっと。

それは何でしたっけ。

「し、忍、それって確か、頭を撫でるじゃなくて、えっと」

「胸を撫でる、じゃ」

「……………」

忍がじりじりとこっちに近づいてくる。

何なんだこの状況——！

何だか着物が妙に色つぼいなあととは思っていたけれども！

ずっと伏せてきたけど！

本当に今日の忍は色つぼい！

「さあ」

吸血鬼特有の誘惑ボイスで。

簪がしゃらんと揺れて。

忍の顔が近づいてきて。

「さあ。さあ。さあ。さあさあさあさあさあさあ」  
耳元で囁かれる。

だ、駄目だ——！

大人ヴァージョンではないにせよ、今の忍は同じ年くらいの見た目なのだ。  
もう視線は一点に釘付けである。

これは儀式だから、浮気とかそんなのとはノーカンなんだよな？

吸血の行為だつて抱き合う形じゃないといけないんだから儀式が駄目なら吸血も駄目  
目つてことに——

いや！

いくら何でもこの儀式はまずい！

戦場ヶ原じゃなくても殺されるつて！

「……ふんっ」

立ち上がりそつぽを向く忍。

そしてしばらくして笑い出した。

落ち着いた、綺麗な笑い声だった。

「真に我が主様はヘタレでチキンじゃのう」

「……っせえよ」



こっちは色々な意味で死ぬかと思つたわ。

まさかお前から仕掛けてくるとは思わなかつたもん。

「だからこそ、儂はお前様と共にいるのじゃがな」

そうして帰宅するまでの数時間。

僕の今までのこの思い出を、僕の頭が憶えていたのは、その数時間までだった。

## 其の拾捌

018

後日談。というか今回のオチ。

翌日、いつものように二人の妹、火憐と月火に叩き起こされ、妙にすつきりとした頭で目覚めた僕は、とりあえず顔を洗おうと部屋を出かけたところで、携帯のメールの受信音が鳴った。

開いてみれば、羽川翼からだった。

要約すると、「今日は私の家庭教師はお休みにします、代わりに戦場ヶ原さんの家に行きなさい、絶対命令です」といったものだった。三回読み返して、読み間違いでないことに驚く。

メタな発言になるが、この時点でもう僕は昨日の怪異に関する出来事を一切忘れていたので、ここで羽川が家庭教師を休みにした理由は戦場ヶ原の家に行けば分かると思っていた。いや、これは彼女の気遣いだったのに、気付かなかった僕は今本当に申し訳ないと思う。

まあ、羽川には命令されなくても絶対に従うと決めている僕だから、朝食を済ませ、そ

れでも簡単な朝のドリルを済ませた後、僕はママチャリを従えて戦場ヶ原家へ向かったのだった。

「……………うおつと」

ここでびっくり、玉手箱。

曲がり角を曲がった途端、八九寺真宵が目に入ったのだ。

今回もまた、僕に背中を向けて歩いている。

「……………」

うーん。

戦場ヶ原は確か、今日は忙しいって言ってたしな……。ちよつとくらい寄り道してもいいか。

自転車をそっと止める僕。

これはきつと、天が最後に僕に与えたチャンスなんだろう。

遅すぎだぜ、神。

余計な前振りは省略で。

これで誰も文句は言わないだろう！

よし！

思い切り抱きつくぜ！

「はちく——」

だがここで、とんでもない転機が訪れる。

後ろから、遠慮がちに僕に声が掛かったのだ。

「こ、曆お兄ちゃん……?」

千石撫子の登場だった。

僕はぴたりと足を止める。

あと一メートルで、あと一メートルだったのに、またも僕はチャンスを逃してしまっ  
た!

これはきつと、天からの天罰だろう。

酷すぎるぜ、神。

今回は僕は八九寺を抱けないことが、決まっているようだった。

「そ、その格好どうしたの?」

僕は両手を広げた姿勢のままだった。

「えつと……光合成?」

「そつか。流石曆お兄ちゃん、地球のことをよく考えてるんだね」

「……お前は僕に突っ込みをくれないんだな……」

精一杯のギャグだったのに。

こんなのなかなか見れないぜ？

あーあ。

羽川の前でも示せなかった喜びを、最後の最後に八九寺の前でも示せなかった。

このシヨックは大きいぞ……。

「そうだよ、二酸化炭素を吸って酸素を出すような構造になれば、地球温暖化も防げるよ」

「僕の体を構成する物質の中には、葉緑体は入ってないぞ！」

緑色になっちゃうよ。

「あの……野良々木さん」

「八九寺。僕を農民が野良仕事をやる際に着る着物のような名前と呼ぶな。僕の名前は阿良々木だ」

僕の突っ込みを耳にしたのだろう。

八九寺真宵、正式に再登場だった。

おや、八九寺は人見知りじゃなかったっけ——と思う方もいるかも知れない。

ご安心していただきたい。

この小学生、僕の左足にダッコちゃんのようにしがみつきながら名前を噛みやがった。

そして同じく人見知りの千石は。

僕の右足に蛇のごとく巻きつくようにして八九寺を見ていた。

おいちよつと待て。

傍から見たらこんな怪しい画はないぞ——！

大体僕の体を壁にしても、隠れきれぬわけがない。

そこら辺いい加減気付いて欲しいものである。

「だつ、だだだだだ誰ですかっ!？」

右側から千石。

「そちらこそ、名前を名乗ってもいいでしょう！」

左側から八九寺。

何だか面白いのでこのまま眺めていたかったが、こんな真夏日にしがみつかれては暑苦しいつたらないので、とりあえず二人を引き剥がしてからお互いを紹介した。千石は、

「な、なんだ……子供かと思った」

と呟いた。

? いや、子供だけど。

よく分からないが、千石の頭の中で、とてつもない勘違いがされていたようだった。

一方で八九寺は、千石の名前を聞くなり、

「ははあ、このお方が」

と興味深そうな顔をしていた。

この時点で、八九寺もまた、昨日の忍野に関する一連の記憶は抹消されている。

ちなみに、話が逸れるが、僕が怪異に関わったこの出来事をどうやって思い出したかというところ、この日のメール主、羽川翼から話を聞いたのだ。

夢見てしまったことで自ら悔やみ、馬の犠牲にぎりぎりのところでなりかかった彼女は、僕達が忘れてもなお、怪異のことを憶えていたのだ。強いて言うなら、忍もである。

この二人から話を聞かされたときは、心底驚いたものだ。

「暦お兄ちゃん、どうしたの？　びっくりしてるみたいだよ」

千石から指摘。

いや、二人同時にぼったり出くわすとは思わなかったし。

「狐に包まれたような顔してるよ」

「狐には包まれたくないな」

狐につままれた、だ。

と今度は僕から指摘をしてみると、千石の奴、顔を真っ赤にして、

「あ、ま、間違えちゃった、あ、わあつ」

とパニくっていた。

そんなに恥ずかしかることもないと思うが……。

まあ最初はギャグで言ってるのかと思っただけ。

「落ち着いてください千石さん。こういうときは、わたしの奥義を使うのです」

「お、おうぎ?」

多分、千石の頭の中には仰ぐ扇が出ているのだろうなあと思いつつ。

「何ですか。私の奥義をご存じないのですね。それではお手本をお見せしましょう」

「こほん、と咳払いを一つ。」

「あの、きさら木さん」

「僕を二月の別称で呼ぶな。今はまだ冬じゃねえよ。僕の名前は阿良々木だ」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ……」

「噛みまみた」

「わざとじゃないっ!?!」

「鍵開いた」

「鍵マニアの続きが!?!」

おっといけない。



見れば千石は、しゃがみ込んでいた。

大ダメージのようだった。

笑壺に嵌まりすぎている。

「えーつと……千石？」

「あ、相変わらず……お、面白い……」

喜んでいただけで何よりです。

一方で得意げな八九寺は、

「まあ、こんな感じで噛んだ時は誤魔化せばよいのですよ」

と、言うのだった。

いくらなんでもこれはハードル高すぎだと思うが。

そして、やがて立ち上がった千石の目は、涙で潤んでいた。

そこまでウケてたのか……。

やりがいを感じなくもないけど。

「撫子も、やってみる……」

あれ、何かやる気に満ちた声で宣言してるぞ。

かよわい中学生に、いらぬ機能を搭載してしまったようだ。

スキル・八九寺語。

「えっと、日読みお兄ちゃん」

「意味的には僕の名前と同じだがしかし千石、僕の名前は阿良々木曆だ」

うわ！

超惜しい！

そして初心者にしては上手いぞ!?

ほっ、とため息をつく千石。

やはり相当なプレッシャーはあつたようだ。

「ご、ごめんなさい、噛みました」

「違う、わざとだ……」

「ご、ごめんなさい」

「……………」

謝られてしまった……。

申し訳なくなるな。

八九寺先生は少々お怒りの様子で、

「違いますっ！ そうじゃありませんっ！

謝るなら謝るで、噛むならちゃんと噛んで

下さいっ！」

と、千石に言うのだった。

またこいつは何で怒ってるのか分からないぞ。

すると千石、何かを学んだのか、恐る恐る僕を見上げた。

「い、ごめんね☆」

「ごめんね☆ じゃねえよ！ 可愛いけど何の誤魔化しにもなってねえんだよ！」  
全く。

話が進まない。

「ところで千石、今日はどうした？ 朝から散歩か？」

「う、ううん、違うよ」

ふるふると頭を振る。

彼女はいつもと違って、手提げの袋を持っていた。

「ほら、DS持ってきたよ」

「……」

すっかり忘れていた。

恐る恐る、といった風に差し出された袋の中身は、DSのパッケージと、そのソフト。

「お、ソフトまで貸してくれんのか」

「うん。た、大切に使ってね？」

年季の入ってるものを想像していたのだが、扱いがいいのだろうか、パッケージもソ

フトも、新品同様といった感じで、傷一つ無かった。

僕も恐る恐る、バッグにしまう。

「悪いな……なんか僕にできることがあつたら、何でも言えよな」

「う、うん。それで、撫子頼みがあるんだけど……」

何だこの手際のよさ……。

前もって僕の言うことを把握していたかのような。

「何だ？ 頼みって」

「う、うん……あとで、撫子のうちに来てくれる？ そうしたら、言うから」

あ、そっか。

八九寺がいるから、言いたくも言えないんだな。

まあ今日はうまくいけば午後は空いているだろうし、お邪魔するとしよう。

「ほほう……DSとは、千石さんはゲームにお詳しいようですね」

嫌な感じに笑う八九寺。

いや、実際そうだけど、それでもDS持つてるだけでゲームに詳しいとか、分からない

いだろ……。

「わたしはアルカノイドが好きですが」

「時代が違いすぎる！」

何十年前のゲームだよ！

とうかそれはアーケードゲームだし、お前その年でプレイできるのか？

「うん、ブロック崩しのやつだよね、知ってる……」

千石は千石で知ってるんだ……。

しかも目キラキラさせて言うなよ。

どこの世代に呼びかけてるんだ、全く。

そのまましばらく二人は話の花を咲かせ（アルカノイドで盛り上がる小学生と中学生）、ふいに思い出したように八九寺が僕に言う。

「そっかええすめら木さん」

「僕を地方豪族の首長のように呼ぶな。僕の名前は阿良々木だ」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ」

「噛みまみた」

「はい、ストツプ」

これ以上やると千石が笑い死にする。

今の時点でまたお腹を抱えてふるふる震えているのだから。

「今日は阿良々木さんはいかがなされたのですか」

「ん」

「わたしをハグれなくって、凹んでいる様に見えます」

「ハグるって!」

動詞として活用しちゃった!

なんだか道にはぐれるって感じもあって、八九寺っぽい言葉でナイス。

そういえば八九寺の奴、本作で一番登場してるとか言っていたが、実際違うよな。年上に譲ったのだろうか。

言わせてもらえば、忘れてるかもしれないけど、一番多いのは僕だからな!

「はぐる?」

不思議そうな顔の千石。

「千石さんは知らない方が身のためです。それに、話したところで理解していただけたとは思えませんし、信じていただけないと思います。まあ、馬の耳にも真珠とは言ったものです」

「馬の耳に念仏だろ!?!」

馬の耳から真珠がとれるのか!?

馬というワードになぜか少し引つかかりながら突っ込む。

いや、でもハグの件は知られると色々まずいよな。

僕と八九寺の間では当たり前のことでも、他人からすりやドン引きものだろう。

「いえ阿良々木さん、当たり前前だと思っっているのは阿良々木さんただ一人だと思いますが……」

それで、今日はどんなご予定で。と八九寺は話を戻した。

「ああ、羽川からのメールで、戦場ヶ原の所へ行くように……だつてさ」

「そうなんですか」

眉をぴくりと動かし、ちらりと千石を見る八九寺。

何を察したのか小学生、うんうんと頷いて。

「分かりました。ここはわたしが何とかしましょう」

と謎な台詞を呟き。

八九寺は、きりりとした目で千石を見た。

「千石さん。お暇でしたらどうでしょう、今日は私と遊びませんか？」

「？」

おお……。

あの八九寺、人見知り属性の八九寺の台詞とは思えない。

というか僕だつて言われたいぞ、それ！

「阿良々木さんは午前中忙しいようですし、私、千石さんと色々お話がしたいです」

「……………？　べ、別にいいよ？」

あ、そっか。

このままいけば、僕は戦場ヶ原家に女子二人を連れて上がりこむところだったのか。ふしだらにも程があるな。

流石八九寺、そこを察して僕を一人にしようとしているんだな。

いやしかし、いくら僕でも戦場ヶ原家に到着する前には二人と別れるつもりだっただぞ。

……それとも、それ以前に危ない問題があるのだろうか。

「これでわたしは世界を救いました……」

という彼女の台詞は、いささか度が過ぎているとは思うし。

そうして僕は、再度自転車に跨って、千石にはあとで必ず迎えに行くといってから、二人と別れたのだった。

民倉荘。

ノックをしても返事はない。

戦場ヶ原家の扉は、例によって鍵がかかかっていなかった。

今日は平日だし、戦場ヶ原家はいないであろうということもあり、いくらか自信を持ってドアを開け、とりあえず「お邪魔します」と言つて上がりこもうとした時。



一瞬、家を間違えたのかと思った。

その際驚いて「おじや……」と平安の貴っぽい口調になってしまったのは無視する方向で。

ここは、確かに二〇一号室だよな？

六畳の部屋に、一人の女子高校生の姿はあつた。

だが、その女子がもし戦場ヶ原だとするならば、戦場ヶ原であると仮定して言うならば、彼女は、髪を切っていた。

シヨートカット。

前髪ももう直線ではない、シャギーカットで。

そして夏らしい私服。

幾分かスカートの方が短くなつているところに気付くのは男では長く付き合つてい  
る僕くらいだろう。

振り返れば、できることならば、髪を切つていたという文に傍点を振つて、太字斜体  
にして表記したいものだった。

まあそれでも表現しきれないだろう。

さらに振り返れば、昨日戦場ヶ原が調子が変わつたのは、怪異による夢の所為だけで  
はなかつたのだと、今の僕は思うのだが。

もう驚倒した。

羽川が髪を切ったときも、こんなには驚かなかつた。

その女子は。

いや僕の彼女は。

僕に気付かないはずもなく、ゆっくり立ち上がって僕を見つめた。

「……阿良々木くん」

「……………」

声が出ない。

戦場ヶ原の声は、幾分か甘く、ゆったりとしていた。

「失恋で髪を切る女子がいるのなら、恋のために髪を切る女子がいてもいいでしょう？」

失恋で髪を切ったのはもちろん羽川のことだ。

恋のために髪を切ったのは、もちろん戦場ヶ原。

やばい。

やべえよ。

可愛すぎる。

もう蕩れまくりだ。

できれば蕩れのさらに上の漢字で表現したいのだが、生憎僕は漢字が苦手だ。

薪なら思いついたが。

草冠に「新」って……確かにこの髪型チェンジは新しいけどさ。

それから戦場ヶ原は無言で立ち上がった。

みし、と床が軋む音がして。

気付けば僕は玄関の扉に張り付いていた。

それを見て、彼女はがちゃん、と鍵をかける。

僕の心臓はばくばくだったし、戦場ヶ原は藐藐ぼくぼく（美しいことを言うんだっか）だった。

た。

ていうか、混乱しているのが自分でも分かる。

最後の最後に天罰が下るわけではないらしい。

神に感謝だ。

戦場ヶ原はゆっくりと、それこそ何も言わずに僕に顔を近づけてくる。

ここからは、もう語る必要などないだろう。

語るも野暮、聞くも野暮だ。

ありきたりな終わり方で申し訳ないけれど、邪魔だけはしないでほしい。

できれば、二人きりにしてもらいたい。

手が、優しく僕の肩に置かれる。

いい香りがして。  
僕は、目を閉じた。

## あとがき

あとがきまで原作通り忠実にするつもりは私にはありません。

※以下、当初書き上げたときのあとかぎです

なんとか書き上げました、俗物語でした。ええと、自分は楓麟ふうりんと申します。

この物語で言いたかったことを挙げるとするならば、「みんなが思ってる忍野って何!？」でしょうか。

ここからは、くだらないことをだらだら書いていきますので（本編では、肩の力を入れすぎて力が抜けなかったのです）、そこまで重要なことも書かないのですつとばして下さってもかまいません。

今回、化物語二次創作を書こうと思うまでの経緯を簡単に説明させていただきますと、はじまりは、怪異を思いついたことからでした。

怪異Ⅱ夢を食べる強い奴↓バク↓バクつて英語でどう書くの?↓逃げ↓あ、バクつてウマ目バク科なんだ↓ウマ目↓めめホースⅡ!

とまあくだらない洒落でございます。

しかし怪異を思いついても題名はどうしたものか、と考えて。とりあえず人偏のものをということとで俗に。

俗はなんだか続編っぽいし（絶望先生でもあったような）、ありきたりなオチを考えるにはびつたりかな、と。

これは題名を決めて知ったのですが、『ばけもの』『にせもの』と同様に、『きずもの』という単語もあるんですね…。知らないまま、『ぞくもの』という単語はないけど『きずもの』があるしいいや！ と思って『俗物語』になりました。ちなみに『ぞくぶつ』という単語はあります。

しかしまあ怪異とタイトルを思いついてもあの魅力あるキャラをどう描いたものか、と考えて。

とりあえず原作を読み直し。

DVDを見て。

副音声を聞いて。——！

今回は副音声を語る！

といった感じです。

何だかメタメタなのは、これが原因です。

何でしょう、「全てのキャラがメタ発言」という変な目標を一人で掲げ、あの羽川さん

までその犠牲者になってしまったのでした（……まあ、正確には一人、メタ発言してない人がいるんですが）。

全てのキャラを均等に出す予定が、やはり趣味が入って好きな子が結構でしゃばってしまいました（誰かは言うまでもありませんよね、ツンドロと金髪です）。そして苦手な子は扱いが酷いことになり（撫子ではないと断言しますが、彼女は扱いが難しかった）、フアンの皆様には申し訳ない限りです。

そして私は忍野君が嫌いなのです。振り返ればよくもまあこいつを軸に話が書けたなあと思いますが。

ここで少しくライマックスシーンの余談ですが（ネタバレですので、本当にこの後ネタバレしますので、読んでない方は戻ったほうが良いかと）。

今はあんなオチで終わっていませんが、一番最初に考えたものはひどいものでした。

時期を冬にして、流石の忍野も冬にアロハは着ないからこいつは偽者、といったオチだったのです（!?)

それに比べれば、まあ、いい感じに終われたかな、と思っておりますが。

『俗』物語ということで、最後はありがちな終わり方にしようと思っただけであんな感じになりました。

偽物語の間の話なので、俗だけでなく偽者と本物、についても書きたかったのであ

な感じになりました。

できれば、何度も読み直してもらえれば……色々と伏線や繰り返しギャグに気付いていただければ、そして、俗ワード（別に俗、とつかわれてるわけではなく、当たり前とか、ありきたりとかそんなワードです）に気付いていただければ、もつと楽しめるのではないかと自負しております。

しかし、（最終更新時）ユニーク：21，574 PV：4，000 と、一人あたり約五回繰り返し読んで下さっていることになりますから本当、びっくりしました。

そして、この場をお借りして。

下書きを読んで下さった友人の皆様、忙しい中読んでくださってありがとうございます。また、にじファン閉鎖後、ツイッターでメール配信を希望して下さった皆様。いろいろ不備がありました、読んでくださって心から感謝しております。

執筆中に感想を下さったテイクさま、謙さま。本当に励みになりました。感想だけでなく、誤字のご指摘までして頂いて、本当に感謝しています。

評価して下さった方々、お気に入り登録して下さった方々。とても嬉しかったです。頑張ろう、という気持ちになりました。

最後になりますが、二ヶ月あまりでしたが、本当に楽しかったです。

拙い文、短い作品でしたが、これが学生の限界です……！



今まで読んでくださった方々、そしてこれから読んでくださる方々へ。  
この俗な物語を、少しでも楽しんで読んで頂けたのなら幸いです。